地名研究会報　第5号

昭和59(1984)年9月2日

鹿児島地名研究会

I. 第5回例会　6月3日. 教職員互助組合会館小会議室

(出会者)池田信夫・江ノ口汎生・江平　望・小川亥三郎・片岡八郎・唐鎌祐洋・桐野利彦・木場武則・永山微弥・羽島サチ・原口　泉・肥後芳久・平田信芳・藤浪三千尋・本田親虎・松田　誠・山口静也・山田慶晴(計18名)

II. 「薩藩名勝考」読会. P.12〜P.14.

〔話題となった地名および事項〕 ―― 屯田・清水・甲突川・伊敷

屯田(ドンタ)

江ノ口　この屯田の遺称地というのはあるわけですか。

平田　屯田というのは、立野(タテノ)。長田町あたりのことではないのですか。この云い伝えは残ってるのですかね。屯田というのは、子供の頃、聞いたようなことはあるんですが。

江ノ口　これは「ドンタ」とルビが振ってあるけれども、普通は「屯田(ミタ)」という訓みですね。

平田　ミヤケ(屯倉)というふうな訓みをするのであったら、ミヤケの名が残るはず。ドンタと云うのだったら、結局、音読してるわけですから、これは、おかしいなと云うことになるんじゃないでしょうか。しかし、「ドンタ」というのが、そのまま残っておれば、別の考え方をしなければいけないのではないか。その意味は判りませんが。

江ノ口　この出自を当ってみたのですが、屯田(ミタ)という訳をしていますよね。屯田(ミタ)と屯倉(ミヤケ)は、別に書いてあります。仁徳紀に「額田王・中津彦王、大和屯田および屯倉をつかさどらんとて」と云うような書き方をしています。

平田　「ドンタ」と云う云い方がある限り、「ミタ」で考えなくて、ドンタというのはなにかと云うことを考えなければいけないのではないか。

清水(シミズ)

平田　清水(シミズ)と清水(キヨミズ)と、鹿児島県下には二通りあるんですが。例えば、川辺はキヨミズ、国分もキヨミズ。鹿児島はシミズですね。シミズとキヨミズは、広辞苑なんかを引きますと、ほとんど説明が変らないのです。それで考えるところは、シミズというのは泉で、きれいな水が湧いて来るところ、キヨミズというのは清い川の流れと云ったような、そのニュアンスで、シミズとキヨミズは分れているようです。

本田　鹿児島の清水は、昔からシミズと云うわけですか。

平田　清水馬場(シミズババ)と云いますがね。

本田　明治になってから云ったかも知れんけど、その前はどうですか。

平田　そうですね、あの辺の水は仁王堂水(ニオウドウミズ)と云いますね。

本田　人の苗字なんかは、例えば清水(キヨミズ)姓がありますかね。この頃なってから、シミズなんて呼ぶような場合があるんですがね。

平田　むかし、キヨミズと云って、今はシミズですか。

本田　私どもの部落に、私よりも一年下に、キヨミズなにがしと云う者が居ったのですが、終戦後、全部シミズと読みかえています。

平田　読み方を変えたのですね。

本田　勝手にそのように読み方を変えています。皆、シミズさん、シミズさんと云うようになった。

平田　今は、キヨミズという読み方は、ほとんどしませんので、そのように変えたのでしょうね。キヨミズとシミズという姓はあって当然だと思うのですけれども。

原口　大島の瀬戸内町では「セイスイ」と云っているようです。これは地名ですが。

平田　それは完全な音読ですよね。

原口　そうですね。

平田　結局、あのー、音読の地名というのは、わりと歴史が新しいのではないかと、私は思うのですけども。

原口　大島のはそうでなくて、以前にそういう地名があって、後でそういう漢字がくっついたのかも知れません。また、その語源は、なんとかという小字集にあったんですけども、ちょっと忘れました。漢字の方は、新しいかも知れません。

甲突川（コウツキガワ）；神月川

平田　甲突川；神月川。神さまの月が訛って「コウツキ」という川の名前になったというのは、薩藩名勝考・三国名勝図会・薩隅日地理纂考、すべてこれを踏襲しているのですが、今朝、ふと思い付きまして、「コウツキ」という地名が他にあるのかと、「日本地名索引」で調べてみました。上月（兵庫）・上槻（長崎）・高月（熊本）に、同じ音の地名があります。こういう地名があるわけですから、全国的な視野で「コウツキ」がなにを意味するのかを考えて行かねばならぬと思うのですが、兵庫・長崎・熊本は残念ながらまだ地名辞典が出ていませんので、その語源を調べることは出来ませんでした。それから、甲突川の支流に、幸加木川（コウカキガワ）というのがあります。昔、幸加木神社とか「コウカキサァー」とかよばれていて、出征兵士が出征する場合に、まずそこに武運長久を祈ったという神社があります。今でも、受験生のお願いの布切なんかが掛かっておりますが、現在は幸加木神社の方が廃れまして、梅ケ渕観音の方が有名になっております。この幸加木というのは紺掻（コウカキ；コンカキ）すなわち染物屋のことで、これは明らかに、中世の職業あるいは職業集団から付いた地名、染物屋が居住していたところから付いた地名だろうと思います。これに近いような気がするんですけれども、「コウツキ」そのものの意味は、今の段階では判りません。

本田　甲突という地名は、どこですか？

平田　幸加木という地名は、小野からちょっと溯って、ずーっと入って行く処なんですがね。

本田　そこを、現在でもそう云っているわけですね。

平田　はい。

本田　甲突池という、あれは、郡山の？

平田　甲突川の水源が甲突池（コウツキノイケ）だから、甲突川と云うようになったと云うものについてですか？

本田　地名が甲突だから甲突池というのか、あるいは甲突と以前から云っていたのか。

平田　さあー。郡山の甲突池というのは、よく知りません；けれども、やっぱり、私は、他の県にも「コウツキ」という地名があるのでですね、ただ、神月が訛ったという考え方ではいけないのではないかと思うのです。

本田　その水源が甲突だというから甲突川という。やっぱり、小野の辺に、なにか生活に関係のある人が住んでいて、その生活に関係のある地名を付けたのではないか。

平田　いや、小野にあるのは幸加木川です。ちょっと、話が行き違っていたようですね。それから、18ページの上段、うしろから3行目に祀場（シバ）が出て来ます。これは、後で江平先生が柴立を説明される時に触れられるだろうと思います。恐らく、これを読まれて柴立（シバタテ）を思いつかれたのかなと思いました。

伊敷（イシキ）

平田　この前から「イシキ」という地名を追いかけまして、そこにプリントにまとめておきました（後掲レジュメ）。鹿児島の伊敷はイニシキヒコノミコトを祀ったので伊佐色（イニシキ）と地名が付き、それが「イシキ」と省略されたというような解釈になっているわけです。イニシコイリヒコという人は垂仁天皇

の第二皇子ということになっているのですが、吉井巌「天皇の系譜と神話」という本の中に、そこに掲げたような系譜が出ておりましたので、入れておきました。ミマキイリヒコは崇神天皇です。イクメイリヒコは垂仁天皇。その第二皇子がイニシキイリヒコになります。吉井巌氏は、このイリヒコ系に応神天皇が結びついて行ったのだという解釈をするわけです。

次に、鹿児島県には「シキ」とつく地名が非常に多く、伊敷（イシキ）・佐敷（サシキ）・伊坐敷（イザシキ）・青敷（アオシキ）・舞敷野（モシキノ）・敷根（シキネ）・知識（チシキ）・甑島（コシキジマ）などがあげられます。串木野（クシキノ）・梨木野（ナシキノ）というのがありますが、桑木野というのもありますから、これはどういうことになるのかなと思っております。それから、甑岳（コシキダケ）。

「シキ」とつく地名を全国的に見ますと、一番多いのは○○屋敷で、これは全国的に見られます。屋敷に類するものとしては、居敷（イシキまたはイジキ）・倉敷（クラシキ）・敷地（シキチ）があります。それから板敷（イタシキ）・板良敷（イタラシキ）・桟敷（サジキ）。これらは、昔、こう云った独特な建物が建てられて、それにもとづいて地名が起ったと考えられます。また、特殊なものの産地を示すのではないかを考えさせる地名が、三ケ敷（ミカシキ）・金敷（カナシキ）・鎌敷（カマシキ）などです。「ミカ」というのは古代の大型のカメです。それから、雑色（ゾウシキ）の居住地に由来すると思われる雑式（ゾウシキ・ザッシキ）という地名や、職田に由来するものと考えなければならない職田（シキデン・シキタ）というものがあります。それから一色（イッシキ）。一色別納・一色別符等の解釈がありますが、これは東海地方によく見られる地名です。また、五畳敷とか千畳敷という地名もあります。形状地名もしくは産地を考えなければならないものに、甑島・甑糸・越木山等があります。色彩を示すのが、二色（ニシキ）・五色（ゴシキ）です。二字で表わしたものに、志木・信喜・志岐・信貴・椎木。その他、意味不明の地名、伊敷・吉敷・戸敷・平敷・稲敷・刈敷・竹敷・

花敷。それから敷根・敷井・敷佐・敷名・敷屋・敷槙・敷水・敷波・敷川内 etc. まあ、こんなのは全国に散らばっています。まだ完成には至っていませんが、こういうふうに「シキ」の地名をドットに落してみました（未完成の分布図を示す）。九州の西海岸と広島県、それから関東の千葉県あたりに、この「シキ」という地名が固まっているのが一つの特色です。

「シキ」の解釈について、日本国語大辞典は、①上代、石で堅固に築いたとりでをシキという、②岩石でめぐらした祭場をシキという、としております。今年出た地名用語語源辞典（楠原・清手編）では、「イシキ」について五つの解釈がしてあります。①古代に石棺作りに従事した部民・石城造の居住による地名か。石城造というのを調べてみましたが、よく判りません。②イン・キで砂礫地をいうか。③少し高い川底、ウヘ・シキから変ったか。④イ（接頭語）・シキで、屋敷地などをいうか。⑤一色（イッシキ）の撥音不表記。そこで、角川地名大辞典の現在出ているものから、イシキを拾い出すと、一色が神奈川・岡山・岐阜・東京にあります。石木と書くのが奈良・佐賀・長崎。石喜と書くのが新潟にあります。それを、下の地図に×印でおとしてあります。このうち、東京都の一色町は材木商の一色十左衛門という人が住んでいたことで付いた地名だそうです。これは人名から来た地名です。岐阜県の一色については、角川の地名大辞典は、羽栗見聞集というものを引いて、イシキの語源を居敷、今の屋敷であるという解釈をしています。佐賀県小城郡三日月町石木は、条里制の里名、石木里に由来するとされています。

鹿児島県の伊敷について、「イ・シキ」と考えるか、「イシ・キ」と考えるかの二通りなんですが、これに類似した地名として、入来（イリキ）・市来（イチキ）とか。指宿（イブスキ）・宇宿（ウスキ）はちょっと違うかも知れません。上薄（カミスキ）・肝属（キモツキ）・百引（モビキ）・木佐貫（キサヌキ）・田貫（タヌキ）など、いろいろ「ヘキ」とつくのが沢山あるわけです。これらが整理されて、「シキ」という地名がどういうものかと云うことが判れば、だん

だん鹿児島の地名というものを考える突破口が出来るのではないかと思っています。

そこで、地名用語語源辞典の⑤イッシキ（一色）の撥音不表記、つまり「ッ」をとったという解釈が果たして成立つのかと、分布図を描いてみますと、「イッシキ」はほとんど東海地方に集中しています。ところが「イシキ」というのは、鹿児島・佐賀・中国地方それから新潟の方と散在しています。まあ、これがダブっているのは東京と岐阜と静岡ぐらいです。これらにしても、撥音不表記と考えなくても、別の意味で考えても良さそうな気がします。この地図は、「イシキ」と「イッシキ」は、撥音不表記ではなく、別の次元で考えなければならぬことを示していると考えます。

今日のところで、私が考えていたことは、この程度なんですが。

〔質疑応答〕

江平　今の件について、ちょっと思ったのですが、伊敷が「イニシキ」だとしますと、「イニシキ」は古代からの地名ですね。一色田・一色別納というのは荘園制の崩壊の過程で、必要性に伴って出現して来る。そうすると、質が異なる地名ということになります。

平田　それでですね、逆に云うと、「イシキ」という古い地名があって、その地名の語源を説明するのに古事記や日本書紀の中から「イニシキイリヒコ」という名前を引張り出して来て、ここは「イニシキイリヒコ」の采邑地であったとかいうようなものを作ったのではないか。付会させたとすれば、イニシキという解釈は、全然別だと云うことになる。イニシキという人の名前が付いたのであれば、他のところにもイニシキという地名が残っても良さそうな気がするわけです。

江平　一色田というのが鹿児島県の荘園制の中に出て来るのかどうか。島津荘の中に、一色別納というのは、ちょっとなじまないような気がするのです。昔のことは、よく判りませんが。

平田　その辺はどうですか。原口先生。

原口　一色田というのがないと、イッシキがイシキとなるのはちょっと不自然に思いますね。これは、ちょっと検討してみます。

江平　あちらの主要荘園には、一色とか別納とか加納とか、よくありますね。それらが地名となっています。一色町なんてのも、そういう荘園制から来たのだろうと思うんですけども。鹿児島の荘園の中で、荘園関係文書の中に、一色というのはあんまり、まあ寡聞ですけども、見当らないような気がします。

江ノ口　これはまあ、三代実録に出て来るぐらいの古い地名ですから、伊尒色（イニシキ）という読みは、やはり、そのままあったというふうに考えるのが良いのではないかと僕は思います。この祭神というのが、大歳神とウカミタマ神。これらは、皆、一緒なんですね。要するに、稲作というか、仮名なんです。ウカミタマも、新しくはウケモチノカミと云います。やっぱり、穀物神です。それから、大歳神。歳ということばも、大体、稲のサイクルを基準にして考えたという解釈が通説のようです。やはり、稲（イネ）が「イニ」となったというように考えた方が良いのではないでしょうか。

平田　なに、イネがイニになって、イネシキからイニシキ。

江ノ口　あのー、なんと云いますか、ここに書いてある祭神、あるいはこの物語がですね、こじつけと云えばこじつけになるかも知れませんけど、全く共通なんです。池を築いたとか、種々例を引いてありますけれども。また年之宮というのがありますが、年之宮もやっぱり稲に関する宮ですし、この文全体が稲という色に染っているのですし、それから、古くからあるという地名で、まあそれで稲と関係があるんじゃないかというような考えが自然ではないでしょうか。最近出た「日本の神々」というのを見てみましても、五島の方でしたか、そこに神社があって、「イナ」は「イネ」だということを書いてありますし、そこもやっぱりこういう神を祀っているわけですし、やはりイナシキ；イネシキということではないでしょうか。ただ「シキ」の意味はちょっと小学館国語とか時代別国語をあたってみたのですが、よう判らんですけども。とにかく、イネというのがなに

か関係しているのではないかということを考えるわけです。まあ、早い時代に、ここに住んだ人達が、なんと云いますか、田圃を作って、米を作った。その最初の人を祀ったのが、この神社ではなかったかと思うのです。

本田　その説に立つとねー、日本中、あらゆるところが、「イネシキ」ばかりになるわけですよねー。皆、イネシキになってしまう。

江ノ口　神社は、あっちこっちにあるんですね。例えば、「日本の神々」というのは九州しか出ていなくて、まだ全部をチェックしてないのですけども、伊奈久比神社とか、これは対馬にあります。それはイネでは出ないですけども、イナで出て来ます。また、それは和名抄にも出て来る郷名です。それから延喜式の神名帳にも出て来るということが書いてあります。これは「日本の神々」から引いたのですけども、「厳山に祀る時、大空に奇しき声あり。白い鵠、稲穂をくわえ来り、これを沢の辺に落とし、忽ち大歳神となる。この霊を祀りて稲作神となし」というようなことを書いてあります。やっぱり、そういう感じなんです。それから、和名抄に（常陸）信太郡ですか、稲敷郷というのがあります。和名抄には、三つばかり出ていたように思います（伊奈・伊那・為奈）。

平田　いや、稲敷というのは沢山あるんであって、イナシキは稲敷で考えていいんでしょうがね。イナシキをイニシキと云って、そのイニシキの「ニ」がとれて「イシキ」になったと解釈すれば、あまりに変化しすぎる。

江ノ口　地名というのは意外に変るような感じがするんです。なんと云うか、いろんなのを見てみますと、ころころ変って行くというか、さっきも屯田のことを申しましたけれども、これなんかも最初から「ドンタ」と云ったのか。あるいは「ミタ」と云ったのが、これは屯（トン）という字ですから、後からの人がそのように読んだというような可能性もあるわけです。屯田（ドンタ）も最初からという説も考えられますけれども、最初は屯田（ミタ）であったものが、この字を使ったがために、ドンタと云うようになった、そういうことを考えます。まあ、難しいんですけども。

平田　そのようにね、読み方を変えるのであれば、どの時点で読み方が変ったかを確かめなければね、ならなくなる。非常に難しくなるわけですよ。

江ノ口　だから、やっぱり、少くとも三代実録の頃は伊尓色と云っていたんじゃないでしょうか。それが、いつ伊敷になったかと云うことについては、なんとも云えないのですが。

平田　いや、だからね、これは、「印色」と書いて果たしてイニシキと読んだのかだよね。最初からイシキと読んでいて、文字はただあてたのではないか。イシキという地名が最初にあって、そのうちにこれをイニシキというふうに読ましたのか。

本田　伊敷は、佐敷とか伊生敷の「シキ」と共通するものでないかと云うような結論を考える方が強いのですけどねー。

平田　伊敷・佐敷・伊生敷になった場合の「敷」も、ちょっと判らないのですよね。なにか「敷」に共通するものがなければ。「シキ」の分類に共通する④の特殊なものの産地か、あるいは集落単位の呼び名か、そこらあたりが突きとめられたら簡単だろうと思うのですけども。では、他に問題とすべきものはございませんか。「シキ」というのは難しいと思うのですよ。

江ノ口　小学館の古語辞典も投げ出していますよね。石で築いた城の義か、というようなことを書いてあります。また、古代朝鮮語からの借用という説もあるようです。あー、それから小学館古語には、敷の字は、上代は乙類で、式は甲類で合わないと云うようなことを書いてありますね。だから、敷という字は、今ばやりの色（シキ）とするのは疑問だと。

江平　ともかく、薩摩に伊尓色という地名があったわけですね。そうしますと、イニシキイリヒコとかいう、そう云った意味では全国的な地名だったわけですね。

平田　いや、イニシキイリヒコというのは、人物なんです。

江平　人物だっても、地名を表わした、あるいは人名は地名を反映している

ことがあるでしょう。

平田　ああ、そういうふうに。イホキイリヒコというようにね。

江平　そうしますと、イニシキが素直にイシキに変化したと見る方が、一色田の一色が伊敷になったと云うよりは。

平田　一色（イッシキ）が伊敷になったというのは完全に否定してよいと思うのです。私がですね、これだけ調べて消せるのは，地名用語語源辞典の⑤一色の撥音不表記という考え方だけです。それは成立たないのではないかということだけが分析出来た次第です。

江ノ口　それとこれはまあ、全然その根拠というのは別になくて、今探しているんですけど、食べるという字に関係があったのではないかという気もするわけです。なにか食（ショク）とか食（シキ）とか。その辺に関係があったのではないかという気もするんですが。これは感じだけのことです。

平田　えーとね、大島だったか沖縄だったか、同じ字を書いた伊敷という地名があるんですよね。

江ノ口　あそこの祭にもなにか、稲に関した祭で、あれはなんだったかな。

平田　「シキ」という地名は、なにせ難物です。

江ノ口　「シクマ」とか「シコマ」という祭があるんです。小野先生の本に書いてあります。これは稲穂をもって来て食べるんです。

平田　日本国語辞典を引きますと、「シキ」の解釈が7通りあるわけです。また方言でもその意味が7種類あります。だから「シキ」という地名が、そのどれにあてはまるのか、簡単に見きわめられそうにありません。ただ、鹿児島の「シキ」を「イ・シキ」と考えるのか、「イシ・キ」と考えるのか、その二通りに分かれるだろうとしか云えません。

江平　そうですね。ちょっと判らんのですけども、「シキ」を取りあげた時に、残る「イ」の意味がつかないと、分けても意味がないなと云うことになるんじゃないか。どんなもんですか。

平田　そうですね。その通りです。

江平　「シキ」は判っても、「イ」の意味が判らないと、「イシキ」の意味が判らない。

本田　「イ」を接頭語にすれば、「シキ」だけでよいことになるわけですね。鹿児島ではたとえば、蟻を「イアイ」、杭を「イグイ」、それから「イキグム」と云うようなふうに、「イ」が接頭語として、いろんなふうに付いている。

平田　鹿児島語では、接頭語としての意味が残っているわけですね。

原口　もひとつ。これは全然根拠はないのです。こんな事を考えていれば、きりはないのですけども。あの、意味不明のところに、稲敷とか竹敷とか、「敷く」という動詞の意味を残している地名があります。竹敷・稲敷とか。そうしたら、蘭草があったところであれば「蘭敷」という説も、まあ成立つことになります。「シキ」を離して考えればですね。敷くは動詞ですから、蘭を敷く、稲を敷く、竹を敷く、草を敷く。イ・シ・キの組合せの可能性は、三度の順列組合せになる。それでも，なぜニンベンの今の「伊」になったかの説明はつかないことになりますが。あの辺の沒年田とか、湿地帯の地名、そういうことを考えれば、なんとなく。誰かが付けようとすれば、そういう地名を付けたかも知れないなということを感じます。地名学的にはどうかなと思いますけども。蘭草がなければ、話は別です。

平田　弥生の頃の集落の発生といえば，鹿児島市内では伊敷と鹿大付近の旧中村。清水町あたりは考えられませんからね。大竜あたりはちょっと高いところですから、あの辺は漁村として考えられるでしょうけれども。農耕地帯として考えるのであったら，伊敷か今の鹿大の近辺がちょうど都合の良いところではないですかね、集落立地としては。だから、伊敷というのは、鹿児島の集落としては古い方と見なければいけない。

江平　そうですね。蘭牟田の「イ」なんかも、やっぱり、伊敷の「イ」とはつながらんですかね。

平田　では、どうも難しいということで、今後に残しましょう。

片岡　ちょっと、ちょっと。貞観二年、その頃の海岸線はどの辺まで入り込んでいたんですか。

平田　そうとう入っていたと思います。

片岡　海に近いところの「イシキ」と云う考え方は？

平田　ああ、それはあり得ますね。

片岡　鹿児島では海岸線に「シキ」の地名がたくさんあるような気がしますが、イシキも案外海岸線ではなかったのか。そんな気もする。

平田　シキとかシキナミ。夜光虫が光るのをシキという解釈があるのですけれども。鹿児島の地形はですね、現在産業道路というのが通っているのは昭和の初め頃の海岸線ですよね。それから、旧谷山街道、現在の電車道路の近くですが、あれが平安の頃の海岸線になりますか。それからもっと入り込んで来ると、古墳時代の終りが、ちょうど鹿大・高麗橋の線あたりが海岸線になって来ますから、もっと遡れば、ずっと入ると思うのですが。

本田　縄文に遡ったら、ほとんど海じゃないですか。

平田　この辺は全部海です。そうですね、縄文後期は海抜10m.とか14～15m.のところが海岸でしょうから。その頃に付いた地名となって来ると、ただ人が住んでいたというような意味になっちゃいますよね。

江ノ口　あー、安曇連稲敷という人名もありますね。

平田　安曇姓が出て来るんですか。いやね、「シキ」の分布図を描いていてどうも安曇姓のひろがりと似たような分布になるんではないかなあということで、現在作業を進めているんですけども。まあ、研究課題として残しておきましょう。「シキ」というのを整理すれば面白いことが判りそうだというような程度で、今日のところは良いんじゃないですか。

次は、江平先生。続けてお願いしましょうか。

Ⅲ. 問題提起　『狩集（カリアツマリ）と柴立（シバタテ）』　江平　望。

プリントは思いつきのままなんですが、その前に「サイハラ」という地名について面白いと思ったもんですから整理してみました。鹿児島県内の小字で見てみましたら、開聞町十町に才神（サイカミ）、川内市天辰町に才原（サイバル）がある。それから垂水市中俣に才原ノ原がある。これは面白いと思ったのですが、現地の人に聞かないと判らないのですけども、「セバルノハイ」と云うのではないか。サイハラのハラが忘れてしまって、さらに原がついたということで。

それから、下の方に三国名勝図会から引用したものですが、道祖神のサヤノカミ・サエノカミにもとづいたという宇祢の齋勝（サイツキ）とか齋門（サイノカド）のサイも、サイハラのサイに応用できるんじゃないかと、前回の発表の時に出た「サイノハラ」とか「サイノカワラ」のサイではないかということを云った憶えがありますので、それにこだわって、ちょっと下の方に載せました。ご検討いただければと思います。とにかく、サイハラ（才原）というのが、催馬楽（サイバラ・セバル）と関連があるとのことで、県内にもそういう小字があることに興味をもったのです。

狩集と柴立。これはほんの思いつきでして、実は知覧に柴立と狩集という小字が地続きになっているところがあるもんですから、以前から興味をもっていたのです。ただ、私の知識としては、民俗的なものはなんにもありませんので、ただ私が知っているのはこちらの広い手のプリントの上の方に、柳田国男の「地名研究」を引いておきました。以前、読んで面白いなあと思った「タマライはタマリであり、狩集である」と云う点。狩集は、薩摩においては、真中の左側ですが、彼地の音で「カラスマイ」。薩摩加世田村大字津貫（今の加世田市津貫）に狩集があり、知覧にも狩集がある。これは面白いなあと思って、県内にはどのくらいあるんだろうと思って拾ってみたのが、その綴ったものでございます。

柴立も薩摩では聞かんようだが、亡くなった柴立県会議長のように、よく苗字にもなっているし、それから小野先生の「柴祭り」という研究もあり、いろんな

のを考えながら、じゃあ、拾ってみようかなと思ってはじめました。拾ってみましたところを地図に落してみました。これを書いてから、また、確かめてみましたら、川内市草道に狩集、吉田町宮之浦に狩集、それから東市来町伊作田に狩集、川辺町宮西に柴立、以上4例が出て来ました。地図の中に○印をしていただけたらと思います。

そして、見ましたところ、数字的にしてもどういう意味があるのか判りませんが、狩集が薩摩29・大隅5の計34。柴立は薩摩17・大隅19の計36。そうしますと、狩集は薩摩に多く、大隅に少ない。柴立は僅かな差ですけども大隅が多くて、薩摩が少ない。とくに大隅半島を見てみますと、狩集はほとんどなくて、柴立だけになっております。

その実態につきましては、一つも私は知りませんが、狩集というのは、狩をする時に山の神を祀る。狩には必ず山神信仰を伴なう故に、その狩猟場のある一定の山口を撰び、これを献ずる他ない。狩の前後にその作法があると。柴立の祭りと、柴立の柴も、さっきちょっと祀場(シバ)のことが出ましたが、そんなことは私は知りませんので、知っていまして、あれー、この祀場は柴に関係があるのかなと思っていましたところを、平田先生がおっしゃって下さって、なにも定説をもっているわけではありません。狩集・柴立はどんな意味があるのかお教え頂けたらと、全くの問題提起でございます。

〔質疑応答〕

平田　たしかに狩集が薩摩で柴立が大隅と、はっきり分かれております。この辺は、本田先生どうですか。民俗に詳しい方として。

本田　狩集というのは、これは小字名ですか。

江平　ええ、全部小字です。柴立も。

本田　小字名に入っていないものも多いわけですよね。

江平　はっ?

本田　小字となっていない狩集も。

江平　はい。たとえば、指宿にも、柴立というちょっと大きな集落があるようですが。

本田　小字に採用されていない狩集なんてのは、ほとんど全範囲にあるんじゃないかと思うんですがね。ただ、一見して考えることは、狩集は狩の祭りをするところですから、一応集ったら必ず山神の祭りをするわけですね。それをせんと、これはもう、絶対しないで狩をすることはないわけです。例えば、あの、入来の場合の江戸時代の記録ですけど、毎年、正月二日は、領主の主催する、まぁ、村総動員の狩始めの儀があるんです。だいたい、元日は所謂御仮屋のところで、皆がお目出とうございますを云う星取りがあるわけですね。出席の点呼というものがある。そして、二日になりますと、今度は必ず出なければならないという、まぁ、昔の場合の機動演習のようなものでしょうから、狩をして、まぁ、獲物があるなしにかかわらず、一つの軍事訓練ですから、やったわけなんですが、その時の集合場所を入来の場合は、山の神の前の広場でやっているわけです。そして、山神の祭りをするわけです。この柴立も、神様は賢木のシバを取って来て、ちょうど上から下って来るわけですから、そういう風習から、やっぱり、どこにでも柴立があるんじゃないかと、私は以前から考えているんですが、どんなもんでしょうか。

江平　大隅と薩摩で、どこが違うのかなと思ったもんですから。

木場　「集り」というのがたくさんありますが、あれもやっぱり同じようなものでしょうね。

江平　あれも拾ったんです。拾いましたのですが、あの、それは、領主が主催するものがあるんじゃないかと思っています。これは、私のちょっとした推測ですが。民俗的なものが狩集で、もっと藩の体制に密着した狩が、一種の軍事動員的な狩があると思いますが、それが「集り」の場所。

木場　大概、「集り」というところは、必ず山神があるようですね。

江平　ああ、そうですか。

木場　隈之城の場合、四・五基並んでいるようですが、小さい字ですけど。

私らは昔、よう知らずに、山神さあが沢山集まっとられるから集りとついたんじゃろかいと話合っていましたけど。

江平　神が集る？

木場　ええ。

江平　大隅で柴立という。大隅でも狩があったろうに。薩摩では、狩集と柴立が大体二本立てで行って、大隅では狩集が実質あったろうに、集合場所を柴立で通したんだろうかと。

江ノ口　極端ですよね。

江平　狩は中世以来、やっぱり、大隅でも行われたはずですが。

木場　「集り」は大隅にもありますか。

江平　「集り」は二・三あります。狩集はないですけれど。

平田　これは、大隅と薩摩が極端に違うという一つの問題提起。大隅と薩摩が対立していて、歴史的違いがあったのは、いつ頃なのか。

江ノ口　狩倉との関連はないのですか。

江平　狩迫だとか、狩俣とか見ましたけれど。

江ノ口　狩に関するすべてと云いますか、それだけでなく狩猟に関する----

江平　狩猟に関しては民俗学的なものがいろいろあるみたいですから、私みたいなのにはちょっと手に負えません。ただ地名として、薩摩では柴立が分化しているのに、大隅ではほとんど柴立一本で済ませているとしか云えません。

本田　狩以外の、山の、たとえば------（聞きとれず）------山神の祭をすると気色が悪いので、今年は止めて、柴立をやったと云うことですから、そう云う意味で、やっぱり、山神の祭をする場所が柴立ということになるのではないか。狩集と柴立がくっついておれば、地名として分けて来てもいるんかなと思ったりしますが。明治初年の小字図を書く場合は、その辺に沢山の小字があっても、美濃紙1枚に書いたわけです。他所の村では知りませんが、私の村で書いたものは1分を2間にしているわけです。1分を2間にした縮図を書きますと、はみ出

るところは他の紙に書きますから、そこにも小字を付け出さなければならない。ですから、柴立が此処にあって、狩集がこうあるのも、1ケ所であっても、こっちには狩集と記すが、こっちは柴立と記す場合が多かったんじゃないかと思うんです。

江平　なるほど。

本田　入来文書に出て来る地名がおよそ900ある。役場の方から測量役人がするわけですから、学問もなにもないわけです。その便宜上、勝手なのがいくつかありますから、どれをやろうか、これをやろうと、それで小字を付けたわけです。大体、該当しています。昔から云っている小字は全部残してありますから、それでいいのですけども、こっちとこっちを比べたら、こっちの方が良いのにな と私たちが考えたらあるわけです。しかし、そうじゃなくて、小さい方をとって付けてやるというようなことがあったわけです。

平田　これはどうですか、江平先生。柴立だけである分布図というのを描きます。次に狩集だけ。それから両方が混っているところ、なにもないところ。それを、どういう解釈をするかというふうに考えて行ったら、なにか緒がつかめるような気がするんですが。

江平　だから、もうちょっと、北薩・南薩などで見てみましたが、あんまり、例が少なくて、そうはっきりとはあまり。まあしかし、薩摩の南の方は狩集・柴立がほとんど混在している。北薩の方は、狩集が主ですね。北の大隅の方はちょっと混在していて、南の大隅の方は柴立。どういう意味があるのか、よく判りません。

江ノ口　もう一遍、柴立の解釈の仕方ですけども、立山・立野というのが薩藩名勝考にあったのですが、この祀場というのもやはり神聖ということではないでしょうか。日常使う場合はどこの山でも良いという場合もあったでしょうが、例えば神社とか、そういう会に使う場合の祀場というのは、一番良い山ですね。それをとっておく。一般には禁止されているそういう意味の柴立というのも、な

っとしたら考えられるんじゃないかなという気がします。茅立とかいうのは現在でも云いますから。茅を葺くために取ってはいかんと厳しい統制下におかれているのが、どこの村でもあります。やはり祀場というのも、あるいはそういう意味の栄立があるかも知れません。

本田　茅立の場合は、茅立野だろうと思います。それから清水の山に立小というのもありますね。

片岡　狩集は全部、カリアツマリと読むんですか。

江平　さあ、それは。カラスマイとかカイアツマイとかなまったり。

片岡　トリダマリと云う苗字があるんですが、鳥集と書いて。集をタマリと読ませていますが。秋葉神社の神職さんの家ですが。狩集をカリダマリとは読まないのですか。

桐野　あのね、樋脇にもあるんですよ。私には記憶があるんですよ。私どもの小さい頃は、「カヤツマイ」と云うのを聞いて、憶えているんですがね。今でもそう云うのか知りません。まだ、ほんに、小さい頃ですから。それは、ずーっと憶えている。「カヤツマイ」と。そいで、今になって見ると、狩集。

本田　樋脇小学校のところは、狩集。

桐野　はい。樋脇小学校のところは狩集。良いところでしょう。

本田　今も生きていますよ。

桐野　今も生きちょーとですか。そいで、いろんな事を聞いて、「カヤツマイ」とは、いけな字を書ーとやろかいと疑問に思っていたんですがね。地理の教師をやりはじめてからですよ。それで、狩集。「集り」というのは、今おっしゃったように、タマリ・トリダマリとか云いますよね。まあ、集めて鳥を取るんでしょうがね。

江平　柳田先生の説によると、タマリは人が集まる所、大名の溜りの間というような。

小川　タマリについて、ちょーと私の経験を申しあげますと、柳田先生のタ

マリは、やはり「集り」というふうに書いてございますが、鹿児島県には「タマリ」という地名があっちこっちにございます。果たしてこのタマリが柳田先生のおっしゃるように「集り」かどうかと思ったもんですから、タマリというところを訪ねてみました。どこに行ったかと申しますと、慈眼寺公園の奥の方に、タマリという部落がございます。ちょっと高原みたいなところですが、そこに行きまして、ここには狩集という地名はないかと聞いたら、「ある」と云う。私もびっくりしまして、どこかと云ったら、部落のはずれにあると。川のほとり、田圃のあるところですと、云うことでした。そこで、タマリと狩集は関係があると、さすがに柳田先生のおっしゃることはやっぱり鋭いなあという実感をもったわけです。やはり、タマリもどうやら狩集と同じような意味じゃないのか。この辺は、シシが居るかと云ったら、まだ居ります、山に行けばシシが居りますと云いますので、昔からシシ狩があって、集ったところじゃないか。狩集というところは、やはり、川のほとりが多いような感じがするんです。指宿の狩集、やはりそこで猪を解体して、頭は誰、心臓は誰というふうに分けておったんじゃないか。だから、やはり、小川のほとりが良いんだというような感じをもちました。それからシバですが、これも今さっき読みましたこの本の13ページに祀場中とあります。祀場という字に祀りの場所と書いてある。まずシバを立てて祀りの場所を定めるわけです。それに神のヨリシロとして、神を依らして、それをもって来て祀るというような二つの意味があるように思うわけです。

江平　その名勝考に出て来た祀場は、シバのあて字みたいな感じがするんですが。

平田　まあ、そうでしょうね。

江平　祀場中というのは、ちょうど神祭り最中という。シバが神祭りの祀場。そんかそういうような感じですね。

小川　祭りの時には、大概、シバをこう飾ったりしますから、祭りの域を意味したり、場所を意味したりするんでしょうね。

江平　そうでしょうね。しかし、うまいあて字があったもんだと思うんです。本来の熟語でない。祀は音読みで、場は訓読み。シジョウとなるのがシバ。

平田　いろいろ話もあろうかと思いますが、ここらで前半を打切って休憩したいと思います。後半の方は、永山先生にお願いします。江平先生、どうもありがとうございました。

Ⅳ. 問題提起　『鹿児島の姓と地名』　永山徹弥

もう30年前ですけど、私の初任地は指宿郡の開聞中でした。今、合併している川尻と一緒の開聞中ではなくて、昔の開聞中です。今の開聞中の横でした。そこではじめて生徒の名簿を手にして苗字を呼んでいったら、「物袋」と書いてあるのがどうしても読めなかったものですから、私はこれをなんと読むのかと生徒に聞きました。「モッテ」と読みますと答えてくれました。頴娃と開聞の間に「物袋」という集落があります。停留所もあります。モノフクロ（物袋）と書きます。変った名前、変った部落があるんだなあと思いました。これが私の苗字を調べる一番初めのきっかけでした。はじめは、そういう珍しい変った苗字だけを集めておりましたが、一体、鹿児島にはどれだけ苗字があって、どんな分布になっているんだろうと、調べろようになりまして、年数だけはもうそれこそ30年近くやっております。明けても暮れても電話帳をいじっています。

お見せするデーターは、全部電話帳簿の数です。ハローページという新しいのが出ましたが、それはまだ現在調査中で間にあいません。以前のものです。56年の1月、前の前になりますね。その後が57年の7月のものですから。県下全部を集計するものですから大変です。先程どなたかおっしゃいましたが、数字が意味があるのかどうか知りませんが、多い順に並べてみました。この「名字考」（後掲）の方です。プリントは二つ分です。折角の良い機会だと思って二つ分持って参りましたが、同じようなのがダブって書いてありますから、その点はご諒承ください。

「名字考」。右の方に鹿児島県の苗字の順位表のある方です。つい最近まで、山下が先か中村が先かと云われていたんですけれども、中村が一位になりました。電話帳簿なんかで中村が上になりまして、電々公社とか県の統計課も中村の方を上にするのを認めております。山下が二番になります。今まで、山下が一番と云われていたんです。鹿児島県の苗字で一番多いのは山下・中村・田中と云われていましたが、入れ替ったようです。一番良いのは国勢調査がありますが、全部する悉皆調査が確実ですけれども、どうもこの苗字だけをやっておりません。役場なんかで聞きましても、それが本務じゃございませんので、役場でもその集計はしておりません。電話帳簿だけの数字ですので、まあ、どれほどの信憑性があるのかわかりませんが、ご承知のように、今ほとんど電話が普及しております。私は中学校に勤めておりますが、電話のない家庭というのはほとんどないようですから、一応電話がゆきわたっているという意味で取扱っております。以前のものとしますと、ずーっと数字が増えて来ております。加入者が増えて来るわけでしょう。苗字や地名が変るわけではありませんので。私は昭和30年頃からやっており、電話帳が変るたびに調査をやりますが、だいぶ数が増えて来ています。もう今度は6500から7000ぐらいになるだろうと思います。（中村・山下が）。これは、56年ですから、3年前のものです。順番に並べてみましたが、皆さん方の苗字がこの中におありでしょうか。10,000番ぐらいまで、全部、家に資料が揃っております。これは100番まであります。次をあけてください。

これは私の調査ではありません。佐久間英という苗字博士といわれているお医者さんのものです。佐久間ランキングといわれています。私はこの佐久間先生に縁がありまして、東京に1年間おりましたので、直接いろんな人名の調査の仕方、苗字のことなんかについて、お世話になりました。残念ながらつい最近亡くなられまして、現在、奥さまの佐久間津奈子さんが先生に代って、調査を続けていらっしゃいます。これは全国のランキングです。鈴木・佐藤・田中・山本ですね。万の桁がつきます。一番多いのは鈴木。ユニパックというコンピューターの会社が

出しましたが、この佐久間先生のデーターと、どうゃら順位が二・三違うようです。鈴木が多いのか、佐藤が多いのか、それも云い争いをしておりますが、なにしろ全国規模になりますと、単位が大きいので、まぁ、鈴木・佐藤、どちらがどっちか、判定はしかねるわけです。一応佐久間先生のリストはこうなっております。100番の市川でも10万です。

苗字のことの起源が書いてありますが、いろんな本を写し出したものです。真中よりちょっと上の方、鹿児島県の苗字の100位の中に、田のつく苗字が25あります。苗字のうしろに大概つきますけれども、それを結び字と云っておりますが、25ということは4人に1人です。先程から出ておりますが、日本は瑞穂国でしたので、田圃の側に住んでいた。前田とか横田・上田・田中とかありますけれども、自然、田という苗字が多いわけです。4人に1人、ほんとに、石を投げたら当たると云われますけれども、生徒の中に、田のつく人、手をあげて、と云えば、ゃっぱり1/4ぐらいあがります。どの学級に行っても多いです。なるほど、田のつく苗字の生徒が多いんだなあと思います。とくに、西日本の方が先に開けましたので、東日本よりも西日本の方が田のつく苗字の方が多いです。次をあけてください。

今、ここにお集りの皆さんは、県下のあっちこっちの郡からお集りだと思います。また、ご出身もそれぞれだと思いますけれども、各郡の集計をしてみました。これも、3年前のものです。(56年のもの)。現在、最近のハローページをゃり方ですが、また数字が多くなっております。たまには順番が入れ替っているのもあります。山下・中村・前田・田中というのが、どこの郡にもあるようですが、これは地形的なものがありますね。田中の田はどこにでもありますが、たまにはその郡独特の苗字もあります。3行目の川辺の下から2番目の阿久根。これ、加世田にあるんです。電話帳等を開いてご覧になったら判ると思います。非常に多いのです。加世田市に阿久根という苗字があります。阿久根に阿久根がないわけじゃございませんが、あんまりないわけです。その関係はどうなっているんだろうかなと、いつも私は不思議に思います。伊集院に伊集院がないわけじゃありま

せんけれども、すぐ隣の東市来にあります。このようにして、苗字はその自分の根拠地を出ると云われております。例えば、指宿とか肝属とか、天下の大姓がありますね。加世田・阿久根・伊集院。それが、今もずーーと、この自分の本拠地に居るかと云いますと、もちろん代々伝わるところもありますけれども、外に出ているようです。そういう関係で、これは阿久根市の阿久根に関係があるのかなと、私は思うのですが、加世田の方、もし知っていらっしゃったら教えていただきたいと思います。何故、加世田市に阿久根の姓がいっぱいあるんだろうと思いますので。それから、次をあけてください。

奄美大島になりますと、これには少ししかありませんが、一字姓が多いです。それも人の名前になるような、栄(サカエ)とか泉とか。原口先生のお名前が、苗字になっております。ふつうは、西とか東とか南とか北ですけれども、奄美大島の苗字は皆さんもご承知のように、当(アタリ)とか勇(イサミ)・祷(イノリ)・碇(イカリ)、こういう太(フトリ)ですか、名前になりそうな感じのものがたくさんあります。祷という先生もいらっしゃいます。これなんかどういういわれがあるんだろうと私は思うんですけども、到底、一軒一軒のそれについて調べる時間も余裕もありません。また、私は地理とか歴史の専門じゃございません。私の専門は、音楽なんです。なんで、音楽の人が苗字をするのか、関係はないでしょうと云われますけども、私も音楽と苗字はあまり関係ないなと、自分でも思っておりますが。先程云いました生徒の出席簿がはじまりで、こんなことをするようになったわけです。今まだ分布、どこにどんな苗字があるかというのを調べている程度で、一人一人の苗字については手をつけておりません。ですから、この分布図だけの仕事を現在ゃっております。もう一枚のプリント。

全国で約10万あります。その1割、鹿児島には約1万種ありますが、実際は1万を越えると思います。私の持っているカードが9800ぐらいですから。96市町村の名前を全部書いて、鹿児島市の田中を調べて、カードに名前を一つ一つ書いて行くわけです。だから、非常に時間がかかります。96市町村、そして、集計するんです。今あけました表は、例えば、川辺郡・日置郡はいくらかというのを

表示してあるわけです。日置郡だけで3,000ぐらいあります。私は日置郡の吹上町に住んでおりますが、日置郡の苗字だけで3000ぐらい。もちろん、それは鹿児島県の1万の中に含まれております。鹿児島市だけで8500ぐらいあります。たしか、52万ですね、1/3近くが集っておりますから、各市郡の苗字が鹿児島にはほとんど集まっています。鹿児島市だけで8000から8500ぐらい。残りの1500〜2000というのが地方にあって、鹿児島市になかったり、水面下に転落で、郡別に調べて行きますと、その郡の独特な苗字があります。先程から出ております玉利とか狩鹿倉とか狩集というのが、この表でわかります。きょうは、そこの分布を持って来ておりませんけれども、一応1万枚近くのカードにはいろんなのがあるんです。私も、今度はこれを重点的に必ろうと、調べておりませんので、ただ苗字を数えるというだけです。

苗字の大部分は地名から来ると云われております。先程、地名の話が出ましたが、ほとんどの地名が苗字にありますね。その地名も。次の方に書いてありますが、歴史的地名。先程も出ました、この荘園ですね。それから、三宅(屯倉)、条里制。それから、次のページをあけてください。

われわれの眼に見えるもの、動物・植物に因む苗字も結構あります、田の苗字がたくさん書いてありますが、先程云いましたように、日本は瑞穂国、農業の国でしたので、稲作を切離しては考えられないわけで、その田圃の状況と云いますか、地形と云いますか、それで田の付く苗字がいっぱいあります。それから谷・塩田ですね。指宿の方もいらっしゃいますけども、お湯に関する温泉地帯の湯のつく苗字ですね。それから、動物でしたら、家でよく飼う犬・牛。それから、山に行きますと、猪・熊がおりますが、狩をしていたもの、また家に飼っていた動物の名前、それが当然苗字になるんじゃないかと思います。鳥。今は出水・阿久根ぐらいしか鶴は来ないのですけど、昔はあっちこっち来ていたと云われます。なにも出水や阿久根だけではなかったので、鶴の苗字がたくさんあります。この鶴も、水の流れる、田圃の水の取口の水流(ツル)もあるんです。スイリュウである「ツル」か、飛ぶ鳥である鶴。鶴がお目出度い鳥であるので、それにあやかってしたのか、もう今ではわかりません。それこそ、一人一人の苗字を探ったら大変なことですので、私はそちらの方はしておりません。

植物ですね。この前、ラジオで、苗字辞典を作られた方の話を聞きました。その方は植物学者ですが、東北地方に多い植物の名前を取ったのは、やっぱり東北にあると云っておられます。例えば、鹿児島には栃(とち)なんてのはないでしょう。栃の木がないから、普通にあるのは松とか杉とか桜ですね。南日本に多い、現に自分の家にある、または庭木に植えてある、そういう名前が付くんじゃないでしょうか。珍しい木の名前は、もしあったら、どこかその植物の生えていた所から鹿児島に引越していらっしゃったのじゃないかと思います。あまり、栃木さんとか栃田さんという苗字は鹿児島にはないようです。やっぱり九州や鹿児島に生えている植物の名前をとった苗字が多いようです。

魚にしても然り。で、魚と云いますと、鰻が書いてありますが、あの山川の鰻池ですね。あそこの鰻という苗字は有名です。そして、いろんな苗字の本にも書いてあります。いわれはあるんですけれども、恥ずかしくて、県外へ出たら、苗字を変えているようです。私も鰻池に行きまして、鰻さんという人の話を聞いたこともありますが、「昔やどっさいおしたどん、もう、どんどん変えっいっもんさおー。四・五軒しか残っちゃおーはんが。あたいたや、やっぱい、げんねごわんどん、鰻ちう名前を変ゆとな思ももはん」と。墓を見せてもらったんですが、墓はほとんど鰻姓ですね。今日は持って来ておりませんが、鰻さんの墓の写真をとりました。こっちの人も鰻なんとか左衛門。墓にうそを書く人はいませんから、ほとんど鰻姓なんだなということがよくわかります。一遍、山川の鰻温泉にお行きになったら、確かめてみて下さい。墓を見ますと、ほとんど鰻姓です。加世田に鮎川という苗字があります。鮫島の鮫。これも加世田にたいへん多いのですが、それと熊毛郡に多いですね。種子島・屋久島の鮫島さん。そんなに昔は鮫が取れたのかなあ、全然鮫がいないのに、鮫なんとかと苗字がつくものかなあと、私は

考えております。

それから、今の県名ですね。これは、ためしにあげてみました。山口は山口県の山口と、私たちの苗字の山口とはほとんど関係ないかも知れませんが、一応名前だけをあげてみますと、こんなふうになりました。（ドカーンと桜島が噴きあげて全員驚く）。次をあけてください。

まだ詳しく調べるとたくさんあるだろうと思いますが、47都道府県のうちに28県の名前が出ました。さっき栃木を見ましたが、2軒あります。

それから、鹿児島県の市町村名が苗字につくもの。さっき、阿久根を云いましたが、必ずしも鹿屋に鹿屋があり、串木野に串木野があるとは限りません。串木野氏の墓はあそこにありますね。しかし、串木野さんという方に私はお眼にかかっておりませんが、やはりあることはあります。さっき云いました阿久根は、加世田に多い。出水という姓はありますが、出水の出自なんでしょうね。それから指宿ですね。これに書いてありますが、なぜか高山に加世田という苗字があります。国分。これは国分市もございますが、国分という苗字は東市来にもあります。牧場をしておられます。谷山。谷山という苗字はありますが、そうたくさんは聞きません。

今度は町村の名前のつく苗字です。詳しく調べますと、もっともっと出て来るのではないかと思います。下の方の字（アザ）ですね。この字を調べてみましたが、さきの先生のものとダブるかも知れませんが。私、日置郡ですので、日置郡を重点的に見てみました。他の郡は、今から知ります。（笑）。串木野市・日置郡からはじめて、地名、大字・小字と苗字が同じものをあげて行きます。海士泊（アマドマリ）というのがあります。猪之鼻（イノハナ）、これは串木野にいっぱい苗字がありまして、地名もあります。次に岩下さん。それから上酔尾（カミエノオ）・下酔尾（シモエノオ）。酔尾という所があります。バスで行かれますと、串木野女子高校の近く。こちらから行きますと、串木野の市街地の中心地に入るところです。それから、袴田（ハカマダ）ですね。これは知っぱり田圃に関

係がありそうです。光瀬（コウセ）という所がありますが、光瀬さんという方がいっぱいおります。それから芹ケ野（セリガノ）。これは金山のあるところです。大六野（ダイロクノ）という珍しい苗字がありますが、大六野という字（アザ）です。それから土川（ツチカワ）。串木野と川内原子力発電所との間ですが、大変辺鄙なところです。土川という学校もあります。土川さんという方がいっぱいいらっしゃいます。

市来になりますと、佐保井（サホイ）というのがありますが、どう解釈したら良いのでしょうか。木場というのは、木を溜めて置くところですか、木こりが川なんかを使って、よくいかだを組んで流しますが、木を集めるところ、木の場所と云うんですかね。さっき、タマリと云うのがありました。木の伐採に関係があるようです。

東市来に、梅木・桑木野というのがあります。桑木野という大きな部落がありますが、ほとんど桑木野姓です。荻というところがあります。上市来小のところです。それから、海岸にあります赤崎。ご承知のように「崎」という名のつくのは、ほとんど海岸にあります。海岸の岬のところ。それから北山（キタヤマ）。立和名（タチワナ）という苗字がありますが、これなんかどういういわれがあるのですかね。鉾之原（ホコノハラ）、それから永野（ナガノ）。

それから、伊集院の腰（コシ）。飯牟礼岳の方ですが、山裾という意味でしょうか。あの、腰ですね。腰という先生もいらっしゃいます。四郎園（シロウゾン）という部落、四郎園という校長もいましたけど。それから善福（ゼンプク）ですね。なにか、お寺に関係がありそうな苗字です。それから出樋（ダッゼ）という。これはほんとに読めません。現在はダッゼとは読めませんので、瀬が出ると書き直してあります。もともとはダッゼと云うんですが、これは伊集院の人でないとダッゼとは読めないでしょうね。

松元町。入田（イリタ）・柿元が上と下に分かれて上柿元・下柿元。停留所もあります。次が、田原春（タワラバル）・本坊（ホンボウ）。松元町の松元は、

ここの松元という字からです。昔はご承知のように上伊集院村と云っておりました。上伊集院・下伊集院・伊集院、その三つで伊集院郷です。現在は下伊集院村はなくなりました。東市来町と日吉町と伊集院町と郡山町の4町に分村されました。薩摩焼で有名な苗代川（ナエシロガワ）は、もとは下伊集院村です。下伊集院村というのはなくなりまして、あるのは昔の上伊集院と伊集院。その上伊集院が松元町になりました。中心地が松元（字）ですから、ここをとって松元町としたんですね。

それから、郡山。茄子田（ナスッダ）という珍しい苗字があります。集落もあります、茄子田。雪元（ユキモト）というのは、山の雪が一向に消えなかったというようなことが書かれてあります。大口とか伊佐・姶良という寒いところの雪元はまあ判りますが、日置郡の郡山は、平地よりは雪は降りますけども。何年か前の南日本新聞に出たようですが、その嶽の雪が一向に消えなかったので、雪がいつまでも残っていたとか云うような説明がしてあるようです。私、実際に行って調べたことはございませんので、文章で書いてあることでしかわかりませんが。

日吉町。下田平（シモタビラ）・上田平（ウエタビラ）という、ちょっと他のところにはないと思います。次、樗木（オテキ）と読みます。辞典を引きますと、役に立たない木と書いてありますが。それから、諸正（モロマサ）。ちょっと他のところにはないのではないでしょうか。諸正という山もあります。市町村別に調べて行きますと、なるほど珍しい、そこにしかないなぁというのがあります。

吹上町。これは安広（アビロ）と仮名がつけてありますが、ヤスヒロとかアンビロとか呼ばれますので。それから印口（オシグチ）です。ここは、滝がありますけれども。これは、皆、読めなくてイングチとかなにグチだろうと、なにかクイズみたいです。「なんで、おはんがたあ、イングチと書いてオシグチと読んとよ、と云えば、判らんとや、印鑑は押すっでよ」と、そんなことを云っておりますが、なるほど印鑑は押しますね。それから柱野（ハシラノ）。あのダムのあるところです、永吉ダム。

それから、金峰町の宇治野。ここによく茶が育つんですが、なんか京都の宇治、そこのお茶をもって来て、栽培したと云われております。金峰町は茶園がたくさんあって、茶業の盛んなところです。宇治野さんという方が、茶の仕事をしておられます。

次に指宿に参りますけども、上吹越（カミヒゴシ）・下吹越（シモヒゴシ）。フキゴシと読みそうですが、なぜかヒゴシと読んでおります。

それから喜入の樋高（テダカ）。先程、田貫（タヌキ）も出ました。鈴（スズ）という部落があります。鈴木とか鈴田でなくて、一字です。生見（ヌクミ）、これもなかなか読みにくい地名です。ナマミとよんでしまいます。弓指（ユミサシ）も変った字です。この弓指のいわれを知っていらっしゃる方がおられましたら、教えて下さい。

頴娃町では、佃（ツクダ）・蓮子（ハスシ）・摺木（スルキ）などが珍しいです。

それから、開聞町ですが、一番初めに申しました物袋（モッテ）です。一番左に玉井（タマイ）とありますが、これは指宿関係の方は知っていらっしゃるように、あの「玉の井」ですね。枚聞神社のちょっと北の方に、玉井という神社があります。日本最古の井戸だといわれています。トヨタマヒメが汲んだ井戸といわれておりますが、玉の井。そこの部落を玉井と云います。玉井という姓があります。私もここに下宿しておりました。いつも、いわれのある井戸を見に行くもんでした。

次に川辺郡です。加世田市の鮎川（アユカワ）・相星（アイボシ）・金気（カナケ）さん。加世田に鉱山がありますけれども、多分、金気を含んだ水が流れるからついたんだろうと、金気さんという人に聞いたら、そうおっしゃいました。郷之丸（ゴウノマル）という苗字があります。

それから、枕崎市に行きまして、板敷（イタシキ）ですね。これも大きな集落があるんです。籠原（カゴハラ）ですね。茅野（カヤノ）・真茅（マッカヤ）と

いうのがあります。先程、茅場とか栄立とか出ましたが、茅を立ててある野原でしょうか。茅野という集落、茅さんと、どちらも多い苗字です。私の友達に、茅野さんも真茅さんもおりますが、やっぱり家を葺き代える茅に関係があるのじゃないかなぁと云っております。

それから、笠沙町になりますと、姥（ウバ）というところがありますが、これも地名辞典を見ますと、子守をする年寄った乳母ではなくて、山の迫ったところをウバというと、地名の解釈が出ています。そちらのウバなのか、昔、姥がたくさん居たのか、その辺は判りません。われわれが勝手に判断することは出来ません。黒瀬（クロセ）という所は、杜氏で有名です。酒造りの杜氏の方に、黒瀬出身が多いですね。それから、先程も出ました清水（シミズ）。シミズとキヨミズを調べてみると、鹿児島の場合、シミズと読まれる苗字の方がずっと多いようです。キヨミズは少ししかないようです。シミズさんが大部分と見てよいです。これは参考までに。

それから、大浦町。窪（久保）と書いてありますが、もともとクボで、これはへこんで、雨が降ったら水が溜るような窪溜りのことじゃないかと思います。窪、左の一字の方が古いんじゃないかと思います。それは〔佳字二字を用ゆべし〕と、昔そういう命令が出たそうですが、苗字もそれにならって、もともと一字の窪だったのが、久しく保つという佳字にしたんじゃないでしょうか。部落の名前は、「窪」です。そして、苗字は「久保」です。

読み方の違うところがあります。私の住んでいる吹上町の永吉に高田（コウダ）というところがあります。高い田。部落の名前は「コウダ」です。そこに住んでいる人達の苗字は「タカダ」さん。これは、同じ字で読み方の違う例です。高田（コウダ）の高田（タカダ）と云いますから、初めは妙なことを云うね。高田の高田、字で書いたら同じなんですね。部落と呼び名は違うんだなと思いました。

坊津に栗野（クリノ）というところがありますが、実際ここに行きましたら、ほんと、栗の林でした。栗の木がいっぱいある栗の山ですね。姶良郡に栗野町というのがありますが、栗野姓は二・三軒しかありません。だから、これは姶良郡栗野町の栗じゃなくて、現に栗の生えている栗の林だと思いました。坊津の栗野は、文字通り栗野・栗山で、ほとんど栗野姓です。姶良郡の栗野町とは、この場合は直接関係がないなと思います。

知覧町。たくさん書きましたが、ほんとに珍しい地名や苗字がいっぱいあります。取違（トリチガイ）というのがありますが、これもなにか故事来歴があるようですね。地元の人はこれを「トイタゲ」と訛って読むと書いてあります。旧知覧飛行場の通信隊跡がバス停のすぐ近くにある特攻基地のところです。皆「トリイ」と間違って読むそうです。なるほど、鳥と違反の違ですから、二つ合わせてトリイと。はじめて訪れた人は、ほとんどトリイと読みます。それこそ取違って読んでいるようです。神代の昔ですね、ワタツミノカミの命を受けて、今の開聞・頴娃付近を出発した豊玉姫と玉依姫の姉妹が、夕方この地に辿り着いた。姉は川辺、妹は知覧を掌るというのが任務。ところがその夜、川辺の方には豊かな水田があることを耳にした利発な妹の玉依姫は、未明に起き出し、ひとりで川辺の方へ行ってしまったと云うんですね。姉の豊玉姫はそれをとがめもせず、妹が赴くはずの知覧の方へ向かった。つまり、この地で領地を、姉と妹の行先を取違えたと。それから取違という地名が出来たといわれます。ここに四十数軒、取違という方がいらっしゃいます。それから変ったところは、塗木（ヌルキ）というのがあります。

それから、次、川辺。先の下伊集院のものは神殿（コドノ）です。国道3号線を伊敷から川内の方に行きますと、途中に神殿があります。これは古殿ですね。ここでは「フルトン」と云っていますけど、場所によっては「フル」と読んだり、「コ」と読んだりしますね。古城（フルジョウ・コジョウ）、上田（ウエダ・カンダ）。さっき気が付きましたけど、頴娃町はほとんど上村（ウエムラ）です。上村と書いて、ほとんどが「カミムラ」と読むはずですが、頴娃町は「ウエムラ」と読ませます。ウエムラ姓の方がずーっと多いのです。地域によって、別な読み

方をするんだなぁと思います。それから川辺の4行目、土器園（土器）と書いてありますけれども、これは、昔は土師器を作っていたんじゃないかと書いてあります。

日置郡から指宿・川辺とあげましたけれども、残りもまとめて書いてあります。私は今ちょっとこれをはじめただけですので、専ら電話帳等を数えるのが忙しくて、まだまだ、ここまでは手が届きません。下に書いてあるように、いろんな、これはどういういわれを持つのかなというような、はっとするような地名や苗字があります。問題提起にすぎませんので、皆さん方の方でご承知でしたら、教えていただきたいと思います。

〔質疑応答〕

肥後　どうもありがとうございました。地名と苗字との関係を実証的にお示しいただきましたが、興味深く拝聴いたしました。なにか、ご意見がありましたら、出してください。

江ノ口・木場　これは、もう、銭を払わにゃいかんな。（笑）

永山　一番最後の鹿児島県の名字の特徴というところを補足させてください。

鹿児島県の名字の特徴　今、その一部をお話ししましたけれども、非常にバラエティーに富んでいるといわれます。先程、私が申しました佐久間先生が、鹿児島には変った珍しい苗字がいっぱいあるなぁと、他の県にはこんなにはないよと指摘されました。それから(2)です。普通苗字は二字がまあ多いのです。ところが、奄美大島の一字姓と全県下にある三字姓。その三字も(4)に書いてありますが、間に「之」を付けます。その例がここにいらっしゃいますが、普通「江口」ですね、川内川の河口の江。それに「之」が付きます。「江之口」さん。珍しいなぁと思っておりますけども、これも、その字の間に「之」を入れる。西之園、西園がですね。木下が木之下、坂上が坂之上、上原が上之原。植物の植を書く植原もあります。植之原という先生もいらっしゃいます。鹿児島は二字を三字に、わざわざ「之」を入れて増しているんですね。山下が山之下。山之上という方もおります。川之上という人もいらっしゃいます。それから他の県より、上にかえって(3)ですが、方向ですね。東・西・南・北。園をつけますと、全部ありますね。東園・西園・南園・北園。山を付け足してもあります。東山・西山・南山・北山。それから、歴史的に見た古いと新しい。先程出ました古屋敷・新屋敷。それから、大・中・小。それから上・中・下。上屋敷・中屋敷・下屋敷。方向や大・中・小や、古い新しい、それを二字の上に付けて、三字にしているわけです。それから川辺に行きますと、(5)ですが、クサカンムリの付いた薗です。この付くのと付かないのと、なにか区別があるとも聞きましたが、しっかりしたことは判りません。どなたか、クサカンムリが付くのがどっち、つかないのがどっちと、ご承知でしたら教えていただきたいと思います。それから一番最後、この「元」という字が一番多いですね。モトが「元」。山元・松元・杉元・西元、いっぱいありますが。だから、「元」が付いたら西日本・九州出身かと東京あたりでは云われます。大概、「元」がつくのは西日本、主に鹿児島に多いようです。当らずといえども遠からずです。この「元」が付いたもの、「本」よりも。こんなものが、特徴と云えば特徴じゃないかと思います。以上です。なにか、いろいろ教えていただきたいと思います。

江ノ口　薗のクサカンムリは、中世の荘園文書は、皆、クサカンムリが入っていますね。みんなとは云えないけれども。

永山　東市来の生徒は、半分ついて、半分つかないのですよ。ですから、先生たちが、「君の名はクサカンムリが付くのか付かないのか」と、一回一回、ひとりひとり、云うんです。付く西薗と、付かない西園とがあって、ほんとに困るんですがね。半分ぐらいですよ。だから、卒業証書に校長が書く時、一回一回、三年の担任がクサカンムリが付く薗か、付かない園かを確かめるのです。わずらわしいですがね。

本田　原口先生。松元とか岡元とかいう、「本」を「元」になしたなにがしの、その命令を出したあれ（史料）はありませんか。

原口　そういうことを聞いたことはないんですが。

本田　ある時期にそういう命令を出したんじゃないかと思うんですが。昔は「本」を書いていたのに、江戸時代中期以後は「元」になっていますね。

原口　中世のは「本」が多いでしょうか。

本田　ミミ。たくさん「本」があるのに。

原口　それは、そういう操作をしていたかも知れませんですね。特に、大島の一字姓はそうですし。

本田　大島の一字姓は、いつ頃からですか。

原口　あれは18世紀の後半だと思いますけども。田畑姓が、竜になるわけですから。------（聞きとれず）-------。

本田　あれも、例でしょう。

原口　そうです。あれはもう農村の、なんと云いますか、仕組がゆるんで来た時に、そう云った復習をするためにだと思うんですよ。そう云った時期に一字姓。大体、永山先生がやられたような操作を、大島新聞で、現在、大島の一字姓考というのを、泉さんがやっていらっしゃいます。今またもとに、定が定岡になったりして云われている。松本が松元になったのも、あるいは、そういうことがあるのかも知れません。

本田　例えば、入来の例を申しあげますと、島津さんの方からいろいろ養子が何遍も来ているわけですよね。入来院家なんかは、島津さんの妾腹の息子さんがたくさん居るわけで、鹿児島の方で困っていらっしゃった。その捨場なんですよね。（笑）。だから、なるべく、その、私領地、21ヶ所の私領地が、男の子が生まれん方が良いんです。こちらの方からは、あそこは女の子がいる。今度は、あの家が良いということなんです。その中の、宝暦年間の養子なんですが、島津の殿様の弟に当ります。その人が、どうもその、苗字を変えるのが好きらしくてですね、例えば、私の方の本田の本家は、田中に直したりしてしまっている。私どもは、その田中になる前に分家しましたから、本田を名乗っていますけど、それ以後はもう、宝暦以後の分家は、全部田中です。それから、その他、入来院家のやっぱり御親戚筋の、まあ、偉そうな家があるわけですから、その家の二男・三男はなにになるか、全部、庶流入来院家は、二男家・三男家が清瀬を名乗る、もう一つの入来院家が長坂を名乗る。~~それ~~ 副田家 という名のやっぱり庶流家なんですけども、それの分家は大浜を名乗るというように、きまりがある。だから、そういうふうに、松本は松元にしようとしたんじゃないかと思いますが。

-------テープレコーダーが、pauseのままで、数分間の記録脱落。

永山　今、おっしゃったように、家部を昔は買っていたそうですよ。お金を出して。その、そういう命令もあるし、長男・二男、なにを名乗れというのもあったかも知れませんが、全然他人でも中村が欲しいと思ったら、中村という所へ行って、金で買ってたと。そういう時代があったんでしょうかね。苗字が自由に替えられた。（笑）。私も、そういう話を聞いたことがあります。兄弟三人いて、山元・田中・中馬とか。兄弟でも違うわけです。純粋の兄弟、直の兄弟でです。苗字は自由に替えられる時代があった。今日、戸籍法で変えることは出来ない。で、鹿児島の苗字は数が増えて行ったんじゃないだろうかとも云われています。苗字を自由に替えられた、と。

片岡　明治の初年に徴兵制が施かれた時、長子は兵役を逃れたので、家部を買ったのが----

永山　それも一つの大きな理由です。皆、二男・三男は養子に行って、そこに移ります。徴兵をのがれるためにですね。

原口　西南戦争が士族の貧困化に拍車をかけ、士族の家部を買うということが流行しますが。で、区別をつけるというのは、恐らく近世になってから、家というものが本家・分家という知識が厳しく云われてから、なんとか区別が付けられることになる。それは近世全般、他の地域でもそうですし、例えば園にしましても、士族の家ではクサカンムリをつけないと、平民だからクサカンムリをつけるという区別をうるさく云いだしたんですが、皆、身分制という考え方によるん

じゃないかと思いますけれども。沖縄に対しても、わざわざ漢字一字ずつを当てて、飛地とか、当る、親しい土地だというような差はやっていますし、民間でも、それを官の経営でやっているというふうにしていますね。

唐鎌　加世田の飯島、あれは。

原口　あれは、阿多の北方の地頭です。相模国の飯島の地名をもって、こちらに来たものです。

平田　今のに関係して。飯島・本田・鎌田など、ライスカレー論じゃないですけども、島津家が連れて来た姓、関東から移って来た姓というのは、飯島が特別に出ているだけですね。飯島が26番目、本田が95番目、鎌田が100番目で。これらの姓の中では、土着の姓が案外と多いんだなと、驚いているんですけどね。

唐鎌　飯島は、駿河でしたかね、駿河の飯島。

片岡　私の家なんかは、百年前までは苗字なんかなかったはずなんですが。ケサマツであったり、畝次郎であったと思うんです。明治初年の鹿児島県の人口を大体50～60万とした場合、その中に苗字をもっていた人はどれくらい居ったんですかね。

木場　苗字のない人は、所の名前をやったんでしょうね。

片岡　家号を呼んでおったんでしょうが、それが苗字になったのか。出水で波止（ハト）という面白い苗字があるので聞いてみたら、明治になって名前を付ける時に、名主さんがお前のところは波止の近くだから波止にしたとか、柿の木があるから柿木という苗字を作ったとか、いろんな、そんなことを聞くもんでした。それで、これに出て来る苗字は、そういった思い付きとかなんとかが多分に入りこんでいるのではないだろうかと。まして、われわれのご先祖は苗字などはなかったんだから、なかった人に新しく付いて来るその過程を、この中にどれだけ考えれば良いのか。1万の名前の中で。一庶民として、苗字がなかったもんだから。苗字は何百年も前からあったのでしょうが、われわれは苗字がなかったはずですから。ちょっと、ひがんだような云い方ですが。（笑）。

本田　昔は全然なかった？

片岡　その前はあったんじゃないかと、云われてはいますが。

本田　どこどこの誰。だから、鎌倉時代には、ミナモトノヨリトモ（源頼朝）はいるが、ミナモトヨリトモはいないとか、ハタケヤマノシゲタダ（畠山重忠）はいるが、ハタケヤマシゲタダという人間はいないというようなことが云われるが、場所の名前を云って、どこどこの誰と云っていたんじゃないですか。

原口　門の百姓の場合は、ほとんど、その門名をする例が多いと云われます。そして、袈裟（畝）というのがありますけれども、これは父に聞いたのですけども、袈裟というのは縁起が良いんで、皆、可愛い子に付けたので。ただ片平袈裟雄さんて方がいらっしゃいますね。（笑）。あの袈裟は大変難しいわけですね。あの場合は、みんな、名前を付ける人が、あれですから、知識階級ですから、非常に難しい字をやるわけですね。そういうことを聞いたことがあります。

江口　それとですね。ちょっと気になるんですけども、その場所にその姓がないという例が多いのですよね。そのことを、どうとらえたら良いのか。単なる島流しとか、いろいろ戦があったりして、あるいはまあ、反乱があったりして、遠くへ飛ばされたりしてないのか。

原口　それはもう解決されています。角川の日本地名辞典の月報に、児玉幸多先生が。これは兵農分離と郡中位置移しですから、必ず旧豪族は本貫の地との関係を切離すという形での兵農分離が徹底しておりますので、旧のところにいるところの郡管院とか、そういうところでない限りはですね。

永山　種子島は、まだあるんでしょう。種子島さん？

原口　ええ、あれも一遍は知覧へ移って、それからまた島津氏へ忠誠を誓ったと云うんで、旧のところへ返されたという例です。旧豪族でも、本貫の地に居ることは珍しい。指宿氏は、指宿に居ないのが普通です。

永山　さっき云いました、あれを教えて下さい。阿久根という姓が加世田に多いというのを。なにか聞いていらっしゃいませんか。

原口　小湊のペンキ屋さん（？）、皆、阿久根。

江平　領主級・豪族級の苗字だと思いますよ、阿久根の。

小川　阿久根から移住したという証拠があるんですがね。

江平　藩の命令で。

永山　阿久根から移ったんですか、それで。

原口　しかも、小湊に集中していると思います。小湊・共進などの三地区に分れています。浦と士族と阿久根姓を主体としたもの、それから浦と士族と百姓と、集落がはっきり分れています。現在の住宅明細図でも、きちっと出ると思います。

唐鎌　さっき出ました門のこと。門の名なんてのは、耕作地なんですか、それとも名頭なんかの住んでいた住地を云うんですか。

江平　住地。やはり、近世でも、大字・小字式のものがあるわけですから、小字だって、やはり、あることはあるわけです。割替のあれ（文書）に書いてありますね。大字じゃなくて、中字ぐらいですね。中字イクオール門名。居住地名ですね。

木場　居住地の地名と門名とは、いろんなものがあって、やっぱり、良い地名を考えよう、広めようという、善福とか福留とか、そう云ったようなのが嵌んでいますがね。川内の田崎などは、地名と全く関係のない善福とか福留という門名を使っている。

江平　これにあげてある知覧のものは、全部、門名です。九分九厘。飯野門・前門・福留門。

木場　苗字は明治になってから、門名から取って苗字になったのでしょうから。門名以外から出たものもあり、なにもそんな門名ばかりとは限らない。

江平　それは、そうです。知覧の場合はそれが多かったもんですから、それを念頭において、全部、門名と云ったまでです。

本田　入来院の場合なんかは、地名の方が多いですね。

木場　もう一つは、いわゆる江戸期になった時に、もとは武士のような格好の人が帰農した場合に、自分が持っておった、昔持っていた苗字を名乗る、それもある。

藤浪　姓は温存しているものもあるようです。土着の人が表に出さずに。例えば、野辺というのがあります。藩政時代は、名頭になっています。そして、それは堂園門に居ります。

唐鎌　そういうのは当然。それもあるんですね。

小川　門名から苗字・姓の出たのは、まあ、すなおな方です。そうでない場合に、浦浜という土地をもっていない、門でない所の人の苗字になったら、例えば深い井戸があったら深川、梅の木があったら梅木というようなのがありますが、浦浜みたいな門をもらっていないところは、そういう名前をもらって付けたんじゃないか。

江平　海岸地帯の人々はですね。

原口　江戸時代は、町人でも船持商人などは、大坂へ行ったり、他所へ行ったりで、取引上、苗字がないと困るので、官が認めていた。

本田　そうですね。

原口　武士よりも町人の方が経済的には上ですから。（笑）。

肥後　話はつきませんが、時間が参りましたので、これで終らせていただきます。案内にありました国分市府中の小字紹介は、次回にもち越したいと思います。どうもありがとうございました。

〔後記〕江平先生から、「一色」についての当日の発言は取消したいとの申し出がありましたが、話の流れの辻つまが合わなくなるため、そのままにしてあります。その旨をお含み下さい。なお、編集者の解釈違いがあれば、申し出てください。次号で、訂正します。

名字と苗字の差違、それは歴史感覚の奇妙な・微妙な差異にすぎません。

〔伊敷〕

1. 伊敷と伊奈色神

○ 貞観二年(860)三月二十日庚午. 授薩摩国正六位上伊爾色神従五位下(三代実録).

○ ミマキイリヒコ ── イクメイリヒコ ── イニシキイリヒコ
　　└ ヤサカノイリヒコ ┬ イホキノイリヒメ
　　‖ ├ イホキノイリヒコ
　　ヤサカノイリヒメ └ タカキイリヒメ
　　‖
　　応神

吉井巌「天皇の系譜と神話」P.81

2. 鹿児島県にみられる「シキ」地名

○ 伊敷・佐敷・伊座敷・青敷・舞敷野・敷根

○ 知識・甑島・平木野・梨木野・甑岳

3. 「シキ」地名の分類

① 屋敷　○○屋敷と表記される地名は全国的に分布する。

② 屋敷に類するもの　居敷・倉敷・蔵敷・敷地 etc.

③ 特殊な建物に由来するもの　板敷・板長敷・桟敷 etc.

④ 特殊なものの産地(敷は集落単位の呼称?)　三ケ敷・金敷・鎌敷・釜敷 etc.

⑤ 雑色の居住地に由来するもの　雑敷・蔵敷.

⑥ 職田に由来するもの　敷田.

⑦ 一色・一式・一職　一色別納, 一色田, 一色別符, 一職 etc. の解釈あり.

⑧ 広さを示すもの　五畳敷・千畳敷 etc.

⑨ 形状地名(もしくは産地)　甑島・甑岳・小敷・越敷山・古志岐島 etc.

⑩ 色彩地名　二色・仁色・錦, 五色 etc.

⑪ 二字で表記したもの　志木・信喜・志岐・式・色, 信貴・鳴・椎木

⑫ その他(意味不明)　伊敷・戸敷・吉敷・平敷・稲敷・刈敷・竹敷・花敷 etc.
　敷根・敷料・敷佐・敷名・敷屋・敷戸・敷槙・敷水・敷波・敷川内 etc.

4. 磯城・城(シキ) ── 日本国語大辞典

① 上代. 石で堅固に築いた城. とりで. ② 周囲を岩石でめぐらした祭場

5. 「イシキ」という地名　(地名用語語源辞典)

① 古代に石棺作りに従事した部民・石城造の居住による地名か。

② イシ(石)・キ(接尾語)で「石地・砂礫地」というか。

③ 少し高い川底. ウヘ(上)・シキの転か。

④ イ(接頭語)・シキで「屋敷地」などというか。

⑤ イッシキ(一色)の撥音不表記.

6. 「イシキ」という地名の表記　(削, 地名大辞典)

一色(神奈川・岡山・岐阜・東京), 石木(奈良・佐賀・長崎), 石喜(新潟)

○ 東京都江東区一色町　材木商の一色十左衛門の姓にちなむという.

○ 岐阜県瑞浪市一色　一色の語源は居敷. 今の屋敷であるという(葉栗見聞集)

○ 佐賀県小城郡三明町石木　古代条里の里名「石木里」に由来する.

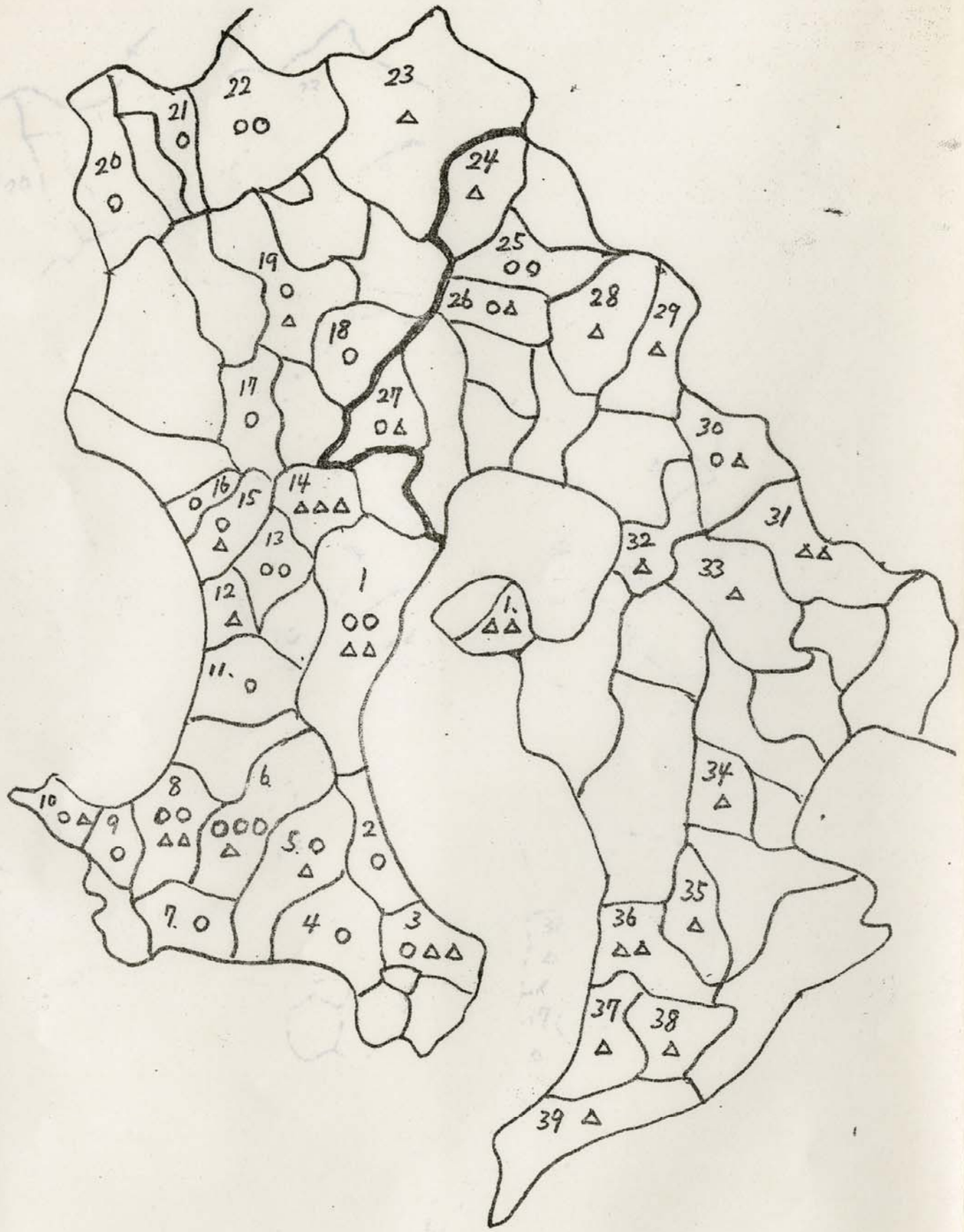
7. イシ・キに類似した地名(鹿児島県内)

入来・市来・高城・指宿・字宿・上薄・肝属・百引・木佐貫 etc.

伊敷と一色

1	鹿児島市	下福元	狩集 ○	8	加世田市	益山	柴立 △
	〃	吉野	柴立 △		〃	川畑	柴立 △
	〃	平川	狩集 ○	9	大浦町		狩集 ○
	〃	郡元	柴立松 △	10	笠沙町	片浦	加集 ○
	〃	東桜島	柴立 △		〃	〃	柴立 △
	〃	有村	柴立 △	11	吹上町	永吉	狩集 ○
2	喜入町	瀬々串	狩集 ○	12	日吉町	日置	柴立 △
3	指宿市	西方	狩集 ○	13	伊集院町	飯牟礼	狩集 ○
	〃	〃	柴立 △		〃	大田	狩集 ○
	〃	東方	柴立 △	14	郡山町	岳	柴立 △
4	頴娃町	御願	狩集 ○		〃	郡山	柴立 △
5	知覽町	永里	狩集 ○		〃	有屋田	柴立 △
	〃	〃	柴建 △	15	東市来町	養母	狩集 ○
6	川辺町	清水	狩集 ○		〃	湯田	柴立 △
	〃	野崎	狩集 ○	16	市来町	川上	狩集 ○
	〃	野間	狩集 ○	17	樋脇町	塔之原	狩集 ○
	〃	田部田	柴建 △	18	祁答院町	上手	狩集 ○
7	枕崎市	東鹿篭	狩集 ○	19	宮之城町	泊野	狩集 ○
8	加世田市	武田	狩集 ○		〃	田原	柴立 △
	〃	津貫	狩集 ○	20	阿久根市	山下	狩集 ○

21	高尾野町	大久保	狩集 ○	36	大根占町	馬場	柴立 △
22	出水市	上鯖渕	狩集 ○ 狩集 ○		〃	城元	柴立迫 △
23	大口市	篠原	柴建 △	37	根占町	川北	柴立 △
24	菱刈町	郡山	芝立 △	38	田代町	川原	柴立 △
25	栗野町	幸田	狩集 ○	39	佐多町	辺塚	柴立 △
	〃	末永	狩集 ○				
26	横川町	上〃	柴建 △				
	〃	下〃	狩集 ○				
27	蒲生町	西浦	狩集 ○				
	〃	米丸	柴立 △				
28	牧園町	持松	芝立 △				
29	霧島町	田口	柴立 △				
30	財部町	北俣	狩集 ○				
	〃	南俣	柴立 △				
31	末吉町	二之方	柴立 △				
	〃	諏訪方	柴立 △				
32	福山町	佐倒川	柴建 △				
33	大隅町	月野	柴立 △				
34	串良町	細山田	柴立迫 △				
35	吾平町	麓	柴立 △				


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39

県下における地名と名字（みょうじ）の関係

東市来中学校　　永山徹彌

はじめに

日本の基本地名は約100万．名字の数は約10万といわれている。

鹿児島県の基本地名は約10万．名字は約1万種と私は見ている。私たちの名字は、大部分が地名から出来ている。

その地名は、東、西、南、北の方位や、田畑、山、川、森、原などの自然景観、谷、岡堀、園、崎などの地形からつけられたものが多い。なぜ、そうなったか。それは人間の居住と呼び名はもっとも関係が深いからである。たとえば、「鹿児島のおばさん」とか「指宿のおじさん」「鹿屋のおじいさん」「川内のおばあさん」と住んでいる地名を呼ぶことが、今でも非常に多いのを見てもわかる。

◎地名にちなむ名字

(1) 歴史的地名＝時代の政治、社会制度によってつけられた名称

(イ) 荘園関係　・本庄　・図師（荘官のこと）
　・加納（荘境を越えた開墾地）
　・別府（追加開墾の官省符・別符）
　・免田　・新免　田子（やとわれ人）

(ロ) 屯倉関係　・三宅

(ハ) 国郡制　・国分　・郡司　・郡　・郡山

(ニ) 郷里制　・本郷　・東郷　・南郷　・西郷
　・一条　・二条　・上条　・中条
　・東条　・西条　・南条　・北条
　・中里　・大里　・里
　・入来院　・伊集院
　（郷ごとに置かれた租税徴収所）
　・園は宅地に付属した非課税の菜園地のことである。
　・東園　・西園　・桃園　・薗田

(ホ) 関（せき）に関するもの（各地の関を管理した）
　・関

(2) 地形 動植物にちなむ名字

〔地形 地目〕 山 川 田 谷など

(山) ・大山 西山 山下 山口 峰

(川) ・川口 川田 瀬川 落合 川合

(田) ・広田 大田 小田 高田 中田

・肥田 豊田 満田 吉田 福田

・内田 前田 門田 勝田 横田

・山田 石田 竹田 谷田 奥田

(谷) ・谷口 谷山 谷川 谷畑 谷村

(塩田地帯) ・塩田 塩谷 塩野 塩川

(温泉地) ・湯田 湯川 湯浅 湯沢

そのほか ・畠 ・畑 ・岡 ・浜のつく名字

〔動物〕 ・犬 ・牛 ・猪 ・熊など

〔鳥〕 ・鶴 ・鶴 ・鷹 ・鶯など

〔植物〕 ・松 ・杉 ・梅 ・桜 ・楠

・藤 ・柿 ・柏 ・桃 ・竹

〔魚〕 ・鮎 ・鮫 ・鰻 ・海老

など、数えあげたら、きりがない。

◎ 県名のつく名字 (鹿児島県の名字)

・山口 (3423) 「全県下」で

・福島 (897) 〃 〃

・長野 (783) 〃 〃

・宮崎 (478) 〃 〃

・福岡 (452) 〃 〃

・長崎 (271) 〃 〃

・石川 (264) 〃 〃

・岡山 (241) 〃 〃

・富山 (61) 「鹿児島市」だけで

・山形 (29) 〃 〃

・三重 (27) 〃 〃

・奈良 (24) 〃 〃

・秋田 (21) 〃 〃

・宮城 (20) 〃 〃

・福井 (18) 〃 〃

・千葉 (15) 〃 〃

・熊本 (14) 〃 〃

・徳島 (7) 〃 〃

・静岡（5）　・香川（4）　佐賀（3）
・鳥取（3）　・広島（3）　・栃木（2）
・茨城（1）　・大阪（1）　・島根（1）・新潟（1）

他の市町村を調べたらまだまだ出てくると思われる。47都道府県のうち28県の名前のつく名字があった。

◎鹿児島県内の市町村の名のつく名字

〔市のつく名字〕

・川内（かわうち）とよむ場合が多い。
・鹿屋（県下に数戸ある）
・串木野（串木野の領主）
・阿久根（加世田市に多い）
・出水（いずみとある）
・大口
・指宿（指宿の領主）
・加世田
・国分
・垂水
・谷山（現在はなくなったが）

◎町村名のつく名字

吉田．三島．十島．喜入．山川．頴娃．知覧．川辺．市来．伊集院．松元．郡山．日吉．吹上．樋脇．入来．東郷．鶴田．祁答院．里．鹿島．野田．東．長里．菱刈．加治木．姶良．蒲生．横川．栗野．吉松．霧島．福山．財部．末吉．松山．大崎．内之浦．高山．根占．田代．佐多．大和．瀬戸内．笠利．　以上．市町村名のつく人が．こんなにたくさんいる．日本全国ではもっともっと出てくるだろう．

名字が．地名から出来ているということがこれを見てもはっきりとわかる．

◎大字（あざ）．小字（あざ）のつく名字

県内には．大字、小字が約10万種ぐらいあるといわれている．鹿児島県の名字も．大部分が．この大字．小字の名前から出来ていると思われる．たくさんある名字の中から．主なものだけを拾ってみよう．

串木野市、日置郡からはじめてみよう。
地名（大字、小字）と名字が同じもの。

（串木野市）
・海土泊　・猪之鼻　・岩下　・宇都
・大薗　・上酔尾・下酔尾（酔尾）
・上袴田・中袴田・下袴田（袴田）・川畑
・久木野　・光瀬　・坂下　・生野
・日浜　・芹ヶ野　・大六野　・土川
・中尾　・野元　・野下　・萩元　・松尾
・松下　・万福

（市来町）
・宇都　・久保野　・木場　・佐保井
・崎野　・松比良

（東市来町）
・梅木　・桑木野　・荻　・赤崎　・田代
・北山　・立和名　・鉾之原　・永野
・永山

（伊集院町）
・池田　・川畑　・腰　・四郎園　・善福
・末永　・出植（今は出瀬となっている）

（松元町）
・入田　・上柿元・下柿元（柿元）
・新村　・田原春　・本坊　・松元
・山方　・和田

（郡山町）　・雪元
・有屋田　・大浦　・郡山　・嶽　・茄子田

（日吉町）
・岩井田　・鵜狩　・上田平・下田平（田平）
・榎園　・樗木　・笠野（笠ヶ野）
・草原　・熊須　・小園　・小吹
・下原　・遠矢（遠矢原）・中原
・前屋敷　・諸正　・冷水　・原口

（吹上町）

。安広（あろう）　。上谷　。小山田　。印口（おしぐち）

。窪田　。小永吉　。七呂　。高田

。永野　。鍋谷　。野添　。柱野　。原園

。坊野　。宮内

（金峰町）

。宇治野　。神野　。永倉　。樋渡　。南谷

以上日置郡内と串木野をあげたが、小さな部落まで入れたら、もっとたくさんあるだろう。これから調べて行きたい。

次に、他の市郡をあげてみる。

指宿市・郡

（指宿市）

。上吹越・下吹越（吹越）「ひごし」とよむ

。田之畑

（喜入町）

。仮屋崎　。川畑　。久津輪　。久保園

。鉛　。田貫　。帖地　。樋高（ひたか）　。生見（ぬくみ）

。野元　。渕田　。古殿　。森満　。弓指（ゆみさし）

。米倉

（山川町）

。鰻　。小川　。尾下（おさがり）

（頴娃町）

。栗ヶ窪　。伊瀬知　。飯伏　。飯山

。尾曲　。奥薗　。折尾（おりお）　。加治佐

。梅山　。源川　。小原（おはら）　。志戸　。摺木（するき）

。諏訪園　。高取　。高吉　。種子尾

。佃　。鶴田　。永谷　。蓮子　。一氏

。福留　。渕別府　。松永　。矢越（やごし）

。山下　。山脇　。雪丸　。吉崎

（開聞町）

。玉井　。入野　。道地　。物袋（もつて）　。加治

○京田　○下吉　○田中　○谷村

川辺郡

（加世田市）

○鮎川　○相星　○大野　○大原　○金気（かなき）
○郷之丸　○新田（しんでん）　○田頭　○高倉　○当房
○堂原　○中山　○新沢（にい）　○橋口　○本坊
○松元

（枕崎市）

○板敷　○篭原　○上木原・下木原（木原）
○茅野　○木口屋（きぐち）　○駒水　○下山（さが）
○白沢　○瀬戸口　○田畑　○俵積田
○水流（つる）　○中原　○真茅　○松崎　○道野
○山口　○山崎　○山下

（笠沙町）

○姥（うば）　○上村　○黒瀬　○清水（しみず）　○新田（しんでん）
○谷山　○福戸山

（大浦町）

○有木　○小浜（こはま）　○大木（大木場）
○窪（久保）　○永田　○野下　○平原
○福元

（坊津町）

○上野　○茅野　○栗野（くりの）　○塩屋　○草野（くさの）
○平尾

（知覧町）

○飯野　○大陽　○加治佐　○上木原
○川床　○菊永　○桑代（くわしろ）　○小田代（こだしろ）
○霜出　○瀬戸山（迫瀬戸山）　○竹迫
○千萬　○寺園　○堂園　○徳永　○取迫
○中木原　○中原　○中渡瀬　○永山
○仁田尾　○西重水　○西野　○西元
○塗木　○林川　○東重水　○平木場
○福永　○松久保　○松山　○丸野
○御園　○茅苔　○横茅　○和田

（川辺町）

。大田尾　。大古殿（古殿）　。大山
。片平　。君野　。下永田（永田）
。木場田　。横原　。桑水流　。田畑
。土喰　。土器割（土器）　。延月野
。野間　。深野木　。古市　。柳

以上、指宿、川辺、日置各郡をあげたが、紙面の都合で、少しかけ足で、他の市郡をあげてみよう。

。黒武者（入来町）　。三腰（宮之城町）
。戸子田（薩摩町）　。黒島（さつま町）
。牛之浜（阿久根市）　。波留（阿久根市）
。尻無　。尻無浜（阿久根市）
。上知識　下知識（出水市）
。切通　。軸谷（出水市）
。屋地（野田町）　。松ケ野（高尾野町）
。火之浦（東町）　。針持（大口市）
。小宮路（加治木町）　。蓑原（財部町）
。五位塚（末吉町）　。安楽（志布志町）

。小能（大崎町）　。益丸（大崎町）
。光明寺（鹿屋市）　。荷掛（吾平町）
。毛下（大根占町）　。笑喜（大根占町）
。荳（根占町）　。猪鹿倉（田代町）
。美座（中種子町）　。丹（竜郷町）

鹿児島県の地名と名字が同じであるものをあげたが、まだまだ時間をかけて調べるとたくさんあると思っている。これからの調査に待ちたい。

昭和59.5.29年　月29日記

鹿児島県の名字(みょうじ)考

日置郡東市来中学校　永山徹弥

はじめに

日本の名字(みょうじ)は約10万種あるといわれている。全部を数えた人は誰もいないだろう。最近は、漢字を読めるコンピューターも開発されているが、判読できる漢字はおおよそ限られている。

ところで、人名や地名ほど読み方のむずかしいものはないだろう。「大字典」や「諸橋漢和辞典」(全13巻)でも載っていない字がたくさんある。また常識では読めない特殊な読み方をする人名や地名が非常に多い。

○　地名と人名

名字の中には地名に起源をもつもの、ことに自然地名をとっているものが多い。田、川、山、谷、村、畑などのつく名字が非常に多い。

柳田国男は「地方土着の旧家を調べてみると、その大部分は近傍の村、または大字の地名と共通である。昔の人は実名を呼ばなかったため、多くの太郎、次郎を区別するのに、主としてその人の居住地を呼んだ。それが今日の名字の起源である。」といっている。

鹿児島県名字順位表　(56.1)

1	中村 5954	26	鮫島 1657	51	岩下 1236	76	上原 979
2	山下 5919	27	中野 1653	52	若松 1222	77	宮田 960
3	田中 5101	28	原田 1643	53	内村 1218	78	田代 959
4	前田 4065	29	井上 1637	54	竹下 1210	79	吉永 947
5	浜田 3352	30	林 1600	55	渡辺 1208	80	竹之内 934
6	山口 3267	31	山元 1534	56	中原 1206	81	中山 922
7	池田 3070	32	南 1532	57	和田 1194	82	藤田 920
8	川畑 2969	33	山田 1499	58	川原 1181	83	末吉 919
9	東 2964	34	福永 1498	59	瀬戸口 1169	84	森田 906
10	松元 2747	35	岩元 1492	60	馬場 1167	85	宮原 905
11	西 2397	36	山崎 1454	61	迫田 1163	86	鶴田 897
12	久保 2296	37	大迫 1435	62	西村 1151	87	藤崎 861
13	有村 2206	38	田畑 1343	63	福田 1146	88	川野 853
14	森 2202	39	谷口 1329	64	福山 1144	89	福島 853
15	橋口 2170	40	福留 1323	65	山本 1115	90	徳田 852
16	坂元 2169	41	大山 1318	66	西田 1107	91	宇都 849
17	日高 2135	42	松田 1292	67	児玉 1097	92	篠原 840
18	今村 2066	43	川崎 1289	68	内田 1090	93	小川 838
19	中島 1976	44	徳永 1286	69	森山 1075	94	横山 830
20	有馬 1931	45	園田 1276	70	黒木 1054	95	本田 828
21	上野 1928	46	吉田 1272	71	佐藤 1034	96	松崎 826
22	永田 1831	47	坂口 1269	72	堀内 1020	97	永山 821
23	福元 1757	48	原口 1264	73	吉村 1015	98	肥後 819
24	松下 1737	49	松山 1257	74	岩崎 985	99	宮内 816
25	上村 1678	50	浜崎 1253	75	平田 984	100	鎌田 814

全国名字順位表

1	鈴木 約200万	26	森 約30万	51	前田 約15万	76	森田 約10万
2	佐藤 190	27	池田 30	52	藤井 15	77	上田 10
3	田中 130	28	石川 25	53	原 12	78	野村 10
4	山本 90	29	内田 25	54	三浦 12	79	田辺 10
5	渡辺 85万	30	岡田 25万	55	石井 12万	80	石田 10万
6	高橋 80	31	青木 25	56	小野 12	81	中山 10
7	小林 75	32	金子 25	57	片山 12	82	松田 10
8	中村 70	33	近藤 20	58	吉村 12	83	丸山 10
9	伊藤 70	34	阿部 20	59	上野 12	84	広瀬 10
10	斉藤 60万	35	和田 20万	60	宮本 12万	85	山下 10万
11	加藤 60	36	太田 20	61	横田 12	86	久保 10
12	山田 55	37	小島 20	62	西川 12	87	松村 10
13	吉田 50	38	島田 20	63	武田 12	88	新井 10
14	佐々木 40	39	遠藤 20	64	中川 12	89	川上 10
15	井上 40万	40	田村 20万	65	北村 12万	90	大島 10万
16	木村 35	41	高木 15	66	大野 12	91	野口 10
17	松本 35	42	中野 15	67	竹内 12	92	福島 10
18	清水 35	43	小山 15	68	原田 12	93	黒田 10
19	林 35	44	野田 15	69	松岡 12	94	増田 10
20	山口 35万	45	福田 15万	70	矢野 12万	95	今井 10万
21	長谷川 30	46	大塚 15	71	村上 12	96	桜井 10
22	小川 30	47	岡本 15	72	安藤 12	97	石原 10
23	中島 30	48	辻 15	73	西村 12	98	服部 10
24	山崎 30	49	横山 15	74	関 12	99	藤原 10
25	橋本 30万	50	後藤 15万	75	菊池 10万	100	市川 10万

○名字について

名字のおこりについては諸説がある。平安時代や奈良時代にも名字が出てくる。しかし、これは名字(なあざ)とよんでいた。鎌倉時代には苗字といったが現在はまた名字といっている。

家の名を名字というのは、昔、他人の田んぼと区別するため、自分の田に名前をつけたからである。

前述の鹿児島県名字順位表100位の中に田のつく名字が25ある。実に4人に1人の割合である。それも2位以下を大きくはなして特別に多い。

日本は古来、「瑞穂」の国といわれ、稲作を主体とする国であった。田んぼで米を作るわけであるがよその田と区別をするため、横田、前田、上田、下田、中田、西田、南田、とよんだ。そのうち、その田の名前で持ち主をいうようになったといわれている。

大昔は、東日本より西日本の方がひらけていた。そのため人も多く住んでいたし、田んぼも良く発達していた。そして、それぞれの田に名称がついた。そういうわけで、今でも、田のつく名字は東日本よりも西日本の方に多い。

各市郡別名字順位表

(56.1)

鹿児島		指宿		川辺		日置	
1	山下 1885	1	中村 497	1	中村 558	1	田中 421
2	田中 1707	2	浜田 491	2	田中 387	2	山下 354
3	中村 1559	3	東 286	3	山下 380	3	久保 351
4	前田 1097	4	山下 277	4	鮫島 378	4	東 321
5	浜田 1009	5	浜崎 266	5	森 315	5	山口 298
6	山口 944	6	今村 243	6	立石 298	6	浜田 296
7	池田 875	7	川畑 235	7	東 276	7	前田 281
8	松元 871	8	田中 216	8	白沢 270	8	中村 265
9	川畑 789	9	西 215	9	上野 267	9	坂口 243
10	有村 781	10	坂元 162	10	西 253	10	松元 234
11	東 777	11	有村 150	11	山口 234	11	有馬 233
12	中島 647	12	上野 144	12	上村 222	12	吉村 216
13	日高 644	13	福留 140	13	前田 216	13	今村 210
14	今村 627	14	松元 139	14	久保 208	14	西 203
15	上野 608	15	上村 132	15	松山 206	15	有村 196
16	有馬 598	16	大迫 124	16	山崎 197	16	池田 188
17	永田 598	17	福元 124	17	小湊 188	17	橋口 185
18	西 575	18	前田 120	18	菊永 187	18	福田 171
19	久保 566	19	野元 119	19	阿久根 186	19	松下 165
20	坂元 564	20	岡元 117	20	田代 185	20	内田 162

各市郡別名字順位表

(56.1)

薩摩		出水		伊佐		姶良	
1	山下 597	1	中村 390	1	中村 129	1	池田 629
2	中村 454	2	山下 336	2	前田 129	2	中村 613
3	橋口 428	3	田中 308	3	山下 123	3	前田 539
4	東 310	4	川畑 253	4	山口 98	4	山下 486
5	川畑 308	5	前田 217	5	坂元 76	5	山口 456
6	浜田 303	6	中野 199	6	田中 73	6	田中 444
7	山口 297	7	浜崎 197	7	今村 67	7	松元 343
8	福山 294	8	山口 188	8	松元 67	8	浜田 333
9	田中 285	9	松下 186	9	原口 64	9	有村 311
10	井上 267	10	池田 172	10	中間 63	10	岩元 306
11	中野 252	11	上野 172	11	橋口 62	11	西 279
12	久保 224	12	大田 168	12	西 58	12	今村 269
13	西 198	13	松元 166	13	竹下 57	13	坂元 266
14	前田 190	14	浜田 162	14	井上 54	14	林 262
15	松下 189	15	寺地 158	15	池田 54	15	内村 255
16	有馬 187	16	花田 155	16	緒方 54	16	森 250
17	中島 187	17	吉田 147	17	内村 53	17	山元 248
18	今村 182	18	若松 145	18	久保 53	18	竹下 244
19	坂元 181	19	東 144	19	瀬戸口 52	19	川畑 241
20	田島 181	20	松永 140	20	東 52	20	谷口 234

各市郡別名字 順位表 (56.12)

	曽於		肝付		熊毛		大島
1	山下 401	1	中村 657	1	日高 830	1	前田 487
2	中村 315	2	山下 571	2	岩川 301	2	山田 476
3	田中 243	3	田中 568	3	鎌田 225	3	川畑 459
4	谷口 213	4	前田 539	4	寺田 225	4	栄 430
5	前田 193	5	松元 376	5	鮫島 218	5	森 398
6	山口 185	6	岩元 327	6	中村 206	6	山下 388
7	川崎 179	7	池田 317	7	上妻 197	7	池田 349
8	坂元 173	8	浜田 306	8	渡辺 195	8	平だら 320
9	上村 161	9	坂元 300	9	田中 160	9	泉 315
10	吉田 149	10	永田 299	10	長野 152	10	林 313
11	原田 147	11	中島 272	11	榎本 141	11	中村 311
12	池田 146	12	川畑 264	12	徳永 139	12	西 303
13	川畑 146	13	森 244	13	山口 135	13	田中 289
14	八木 142	14	山口 241	14	吉市 127	14	吉田 268
15	和田 142	15	東 236	15	羽生 125	15	田畑 264
16	原口 140	16	日高 233	16	山下 121	16	久保 258
17	山元 138	17	迫田 229	17	河野 119	17	里 248
18	永田 130	18	福留 226	18	山崎 114	18	南 245
19	東 130	19	瀬戸口 223	19	遠藤 112	19	安田 230
20	中山 129	20	福元 211	20	真辺 111	20	福山 223

◎鹿児島県の名字の特徴

(1) 人口に対して、姓の種類が非常に多く、めずらしい名字がたくさんある。

(2) 名字はふつう二字で出来ているが、鹿県には、一字姓や、三字姓が他の県にくらべて非常に多い。一字姓はとくに奄美大島に多い。

(3) 三字姓では名字の頭字に「上、中、下」「東、西、南、北」「今」「新、古」のついたものが多い。

(4) 二字の間に「之」を入れた名字が多い。これは鹿県の特徴である。

西園 → 西之園　　木下 → 木之下

坂上 → 坂之上　　上原 → 上之原

(5) ヤ(くさかんむり)のついた薗、有薗、地薗

(6) 元が多い　松本 → 松元

・元のつく名字は九州に多いが鹿県はとくに多い。

地名研究会報　第6号

昭和59（1984）年12月2日
鹿児島地名研究会

Ⅰ　第6回例会　　9月2日(日)．教職員互助組合会館小会議室

（出会者）　池田信夫・伊東和彦・井上源次・上薗輝典・江ノ口汎生・江平　望・片岡八郎・亀澤末男・唐鎌祐洋・桐野利彦・木場武則・冨永清志・中村明蔵・永山徹弥・花園正志・原口　泉・肥後芳尚・平田信芳・藤浪三千尋・松田　誠・松浪由安・山崎盛隆・山田慶晴・吉満宗信・脇元東明（26名）

Ⅱ　薩藩名勝考読会．P.14～P.17

〔話題となった地名および事項〕――― 鶴丸城・宝字峯・十二時

鶴丸城の語源

平田　今日の範囲を読みながら、問題にするのであったら、まあ、鶴丸城と諏訪しかないなと思ったのです。諏訪はちょっと難しいので、これは諏訪神社にもとづく地名と片付けざるを得ないでしょう。鶴丸はちょっと分析が出来そうなので分析してみました。今から鶴丸について述べたいと思います。その前にプリントをお配りいたします。（後掲レジュメ）

まず、鶴丸城というのは慶長六（1601）年に着工して、慶長十一（1606）年、城の前の橋が完成したと鹿児島大百科辞典などに書いてあります。南北朝以来の山城で、旧称は上山城（ウエヤマジョウまたはウエノヤマジョウ）。「鹿児島城は御城とか御内と称し、鶴丸城は江戸中期以後の美称ではないか」と、鹿児島大百科辞典に書いてあります。そこで、おやっと思ったわけです。薩藩名勝考・三国名勝図会などは、すべて、「鹿児島の坂元村にあり」。名勝考には万年門と、門名もあげてあります。「即ち府治なり、山に拠りて城とす、其山は鶴丸山といふ」。果たして鶴丸山といったのか。「此山の形、舞鶴に似たり、故に名を得たりとぞ」。国分高校および国分小学校のあるところは、舞鶴城と申します。あちらの方が早いわけですね。それで鶴舞城と付けるわけにはいかないから、「鶴丸」というような美称が出来たのではないかとの拡大解釈になるわけです。

話は変りますが、未来社から出された谷有二「日本山岳伝承の謎」という本を、本屋で見かけ、買って読んでいるうちに「丸」という地名に興味をもつようになりました。この方は登山家ですが、関東地方に「ヘ丸」という語尾のつく山の名前が多いことに眼をつけて、「丸」を分析しているわけです。そこに書いてありますように、城郭をいう「丸」と、山名をいう「丸」と、田主丸、これは北九州にある集落の名前ですが、そういう「丸」がある。船の名前も「丸」と云っている。人名も「丸」、器物も「丸」という。また、その本の中に、大正年間に、金沢正三郎という人の『日鮮同祖論』に出て来ることば「マルは山を意味する朝鮮語に他ならない」が引いてありました。マルの語源は朝鮮から来ているのだと。結局はこの人も、「マル」というのは、やっぱり、向うから来た山を意味することばではないかという観点で、この本を書いています。

そこで、地名学者がどういう見解を示しているかを見るために、地名語源辞典を当ってみました。山中襄太「地名語源辞典」は、「ほぼマルく一郭をなした地形に名付けられた地名か」と、まあ形状地名だろうと見ております。楠原・清子編「地名用語語源辞典」、これは地名研究協議会のリーダーの著作ですが、これが七通りの分析をしております。そこに書いてあるとおりです。

①円形・球形を示す。山名、川の曲流部、山裾の湾曲部、円形の田や山間の小平地など。なお丸山はとくに円墳に名づけられている場合が多い。②中・近世の城郭の部分をなす用語。③ヘバル（原・壁）の転、北九州に多いヘ丸の形の地名など。④ヘバル（張）の転か。全国的に立陵・台地の先端・張り出した所に見られる。⑤動詞マルグ（転）、マルゲル（転）などから崩崖・地辷り・斜面・堤防など「崩壊地形・浸蝕地形」を示すものであるか。山名語尾のマルもこの意か。⑥ナル（均・生・鳴など）の転か。⑦モリ（森・盛）などの転か。ヘ丸の形で山名の語尾につく。

②の城郭の部分をなす用語、これはもう常識ですが、今述べたような解釈で、「丸」という地名に対して研究者はしっかりした分析をまだしていないのだなということに気付きました。そこで「日本地名索引」に出て来る「丸」を拾いあげて、次のように整理してみました。

①長幼順位名　太郎丸から次郎丸、三郎丸……十郎丸が出て来ました。

②数詞型として、市丸・次丸（つぐまる）・又丸・乙丸・乙王丸・三ッ丸・八丸（はちまる）・外丸（とまる）・塔丸・筒丸・千丸・千野丸というのが出て来ました。

③大小型では、大丸・中丸・大小丸・小丸。この中で、小丸さんというのは、川内に居られるのではないかと思います。

④神仏信仰型として、大王丸・天神丸・仁王丸・不動丸・神丸・神ヶ丸・童子丸・薬師丸。薬師丸ヒロ子という女優がいますが。宮丸・宮王丸・比沙丸（ひしゃまる）・弟子丸。弟子丸は国分に地名があります。力丸・盆丸・伊勢丸・鬼丸。鬼丸という姓は鹿児島県にあるようです。鬼丸は神仏とは違いますが、その類とみなしました。

⑤寿型すなわち住名として、王丸・吉王丸・吉丸・吉野丸・秋丸（明丸）・袈裟丸（今朝丸）。袈裟というのは、おめでたい名前という話が前回出ました。今丸・京丸・千代丸・土与丸（とよまる）・安丸。益丸というのは、大崎にその地名があります。それから、福丸姓・徳丸姓は県内に多いようです。それから、高丸・永之丸。

⑥金石名は丈夫な子に育つという意味でしょうか。豊かに育つという意味でしょうか。金丸という前知事、現参議院議員がおられます。（金丸・小金丸・岩丸・石丸・土丸）

⑦その次、動物の名前を整理しておりましたら、十二支があることに気が付きました。そこで、根丸というのはどこに入れて良いのかと、植物の中で解しかねてねまっていたのですが、十二支の変形と解釈すれば都合が良いと判断しました。

根丸（子丸）・牛丸・虎丸……猿丸・鳥丸・猪丸。そうすると、東郷町の鳥丸という地名は、人名から来た地名と見なして良いわけです。それから小犬丸。鳥では鶴丸・雁丸があります。

⑧植物名では、米丸・麦丸・桑丸・萱丸・笹丸。酒丸もあります。それから、松丸。

⑨色彩名は、赤・黒・白です。（赤丸・黒丸・白丸）

⑩水田と結びついたものに、田丸・田主丸・水田丸・野田丸・藤田丸・和田丸・貧田丸（びんでんまる）があります。

⑪地形名はそこにあげたようなものです。（沢丸・沼丸・津丸・瀬丸）

⑫天文気象的なものが、日丸・星丸。星丸は法師丸という神仏信仰型になるかも知れません。雨丸・雪丸・節丸・湯丸・湯桶丸。

⑬器物名としては、橋丸・笠丸があります。

⑭城郭名の説明は必要ないと思います。（本丸・二之丸・出丸）

⑮その他で判らないのは名丸と目丸。その逆の丸名・丸目というのもあります。その次の武丸・文丸・歌丸・才丸。これは、こういったものを親が子に期待したということでしょう。政丸・新丸・持丸・興ノ丸・平丸・手古丸・軸丸・美濃俣丸・喰丸（くいまる）・丈ヶ丸。ただ「丸」というのもあります。丈ヶ丸は、千丈ヶ谷の千丸と丈ヶ丸とみるか、または城に結びつくかも知れません。

このようにして見ますと、〜丸というのは主として人名語尾だということが明らかになって来ます。しかも、平安時代以降の開墾地名。〜丸という地名が開墾地であることが判って来ると、鹿児島県には徳重とか豊重、福重・満重など多くの人名地名がありますが、それらと併せて眺めて行けば、平安末から鎌倉時代の開墾地というものがクローズアップされて来ます。このように考えると、〜丸という地名はゆるがせに出来ないと思うのです。

次に、丸が頭に来るものは、自然地形を示すもので、これはまるい形の地形につけられた地名です。丸山・丸岡・丸峰・丸岩・丸島など。（以下読みあげませ

ん)。それから、形状地名としての丸尾・丸尾原・丸尾山・丸尾崎など。これらは鹿児島県に多いようです。植物に関係ある地名として、丸木・丸柱・丸林・丸森・丸松・丸戸。水田につけたものが丸田と丸志田。人為的な意味あいがあるとみなされるものの中で、丸名・丸目は先程述べた名丸・目丸と関連がありますが、見当もつきません。それから、丸貫。「貫」という地名も鹿児島県には多いようです。それから、丸蔵・丸栖・丸井・丸口・丸塚。その他に、丸子・丸押・丸サゲ・丸三・丸万・丸一洪などがありますが、よく判りません。

これらの中、丸尾と丸名と丸子については、大体そういう解釈が「日本地名学」「国語大辞典」「地名用語語源辞典」に載っております(後掲レジュメ)。なお以前から「名」という地名は地域を示すものではないかと思っていましたが、国語大辞典では、相模国鎌倉あたりで十三石の面積を丸名と云って、その半分を半名というとの記載がありますので、私が考えていた「へ名」は地域を示す名称ということは、的を射ていたのではないかと思います。

その次、角田文衛「日本の女性名(上)」ですが、これは各時代毎に女性名を整理してあるものです。下巻はまだ出ておりませんが、これに「丸」とか「彦」を付け換えたら男性名になるわけですから、基本的な考え方を示した文献とみなして引用しました。その中で、「延喜天暦の時代に、庶民の男性名の語尾に用いられていた丸が、貴族の男童の名に用いられ始めた」としてあります。

和名抄で、丸という例があるかを探しましたら、遠江国に田椀郷。これは椀田郷ではないかという説もあります。安房国に満隈郷、陸奥国に丸子郷(マリコまたはマルコ)というのがあります。

大隅・薩摩のへ丸史料は旧記雑録の中から探しました。宮永社役支配状に、ここにあるような例があります。(千与丸・釘丸・土与丸・福丸・宮与丸・宮王丸・安丸・安松丸)。建久図田帳にも、「丸」が見えます。(三郎丸・火同丸・弟子丸・千手丸・主丸・薬師丸・熊同丸)。建治二年(1276)の石築地役配符案にも功徳丸・弟子丸名・米丸・用丸・末丸・法師丸・得丸・梭校丸・神一丸の例があ

ります。これらの「丸」を考えると、平安時代の人名によるもので、開発者の名前を付けた地名だと見当がつきます。

私も以前から電話帳をよく利用しているのですが、永山先生のようなことはせずに、もっと横着に、昭和47年のものが全県一冊のものですから、それをいつも使っております。それで鶴丸姓を拾いあげますと、そこに掲げた数字になります(後掲レジュメ)。これは、店とか事務所などを省いた純然たる人名だけのものです。鶴丸という地名は吉松町にあり、昔は吉松郷地頭仮屋の所在地でした。地図に示したドットは、国分・隼人・福山、それから大崎・大口に集中していますから、吉松からその昔、国分・隼人などへ移されたという見当がつきます。

鶴丸については、以上のような分析をいたしました。ご批判いただけましたら、有難いと思います。

〔質疑応答〕

永山　丸鶴という姓がありますよね。これは姶良郡に多いのですが。

平田　丸鶴ですか。ああ、そうですか。(丸亀と同様な例?)

永山　東市来町の小学校は鶴丸小学校。これが鶴丸城とどんな関係があるのかなと思っていたんですが、鶴丸小学校というのがあります。

平田　鶴丸小学校は地名として地図に示してあります。

藤浪　吉松には鶴丸という姓はないのですか。

平田　電話帳にはなかったのですが。

藤浪　隼人町日当山に鶴丸病院というのがあるんですがね。そこは江戸時代からの上級術士で年寄役などをしていたところだと云うんですが、吉松との関連は聞いたことはないのですが。調べてみないと判りませんが。

平田　いやいや、それはずっと早い時期に移されたのではないかとの想像です。吉松に鶴丸という地名がありますから、本来はその地名をとって姓としたに違いないと考えられるわけです。前回、話が出ましたように、大姓は配置転換されるということで、国分・隼人に移ったのではないかと分析できるということで

す。

本田　東市来の鶴丸ですね。あれは、市来氏が居った頃から鶴丸城と云ったのですか。島津勝久が取った後に付けたのですか。

平田　さあ、それは。そこまではまだ勉強しておりません。そう簡単に城の名前は、攻め取っても変えないと思いますが。このように整理をしてみますと、丸とうしろに付くのはほとんど人名ですから、鶴丸という人名から出たものが地名となり、そこに城が出来たら、そういう城名が出来るだろうと解釈したいわけです。

本田　その場合、鹿児島には鶴丸という地名はなかったはずですがね。上山という地名はあっても。

平田　それでですね。上山に鶴舞城の名を考えたけれども、語呂が悪いので鶴丸城という雅称を考え出したと思うのですが。鹿児島の鶴丸城の場合は、鶴舞から考え出されて行ったでも良いのではないか。そんなに古くから、鶴丸と云った地名や姓はそこにはなかったわけですから、鹿籠名勝考の解釈でも良いのでしょうか。結論を云うと、「丸」というのは本来は人名から起きた地名だということになるわけですから、そのように解釈しなければ、鶴丸城の解釈は出来ないことになります。それからもうひとつ。鹿児島県で鶴丸の家紋を持っていたのは肝付氏。肝付氏を征服して鶴丸の紋の名称を取ってしまった、そういうような、なにか意識的なものが背景にありそうな気もするんですが。

花園　船に「丸」が付きますね。あれは、どういう意味ですか。

平田　船の名前、そこまでは考えていませんが。人の名前、船の名前、それから刀の名前ですね。鬚切丸・雲切丸とかですね。どなたか、ご存知ないですか。船の「丸」は。

花園　鶴丸の名の発祥は吉松であり、これが県下に分散すると云われたのですが、他県には？

平田　他県にもあると思いますが。

木場　私のところにも、部落に鶴丸姓が二軒あるんですけども、現在の姓で。これも関連があるんでしょうね。紋所の関係は同じですか、紋所は？

平田　さあ、そこまでは追いかけておりませんが、連がるのではないでしょうか。

木場　やっぱり、鶴でしょうね。

平田　さあ、どうですか。

木場　調べてみたいですね。

平田　よろしくお願いします。いつか教えてください。

山崎　ひと一質問、よろしいですか。あの、美称。結論はやっぱり美称という意味ではないですか。

平田　そうです、鶴丸城は。しかし、「〜丸」というのは本来は人名。鶴丸城は美称であるけれども、他の地名の「〜丸」は人名として解釈して良いのではないかということですね。

山崎　ですけれども、人に付ける時は、やはり美称を付けたいのが人情ではないでしょうか。「〜丸」というのも、結局は美称。

平田　いやいや、丸というのは美称というより、奈良・平安時代には、男の子に付けるのは、現在付けている彦とか雄（男・夫）というのと同じくらいに、もう美称どころではなくて、ごく普通なんですよね。

山崎　しかし、他にも付けようがあるんだけれども、「丸」を選ぶということは、やはり期待しているわけですから、結局は美称ということになるのではないでしょうか。結局、気持は一緒みたいな気がするんですよねえ。城にしても、壊れないような城というか、落ちないような城という気持がやはり働くと思うのです。人間に付ける場合でも、結局は一緒だと思うんです。美称は疑問だというような云い方をされたから、このような質問をしたのですが。

平田　いや、ですからね、どうしてこの美称が、という疑問を感じたから、いろいろ分析をして、結論はやっぱり美称だというふうにもって来たわけです。

（後記。鶴丸城の所在地であった万年門という門名に関連があることも考えられる。「鶴は千年、亀は万年」といわれることから、万年に対して鶴、カド（門・角）に対してマルという連想が働き、万年門の対照語として鶴れという雅称が考えられたものとみられる。）

片岡　突飛なことですが。今、美称ということが出ていますが、私が初年兵の時、班長殿が北九州の方でして、「こら、小便まるな」と、云われていました。小便まるとは、放つということですね。非常に汚いことばにマルというものがつながるような気がするんです。「小便まる」と、しょっちゅう云われていたもんですから。名詞だけから考えるのでなくて、動詞からも考えなければいけないのではないでしょうか。動詞から考えると、ツルとかツルムとかは、セックスに関したことも考えられるわけです。

平田　なるほど。（笑）。

片岡　ツルの語源は、朝鮮語のツルミとか云われます。

江平　丸は子供の名前、それから役人としては下っ端の名前。図田帳に出て来る薬師丸とか熊同丸というのは、下級の役人。それから丸自体、今おっしゃった通りの軽称、落し眼で見られるようなことを云います。「玉葉」には、源頼朝が派遣した北条時政を「北条丸」と書いてあって、鎌倉幕府が編纂した吾妻鏡には「北条殿」としてあり、同じ人物が「丸」と「殿」で表現されています。丸は地位の低い人あるいは子供につけられたわけです。これが軽称になるか愛称になるかは、ほとんど紙一重だろうと思うわけです。子供は、可愛がるようで、また、けなぶるような感じ。そういう愛称ということになるんではないかなということも感じます。軽称というのは、軽んじた意味です。

平田　ああ、卑下した云い方ですね。

江平　そうです。自分で云ったら、「丸」はその「丸」かも知れませんし。

平田　公卿が「麿」と云っていたのが、そのうち変化して「丸」になるわけですよね。

江平　あの、おマルなんかと似ているかも知れないですね。

平田　他にございませんか。

宝字峯

平田　名勝考の中に、桜島のことを宝字峯という表現をしているのは、天平宝字八年（764）の爆発で、薩隅境の信爾村の沖に沙石が聚って神造嶋が出来たという記事に関係があると思うのですが、白尾国柱は、その爆発を桜島の爆発と、とらえているのだなという感じを持ちました。これについて、どうですか。江ノ口さん。

江ノ口　ちょっと気になることがひとつあるんですけどもね。あのことについて、続けて三つの記事がありますよね。天平宝字八年、それから何年でしたかね。その一番最後の記事に、去る神護中という表現があるんですよね。もし最初の信爾村の記事を指しているのであれば、それは天平宝字八年のことだから、神護中ではなくて宝字中という表現でなければいけないのに。火山噴火の三つの記事がどうもぴんと来んのですけども。どなたか教えていただけたらと思うのですが。

平田　えーと、資料を持って来ていないのですが、中村先生、どうですか。

江ノ口　これは、どなたの説でも、そこまで突込んだのを書いたものがなかったもんですから、どう解釈すれば良いのかなと云うことで。この三つの噴火記事をイクォールで結べるものか、とか。後の二つは大隅ということが限定されますのでイクォールで結べるかも知れないのですが。そうであれば、去る神護中ではなくて、去る宝字中という書き方をしなければおかしいのではないかと、ひっかかるわけです。

平田　宝字と神護について、この辺をよく読んでおられる中村先生、どうですか。急に云われてもとは思うのですが。

中村　急に云われても、よく判らないのですが、天平宝字八年の翌年は天平神護ですよね。また、噴火の記事は十二月ですよね。そのことが中央に報告され

るのは翌年だということになる。神護中に報告されたということも考えられるのではないか。

十二時

平田　原口先生、これを教えて下さい。十二時という表現が出て来たんですが、この頃ならば九ッとか八ッとか六ッというのが一般的表現ですよね。十二時なんてのは、鹿児島の連中は既にヨーロッパ式の時計の表現を知っていたのかなという疑問をもったのですけども。

江平　これは十二の時ということじゃないでしょうか。一日の意味。

平田　一日間。あはー、丸一日。はい、判りました。（笑）。こういうポカをやりますので。六ップラス六ッで、十二の時（とき）ですね。「じゅうにじ」と読むのでなくて、「じゅうにのとき」ですね。

江平　音読みはして良いわけです。十二時（じゅうにじ）と。

平田　これは丸一日のことですね。私はこんな調子ですから、皆、気楽に、ものを云って下さい。（笑）。今日のところは、あんまり問題は出て来ないようです。ここで休憩にしましょう。（後日、松浪先生から、県立図書館にある鹿藩名勝考の写本には送り仮名が付いている旨、ご教示頂いた。十二,時と送り仮名が付けてあるとのこと）。

Ⅲ. 問題提起　江ノ口汎生『川内市楠元町の地名』

川内から今日来ているメンバーというのは、実は川内市郷土史研究会のメンバーであります。郷土史研究会というのは、郷土史とか歴史・民俗のことを研究する団体ですけれども、この団体は講師を招いて講演をお願いしたり、あるいは現地を歩いたり、あるいは古文書などをひもどいたりしているわけです。そうした研究の中で、昨年、そして今年と、年間を通してのテーマに「地名」を選びました。昨年の4月、平田先生に来ていただきまして、地名の意義とか大切さということについて、あるいはどういうことが判るかということについてお話しして貰ったわけです。それで、昨年6月に本会が発足しました折に、お招きを頂いたもんですから、こうして出席させていただいております。

地名と申しますと、すぐ古文書をあせくったり、あるいは古文書に出て来る地名が現在のどこかというふうになるわけですけれども、私たちが取り組んだ目的というのは、実はそれ以前の問題であります。つまり、地名というのは「読み方」が非常に重要で、その字がどういう字を使ってあったということは、あまり、地名の場合、重要でない。それならば、読み方をちゃんと今のうちに記録しておく必要があるんじゃないかということで、各会員がそれぞれ身の回りの小字を調べ、また、小字以外の所謂俗称地名といったものを調べようということでやってるわけです。

私達がやっているのは、その語源とか、いつ頃から出て来る地名なのかというようなことについてではありません。あくまでも、「よみ」ということです。具体的なポイントですが、まず小字あるいは俗地名の「よみ方」を調べる。それから、範囲を出来るだけ特定する。その範囲というのも、地名の由来そのものが地形から来ているのが非常に多いことから、将来その地形が変っても昔はこうであったということを記録しておく必要があるとの立場で、大体の地形を調べておく。それから、由来について調べる。この由来について、現在、南日本新聞がコラム（里の字）で取りあげておりますけれども、地元の人から聞ける事柄というのは、実はあまり当てにならないわけです。たとえば、二・三日前に宮之城湯田をとりあげていましたが、そこに鳥が羽を休めているのを百姓が見つけて、それで湯田としたと。時代は二百年ぐらい前だというような伝えがあると述べておりました。ところが、ご承知のように、湯田という地名は既に入来文書に出て来る鎌倉期の地名でありますから、それよりずっと古いわけです。まあ、このようにあまり当てにはならないんですけれども、そういう伝承なり伝説なりがあるのであれば、今のうちにやはりそれも地名を離れたひとつの立場で記録しておくことも意味があると考えているわけです。それから、川内市は市史を出しておりますけれども、市史の中で取りあげられた事項というのは、それこそ最も基本的なことで、まだ

まだ記録しなければならないことがあるんではないか。また、一時代前の村の畑地とか村の姿というものを記録する必要があるのではないか。そう云った観点で石塔とか神社とかも、出来たら拾い出そうとしているわけです。

楠元の歴史的な概要については、レジュメの2枚目に角川地名からのコピーを出しておきました。それから、実際に小字の調査にあたっては、地元の古老に直接聞いて調べました。それから、注意しなければいけないのは、二重マルを打ってありますけれども、地名の訛りと標準語についてであります。たとえば、そこに大門口という地名がありますが、「ダイモングチ」を地元で呼んでいるように「デモングッ」としても、その二つの呼び方はあくまでも転化・訛りであり、どちらで記録しても良いのではないか。次の皆元にしても、「カイモト」と書こうが「ケモト」と書こうが、その意味を考える上においては、あまり重要じゃないんじゃないかということです。ところが、梅木という小字がありますが、その梅木を地元ではそこに書きましたように、「ウメッ」と呼んでいるわけです。ところが、字絵図には「梅丸」としてあります。こういう場合は、梅木が訛って梅丸となるのか、あるいは梅丸が訛って梅木になるのかというと、どうもそうじゃないようです。これは明らかに誤記だろうと考えます。そういうようなことで、現地の読み方にも単なる方言でよんでいる場合と明らかに誤記と思われる場合があり、この点は充分注意していかなければいけないのではないかと思います。

個々の楠元の地名あるいは神社についての文献ですが、そこに一通りあげておきました。六番目の文献の小字が一番重要だと思いますので、小字別に説明します。4枚目の小字絵図をご覧ください。（後掲レジュメ）

3.境田という地名がありますが、これは迫田（サカイダ）あるいは「サケダ」。4.境谷（サコンタイ）も市役所の登記上では「サカイノタニ」になりますけれども、「サコンタイ」と云います。

8.登瀬。地元では「トセ」と云っておりますが、市役所の方では「ノボセ」で登録してあります。これはどちらが正しいのか即座に断定出来ませんけれども、

ちょうどこの場所の川向いの所に、東郷町領域に「ノボセサカ」あるいは「ノボセサコ」という小字があります。その前の地図を見てもらうと、⑧の地形がよく判ると思いますが、岡になっております。その岡を渡船ケ岡（トセンガオカ）と地元では呼んでいます。昔、ここに渡し場がありまして、その渡場のこと。渡船の岡・渡船の場であるからその岡ということで渡船場というような解釈も成立つわけですけれども、稲荷とか宮之城には「唐船」というような字を使ってあるところもあります。唐に通う船ということで使ってあるのもあります。

9.一条ですが、これは地元では「いっじゅ」と呼んでおります。川内には他にも城上（ジョウカミ）に一条神社とこの字を書く神社がありますが、地元の人達はこれもやっぱり「イッジュドン」と呼んでおります。ですから、この一条（イッジュ）と「イチジョウ」というのは、かなり近いんじゃないかと云うようなことが考えられます。

11.大門口。ここに実は鎌倉頃の古い寺がありまして、観修院というのですけれども、その門があったところではないかと云うようなことを、地元では云っております。大門口というのは、浜田亀峰「川内郷土誌」にも泰平寺の側に大門口という地名のあることがあげてあり、泰平寺の門があったところという解釈をしております。

12・13の土器手（ドッデ）。この地名も実は多くて、一般に神社で使う土器を作っていたんじゃないかというような解釈もあります。23に大田（ウタ）というのがありますが、これは土器手の隣の地番にあたります。ここでは私の小さい頃まで、瓦の粘土を取っておりました。そういうような焼物の材料の供給地を示す地名の可能性も考えられます。ただし、実際にそこから土器の破片が出て来るかとなると、私の記憶する限りでは、そういう場所ではないようです。

14の兎田（ウサッダ）という地名については、解釈が分かれます。「入来町史」では「ウダ」。いわゆる「ムタ」という湿地を表わすことばとして解釈されていますが、兎田（メンダ）との関係、つまり新田開発奨励のための免田（メンデン）

の田圃ではなかったかという解釈も、あるいは成立つのではないかと思います。

15.針原。地元では「ハリワラ」とは云わなくて「ハイワラ」と云っています。これは、いわゆる開墾、墾原（ハリハラ）で、原っぱを開墾して田圃を作ったとの解釈が出来るんじゃないかと思います。

20.五代田。この五代という地名も実は奈良をはじめとして非常に多く見られます。一般には、川内で五代といえば五大院のことが頭に浮かびますのでそれとの関連が想像されますけれども、実際にそれを証明するものがありません。

22.島畑（シマバタ）は、それこそ読んで字の如き地名でありまして、川と道路に囲まれた三角地帯です。道路よりちょっと高くなっておりまして、島のような状態になっております。ちょっと話は飛びますが、「男はつらいよ」という映画があります。あの舞台となっております「柴又」も、江戸時代の古文書には「島股」というふうにして出て来るようです。それから「武烈紀」では、柴垣を之蘆柯枳と訓ませています。だから、「シバ」と「シマ」は、この辺で共通性があるかも知れません。まあ、しかし、地形としては、要するに島のような状態の畑ということで良いんじゃないかと思います。

それから、大田（ウタ）ですが、これには願望地名というようなものがあるかとも思います。つまり、小さな田圃であっても、沢山稔るように、豊かな田であるように、大田というような名を付けた。ちょうど自分の子供に希望的な名前をどなたも付けられるように、実際の場所は小さいんですけれども大田というような願望地名を付したんじゃないかというような気もします。一方また、先程ちょっと触れましたが、羽田や羽根田といった地名が各地にあります。羽というのは「ウ」とも読めますから、もともとは羽田であったが「ウタ」と読まれ、もともとは埴田（はにた）であったものが羽田と書かれ、それから大田（ウタ）となったんじゃないかなというようなことも考えられます。ちょっと、こじつけでしょうか。そういうような可能性もあるんじゃないかというふうに考えております。ここは良い粘土がとれるところです。

58.馬場。馬場というのは各地に多いのですが、いわゆる馬場の解釈で良いのではないかと思います。それから、ひとつひとつ説明して行く時間がありませんので飛ばします。

62.大園（オオゾン）というのがあります。これは入来文書に出て来る地名で、「身曳状」という、ちょっと恐ろしいような内容のものにその地名が出て来たもんですから、そこに史料を出したんですが、ある時代の史実を伝える地名、貴重なと云いますか、珍しい史料じゃないかと思います。楠元の大園というのは原っぱですけれども、今でも小字として残っております。

63.堂迫（ドンサコ）。一般的には「ドウサコ」ですけれども、例えば鹿児島の川上にも、土地と書いて「ドンジ」、あるいは「ドンサコヒラ」というように、「ドン」というような呼び方をしているところがあるようです。

64.野空（ノガラ）。その場所というのは、実は四町ぐらいの田圃でありまして、すべて天水でまかなうのです。地元でこれを「ノガラ」と聞いた時に、「ノゴラ」「ノガラ」と反芻しました。シラスの崖があって、下の方から水が湧き出て来ます。それが四町ぐらいの田圃をうるおすもんですから、それぐらい水が多いということで、野川原（のがわら）じゃないかなというような解釈をしてみたんですが、いかがでしょうか。それが市役所のコンピューターには、「ノゾラ」で入っております。

67.前山を「メヤマ」というのは、前床を「メトコ」というのと、一緒です。文字どおりの解釈で良いのではないかと思います。

73.馬立。三国名勝図会三十七巻加治木郷に、万齢山椿窓寺の記事があります。その中に、「馬立場、当寺本門の前にあり、松齢公（島津義弘）当寺へ御光臨の時、御馬繋ぎ置く所なりといひ伝ふ、其遺跡横二間三尺、竪三間三尺、今圃（ハタケ）となる」というようなことが書いてあります。馬立というのは各地に多く、例えば清辺とか、また県外にも非常に多い地名です。58に馬場、59に馬場口がありますが、これと並んでそういうような場所ではなかったかと、思われます。馬

立は、川内市ではじめて旧石器時代の遺物が出たところとして知られておりますので、ご存知の方もいらっしゃると思います。

それから、31四反田も、普通ですと「ヨンタンダ」と云いそうですが、これは「シタンダ」と云っているようです。5へ6人あたって来ましたが、皆、「シタンダ」「シタンダ」と云っているようです。

33の梅木。これは先程説明しましたように、多分「ウメキ」で、梅丸というのは誤記になるんじゃないかと思います。明治初年の地誌である「鹿児島県地誌」の中に楠元村の字をあげておりますが、あれには「梅木」と書いてあります。ですから、誤読されたのはそれ以後になります。地元では梅木をそのまま継いで、「ウメッ」と云っています。梅丸とは云いません。

35の中渡（ナカワタシ）。中渡というのは、実は川があるんですが、渡し場を必要とするような川ではありません。これは、まあ、いわゆる付会語です。「楠本ひさく口」という地名が古い時代に出て来ますが、その時に楠元の領地を中村の方に渡しておりますけれども、その中渡しではないかと考えてみました。ちょっとうがっているんですけれども。場所的にはちょっと離れておりますから、どうかなとは思いますが、中渡というのはいわゆる渡船場ではなく、そういった渡しではなかったかというように考えております。ちなみに、川内市山田に「入来渡」という地名がありまして、それも恐はり入来院に譲ったような解釈がなされております。それと同じような解釈をしてみました。

37は六郎と台帳ではなっておりますけれども、土地の人々は「ドクロ」と云っています。

39の水洗（ミザレ）。小字の方は水流となっていると思いますが、これは多分間違いで、実際は水洗です。洪水の時に、まあ、水に洗われるようなところです。ですから、水流となっていると思いますけれども、小字の方は訂正しておいて下さい。39は水洗です。

それから、桂田（カツラダ）と桂山（カヅラヤマ）。47番と48番。これも登記

上と実際は入れ換って登記されているようです。その地目を見ましても、桂田に田がなくて、桂山に田圃があります。桂田は田でなくて、地目は山になっています。ですから、これは登記上のミスだと思います。それと、この桂山を地元では「カヅラヤマ」と呼んでおります。私などもそれを聞いて「カヅラ」が多いところだろうなと、つい最近まで思っていたんですが、実際見てみますと、「桂」の字を書いてあります。これについては、奈良県に葛城というところがあり、蘇我氏の本拠のあったところとして、よく御存知だと思います。現在カツラギと呼んでおりますが、古い文献には「カヅラギ」とルビが振ってあり、やはりカツラとカヅラはよく転化といいますか、変ったりしているようです。例えば神武紀に、「また高尾張邑に土蜘蛛あり------皇軍葛網を結ひて掩襲ひ殺せり、因りてその邑を葛城とする」という地名説話がありますが、この場合もカヅラとルビが振ってあるようです。カヅラあるいはカツラについては和名抄などでも多く出て来ますが省略します。地元ではカツラではなくてカヅラとよんでいるということです。

76の上原（ウエンハイ）。これは入来院からこの地に移って来たとの記録があるようです。ですから、これは移動地名とも考えられます。

80の皆元（カイモト）。これは地元では「ケモト」と云っております。これも各地に多い地名です。鹿児島では人名の中に、この字で「ミナモト」と読む姓があったように記憶しておりますが、そのように水の元であるのか、村のカシラというような根源のミナモトであるのか、そのどちらであるか判りませんが、少くとも楠元の皆元という場合は、水元ではなくて、一番カシラという意味が地形的には合うようです。

82、宍川（シシガワ）。これも本来は宍川であるべきですが、市役所の台帳を見ますと、穴川と誤記されております。それから、83池尻（イケジリ）。これは字義通りだと思います。

84と85、宮下（ミヤンシタ）と宮上（ミヤンウエ）。この宮がなにを指すのかちょっと定かではありません。皆さん、ご存知の戸田観音、中村にある河童を祀

った観音ですが、あれが昔はここにあったのだというようなことを地元の人は伝えております。ですから、そういう宮であった可能性も充分考えられます。実はそういう話も今まで書いたものがなくて、今回の調査でそういう伝えがあることが判りました。

それから供養壇。供養壇については後で説明します。※印がありますが、これは文献があるということです。六の文献は小字、七の文献は俗地名ということで書いておりますので、それによって下さい。個々の説明は申しません。

次に、俗地名の説明をちょっといたします。最近地名研究が非常にさかんになりましたが、今までは地名の基本単位というのは大字だったわけです。小字を集めたものがなかったもんですから、大字単位の地名研究もやむを得なかったわけです。ところが、角川が地名辞典を出しまして小字を収録しましたので、最近、小字単位ということが云われております。しかし、それよりも、もっと大事なものが俗地名ではないかと考えるわけです。小字というのは、まあ、市役所に行けば、仮にそれが間違っているにしても、一つの形としてありますけれども、俗地名というのはあくまでも土地の人が云い伝えているわけですから、そういう人達が死んでしまえば永久に記録されない性質のものです。一例を申しますと、川内市に中郷というところがあります。中郷にサイク（細工）ではなくて、田所（タドコロ）という地名があります。これも今回の調査で、ここに見えています冨永先生が見つけてくださったんです。田所という地名は、要するに平安以前の地名であるわけです。ところが、古文書にも、字絵図の中にも、この田所という地名は出て来ません。川内は国分寺が置かれたぐらいの土地ですから、そういう地名があること自体、不思議ではないんですけれども、古文書にも出て来ないが、地元では伝えているということは非常に重要なことではないかと思います。

それでは、その地図をご覧ください。それは1万分の1の地図で、番号を打っておきました。先程のように説明申しあげます。

①とせんが岡は、先程説明しましたように、登瀬なのか、渡船なのか、ちょっ

と判りませんが、そういうような岡のところを云います。

針原の横穴（ハイワラのヨコアナ）。これは⑨になりますが、ここには洞窟があります。そう大きな洞窟ではありませんが。現在、五十～六十ぐらいの人達が青年団の頃、浜田亀峰先生を呼んで、楠元の郷土史を作ろうということで、いろいろ調査されたそうです。その時の資料を実は探しておったのですが、まだ本にならず、原稿のまま図書館に眠っておりました。それには、まだ住居を持たなかった頃の穴ではなかろうかというような解釈がしてあります。穴そのものはそう大きなものではありません。それが針原の横穴です。

⑫南蔵山（ナンゾヤマ）とか⑬南蔵ヶ平（ナンゾガヒラ）というのは、これは「川内地方を中心とせる郷土史と伝説」という旧川内中学校が生徒たちを使って集めたものがありますが、その本の中に出て来ますけれども、要するに南蔵という男がここで飛び込み自殺をしたために、それ以来、ここを南蔵山とか南蔵ヶ平というようになった、わりと新しい地名です。

⑭の溝田。これは溝口のことを、俗に溝田ともいうということです。

⑮と⑯の「なつ山」。ここは那智権現があります。那智権現については「樋脇町郷土史」「樋脇村史」に書いてあります。

⑱の「とっこ段」。これも各地に多く、「徳光」と書く地名があちこちにあります。それとの関連はどうか判りませんが、楠元の場合、トッコどん（フクロウ）が鳴く場所が決まっとるんだと。だから、トッコどんが鳴いてある場所をトッコ段と云うんだと云っております。

⑲の竹山（タケヤマ）。これも現在、字の中では出ておりませんが、地元で竹山と呼ぶ一帯があります。この竹山については、あまり古くはないのですが、江戸時代末期の検地帳に「渕上門のうち竹山、山畑」と出て来ます。

⑳の坂口段も、字坂之上のことを、別名「坂口」あるいは「坂口段」と云っているようです。それについては、下に史料を書いておきました。「入」と書いてあるのは、入来文書のことです。前の方に史料をあげてありますが、入来文書に

「楠元内坂口在家田島之事」という文書が残っております。

㉑こずん坂。これは字小園にある坂だからということなんですけれども、「こぞのざか」でなくて、「こずん坂」と地元では云っております。

㉒とんぎゅ。先程説明しました馬立の岡を、俗に「とんぎゅ」と云います。事実は定かではありませんけども、地元では闘牛の場所だと伝えております。それと、ここの岡とその回りとは1メートルばかりの段差があって、馬の放牧・牛の放牧をした場所ではなかろうかというようなことも云われております。

㉑と㉒は三光寺（サンコウジ）。豊臣秀吉が一泊したような伝承もありますが、廃仏毀釈であとかたもありません。三光寺というお寺があったので、その辺を三光寺と云っております。㉓について、それには「さしこん茶屋」とありますけども、地元では「さんこん茶屋」と呼んでいます。今はもうないんですけど、そこに小さな茶屋があったことによっていると思います。

㉔江川坂（エゴンサカ）。この「えご」というのも非常に多い地名で、例えば「えご」「えごの山」「谷えご」「えごん迫」というのが加世田の津貫にあります。それから、姶良の東餅田、国分の向花にも「えご」というところがあります。川内で云いますと、新田神社の下を流れている小さな川があります。忍穂井川といいますが、別名銀杏木川とも云うようです。千間溝ですか、そういうような名前もあるようですが、この川のことを地元宮内の人たちは「えご川」と呼んでおります。そこで、「えご」とはなにかとなると、一部では樓との関連で考える説もあるようですけれども、一般にはやはり水の流れ込んだ所、川がえぐった所ですね、そう云った所を「えご」と云っているようです。これは全国に分布しているようです。そして、多くの地名研究者たちも一応そういう解釈をしているようです。実際にこれは、川の本流をよけてですね、人工で掘ったような、ちょうど三日月湖が残ったような形で、川が曲流しています。小さな頃は、川内川の本流では水泳が出来ず、その水溜りでしたことを憶えております。そこの坂であるから、「えごん坂」と云っております。

㉔中河原（ナカゴラ）といえば、中川原ですね、川の中に出来た島。

㉗老人様と書いてありますが、これは「人」ではなくて、「神」です。「老神様」ですね。「ヨカンドン」と地元では云っております。いわゆる「作神」を祀ってありまして、春先にあちこちで「かぎひき」とか牛祭りですか、「太郎太郎」「次郎次郎」、串木野にもそのような祭がありますが、その祭を行なう神社です。

㉘玉田（タマダ）というのは美称地名で、この付近は明治年間に耕地整理が行なわれており、その時以来、玉田と云うようになったものです。玉田というのは、手柄を立ててその土地をもらった場合の「賜う田」というような解釈もされておりますが、ここの場合はそこまで考える必要はないんじゃないかと思います。

㉚内城段（ウチジョウダン）・㉛内城渕（ウチジョウフチ）。この内城というのは、いわゆる楠元城があったところといわれ、ちょっと高い所になっています。字は「宝岩（タカライワ）」となっています。宝岩もあんまり聞かない地名で、なにかいわれがあるんじゃないかと思っています。そこの段を内城段、それから、そこは川内川に面しているんですが、そこを内城渕と呼んでいます。

㉜請ン河路（ウケンコッ）。河路というのは要するに川に降りる、渡し場に通じる、あの小さな道を河路と云ってるようですけれども、この付近に「請（ウケ）」という小字があるもんですから、「請ン河路」というような云い方になってるんじゃないかと思います。

㉝森どん（モイドン）。字は森山（モリヤマ）になりますが、今はもうないんですけども、荒神様がありました。こんもりとした森があって、荒神様が祀ってあって、今でも「あすこん神さあは、とにかく恐ろしか神様やっで、さわいも出来んかった」というようなことを土地の人から聞くことが出来ますが、そのものは現在ありません。

俗地名については、以上のようなことが主なところです。まだ沢山あるんですけど、時間がありませんので、端折ります。

次に、八に示したその他の地名。これは、俗地名でも土地の人に聞いても判ら

ないが、あるいは字絵図にもないけれども、古文書の中に出て来る地名をまとめておきました。

渕脇。丁度、戸田観音がある付近のことを云ってるのではないかと思います。

「くすもとひさくくち」。これは1250年の文書で、これが楠元の初見になります。藤井先生は、この「ひさくくち」は「宮ノ下」あるいは「池尻」のところではないか、あの付近の田圃ではないかとしておられます。

「くす本、三反」。これは新田神社文書(一)に出て来ます。「火田分五反、くすもと」というのも、同様です。

「くすもとてらさこ」。この「てらさこ」というのは、現在の行政区画で云うと、中村町に入ります。渕脇も含めて考えますと、どうも古い時代は、戸田も楠元のうちに入っていたんじゃないかと想像されます。中村ではなくて、昔は楠元じゃなかったんではないかと思います。ちなみに、その寺迫の寺のことですけども、名勝図会の中に、持法院渕上平徳寺十一面観音というふうなことを書いた鰐口が現在も残っています。1406年銘。

「くすもとくわはた」というのも出て来ますが、これは現在のどこか判りません。同じように「一せまち」「堂のまエ」「くほた」「くすもとのつくだ」。これらも現在のどの辺にあたるのか判りません。「つくだ」というのは、要するに、新田開発じゃないかと思うんですが、場所は特定出来ません。

「あかさか門二丁二反」というのが、入来文書に出て来ます。

「なへの門」。入来文書を見てみますと、どうも羽島の方にその本拠地があるようです。これはカットして下さい。楠元に鍋倉神社というものがありまして、その関係でここにあげたんですけども、どうも別のようです。

「下村十郎」というのは、楠元を賜わった人の名前です。

「うけの門」というのも、これは小字ではありませんが、先程申しました「請ン河路」あたりを云っているもので、つい最近までそういう小字があったようです。

これは人名ですが、「三光之内長蔵」というのが『石塔編』に出て来ます。それから、竹山(タケヤマ)・井手山(イデヤマ)。井手山というのは、楠元に、実際に、井手山はないのですけれど、井手元とか井手上という字がありますからその付近じゃないかと想像されますが、誰に聞いても、ちょっと判りません。

次の「くすもと一町内浮免五反」というのも、新田神社文書に出て来ます。これは私の誤植で、実は「くさもと」が本当です。この「くさもと」も別に出て来ますので、これも済みませんが、カットして下さい。

それから、「樋脇村史」の中に、それぞれ神社を取り上げてありますが、その場所のその字地として、犬馬場・東の門・東阪・外城・内城・那智山・宿田というのが出て来ます。東の門とか東阪とか宿田というのは、もうどの辺か判りません。土地の人に聞いても判りません。

時間がありませんけれども、簡単に、九、地名考。私たちの知った地名調査は、あくまでも「よみ」とか「由来」とか「場所」がどの辺になるのかというのが目的で、その語源までは知らなかったのですけども、ちょっと二・三とりあげてみたいと思います。

「一条」という地名があります。これは先程も申しあげましたように、川内にはもう一個所あります。一条神社というのがありますが、地元ではなぜか「イッジュドン」と云います。楠元の一条の場合も、「イッジュウ」と云っております。また、ちょうど楠元の一条の川向いに、東郷町の上一重・下重という地名があります。角川地名大辞典で見ますと、重水・隼人など県内で10例あるようです。話は飛びますが、徳島県祖谷に木曳唄で有名な非常に険しい山があって、そこに、一宇村(イッチュウムラ)というのがあります。私は、どうも、これはやはり、なにか関係があるんじゃないかと思います。それと、古文書の中に、一軒ということで一宇とか五宇というようなことが書いてありますので、あるいはそういった一軒というような見すぼらしい所で、名主の家が一軒しかなかったので、一軒家の意味の「一宇」と付けられたのではないかと考えたこともありますが、実際

はどうなんでしょうか。大変気になる地名ですが、藤井先生の「郡境の基点」説をくつがえすだけの手持ちの材料はありません。

次に大人足形について、植脇村史に次のようなことが書いてあります。「諏訪神社西南約500メートルぐらいにあり、巨人が下東郷村西川内よりまたがった足跡であると云われている。その足跡は普通より六尺ぐらい凹み、足の形をしている。それと同じ足跡が、下東郷村西川内にあるといわれている」。まあ要するに凹地、それがあります。そして、人によっていろいろ云われますが、実はもう一方の足跡が中村の中山とかいうところにあるというような人もいるようです。各地に多い地名です。私は自説を持ちませんので、『郷村地名考』という熊本の本ですけども、ちょっと読んでみます。古い時代に、川内には熊本の人たちが沢山入っていますので、熊本もどうも気になるもんですから、そういう文献を集めております。それには、大人足形（オシトガン）というふうに書いてあります。「大人足形。柳道の上方、上ン原。（上ン原というのは楠元もそれがある場所を"ウエンハイ"と俗に云います。これは全くの偶然でしょうけれども）。上ン原の凹所に、大人足形と書いて、通称"オシトガシ"と呼んでいる所がある。谷の頭に降った雨水が集まって、ここに吸い込まれる。凹地の中央部に二ケ所の深い穴がある。"ウシトガン"という人もあるが、"オシトガシ"が本当のようである。この穴は岩盤上を流れる伏流水に通ずるもので、地盤の陥落によって出来たものであろう。昔、罪人の処刑場であったらしく、首をはね、この穴にころがしていたので、はじめヒトコロガン・オヒトコロガシと云っていたのが、いつの間にか"オシトガシ"と云うようになったと思う。ある人は大人（ウーヒト）どんの足跡とも云っている」というような解釈をしています。それからもうひとつ。大分県に舞鶴高校というのがあります。昔、地名研究が盛んで、何回かその方面の賞をとっております。その研究が『地名覚書』の表題で出版されておりますが、その中に書いてありますので、ちょっと読んでみます。之一、弥五郎と関係づけております。「これは後に、弥五郎という人の屋敷か庄地であったように考えられますが、そうではないでしょう。巨人伝説の主人公、弥五郎と考えるのが適当でしょう。それから、この字と同様、弥五郎や大人（ウヒト）という字は、大人足形あるいは弥五郎足形と呼ばれていたが、長すぎるので足形が消略されたものと想像します。そして、弥五郎・大人・大人足形という土地には、昔、大人足形と称する凹地にして、その形・広狭・足跡・五指とも存してとありますように、大人足形とよばれるや足長に近い凹地であるでしょう。巨人伝説は全国的に広く分布していますが、その源は巨人が国を拓いたという伝説にあるようです。関東地方では、この巨人は大太郎法師とよばれています。そして、大和朝廷の天皇の称号であった大足（オオタラシ）に起源をもつものだと考えられています」というような解釈がされています。そういう全国にある地名が、そういう伝承が、楠元にも今もまだ残っているということです。

次に涼松（スズミマツ）ですが、これは大概、山の上といいますか、谷のところにどこも共通してあるようです。この「涼（スズ）」というのは、いわゆる水の出る所を意味しているような解釈がなされており、楠元の場合もそれに合致するようです。これは誤記の例ですけども、一番後に淳松。これはなんと読むのか知りませんが、角川地名大辞典を調べていましたら、こういう字がありました。これは、多分、涼松の誤記だろうと思います。

次に、供養壇（クヨウダン）。供養壇というのは、楠元では入来院との境界争いから、昔はよく戦争があって、その犠牲者を弔った場所だと云われております。その一番最後に※印がしてありますが、最近出ました「東木野郷土誌」には供養坂（クエサカ）とルビが打ってあります。そういう「崩れる地」じゃないかな、そういう場所があるんじゃないかな、ということを考えています。楠元の場合は、今のところは、やはり、いわゆる「供養」と考えた方が良さそうに思います。私がなぜ「崩れ」と関係があると見ているかを云うと、例えばそこに土曜・日曜の「曜」を使った地名を書きましたけれども、もし供養というのであれば、その意味というのは百姓といえども知っているわけですから、こういう字をわざわざ使

うはずがないんじゃないかと、思うからです。こういう字を使うようになった背景には、その本来の意味が忘れられてしまったことがあると思うのです。古戦場のその弔い場であれば、そういうことはなかなか忘れられるものではありません。後世永く「供養」の字を使うと思うのですが、「九曜」などの表記例を見まして、別の方に解釈を求めるべきではないかと考えたわけです。

以上、非常に通り一遍で、判りにくい説明になりましたけれども、何分にも、人の前で話すようなことはこれまでありませんでしたし、これからもないような仕事をしておりますので、大変聞きにくかったと思いますが、ご容赦ください。以上で、終りです。

〔質疑応答〕

肥後　今の発表に対して質問がありましたら、お願いします。

平田　はい、教えて下さい。3枚目の俗地名ですけどね。②ひっきい神様。「ひっきい」とは、なんですか。

江ノ口　「火おこし（火吹竹）」を切ったりしますから、風邪の神様ではないでしょうか。本田先生、「ひっきい神様」とはなんですか。

木場　百日咳ではないでしょうか。

平田　なに？

江ノ口　百日咳だそうです。

平田　百日咳の神様。その次、㉚おっんが段というのはなんですか。

江ノ口　今はこういう地名を調べても判らないと思いますが、楠元の場合、いろいろ参考書がありまして、これにはこう書いてあります。上床山の別名と。

平田　上床山の別名ですか。その次、㊲うとらん久保。

江ノ口　うとらんは、判りませんでした。

平田　では次の㊳ついの段。

江ノ口　御釣場なんかと同類じゃないですか。

平田　釣の段。その次、㊴しぼら。

江ノ口　これも判らんですね。「しぼらんたいご」とは云いますが。川に、谷川（タイゴ）に関係があると思います。

平田　その次、㊵ゆげん坂。弓削の坂？

江ノ口　これも判りません。亀沢君、ゆげん坂。ゆうげん坂ち云うけな。

亀沢　ゆうげん坂。

江ノ口　「ゆげ」じゃなくて、「ゆうげん坂」。判らんですよね。

平田　はい、どうも。

木場　㊵は、湯が出るんですか。温泉場。

江ノ口　冷泉ですね。郷土史に書いてあります。

木場　冷泉ね。

江ノ口　はい。井戸を掘っても、硫黄分が出るってことが書いてあります。えーと、さっきの「おっんが段」ですが、「大罪段」と書いてあります。上床山の別称。昔、罪人の処刑場として使用され、幾多の死刑囚がこの山の刑場の露と消えて行ったと伝えられている。

江平　今のは何番？

平田　㉚番。

江ノ口　ですから、供養塚という地名もそこから出たのではないかと考えるわけです。実は川内市の郷土史研究会が「千台」という機関誌を出しております。千台12号は、地名特集にしてあります。13号に今日話したことを書きますので、もしよろしければ買って下さい。なに分にも限られた時間ですし、ちょっとしゃべりも下手ですので、ご免なさい。なにもなければ、これで終ります。

肥後　どうもありがとうございました。

Ⅳ　小字紹介　『国分市府中の小字』――平田信芳

これは、20年前、手がきで描いた地図のコピーです。1万分の1ですが、そうは狂っていないと思います。今じゃ眼が悪くなりまして、こんな地図は書けません。昭和37年、川内で国府とか国分寺を知りました時に、大隅国府も対比しよう

と思って調べたものですが、20年間放ったらかしたままでした。

右上の方から行きますが、一番右上の方に、上田木。「カミタノキ」と読むのか「ウエタノキ」と読むのか、現地を廻ってみても知った人は居りませんでした。まだ判りません。それから、川跡（カワアト）。その次、平田（ヒラタ）と読むべきでしょうが、そこには奈良田団地と呼ばれる住宅が建っております。その近くに奈良田（ナラダ）という小字が新町（しんまち）の方にあるようですので、奈良田と平田がごっちゃになっているのかも知れません。次が中ノ丸（ナカノマル）。上川跡（カミカワアト）。国分駅のすぐ北側が鼻面（ハナヅラ）。上川跡・下川跡（シモカワアト）というのは、昔、手篭川（てごがわ）というのが流れていた川筋を示すものと思うのですが、昔は鼻面川（はなづらがわ）とも云っておりました。上川跡・下川跡の東側に学校がありますが、これが国分実業高校で、その背後の山を鼻面山（はなづらやま）と云います。

鼻面から入りまして、月ノ木（ツキノキ）。月ノ木のすぐ南側、国分駅のすぐ北側になりますが、馬草田（マグサダ）というのがあります。馬草田という地名は、旧記雑録の嘉吉元年（1441）のもので、「国府まくさたの島五反」という史料があります。これは、15世紀にこの辺が「国府」の所在地であったことを示す重要な地名の一つになるものです。その北側は内古川（ウチフルカワ）。国分寺のすぐ西北の方が土器川原（ドキガワラ）。土器川原の南、その小字図では一番南の方に突き出しているものが天神坊（テンジンボウ）。その西が松元水流（マツモトヅル）・鶴川原（ツルノカワラ）。その次、上川原（カミカワバイ；カミカワバル）。鶴川原の北に塚脇（ツカワキ）。ちょうど、墓地があります。上川原の西隣に東皆渕（ヒガシカイブチ）。最近、確認のために、この辺の古老、八十歳以上の人を尋ねたんですが、もう皆渕という地名を知っている人は居ませんでした。20年前に聞いていたので、良かったと思います。皆渕のすぐ南隣に「カイ迫（カイサコ）」があります。この「カイ」という地名の意味はなんだろうかと思うのですが、奈良・平安時代に公解稲（くがいとう）というものがありますので、そういうものの痕跡かなと思うのですが断定は出来ません。

それから、気色の森（けしきのもり）といわれる天神様のあるところ、そこが森ノ下（モリノシタ）。その西隣が大津川原（オオツガワラ）。その南が気色前（ケシキノマエ）、すなわち「気色の森」の前です。本来は東皆渕・気色ノ前あたりに「気色の森」はあったようです。

次に野口川原（ノグチガワラ）。これはパラフィン紙の地図では野口の方に入っているんですが、20年前、国分に調べに来ました時には府中の字絵図に入っていなかったのでそうしたのです。国分郷土誌などを見ますと、野口川原を府中に入れておりますので、野口川原を書いておきました。

今、西南ノ端の野口川原を説明していますが、その北、安蛇K流（アンジャヅル）・向安蛇K流（ムコウアンジャヅル）。パラフィン紙のものは地名が脱けておりますが、木屋ノ下（コヤンシタ）です。鉄道線路のところにあるのが丸池（マルイケ）。昔、ここに池があったのだろうと思います。この辺の豪族（郡司の税所氏）が、青葉の笛という台明寺の青葉の付いたままの竹を朝廷に献上する時に、まずこの辺の池に漬けてからおれいをし、それから持って行ったと云うんですが、この丸池がその池ではないかとみられます。丸池の東隣が横手原（ヨコテジリ）。その北側が中須（ナカス）。現在の天降川（あもりがわ）と手篭川の合流点に上大津（カミオオツ）と大津があります。大津というのは、国府の外港という性格の地名を考えて下さい。

手篭川というのは、川の流れを変えたと思われるのですが、北側の姫城（ひめぎ）の方に、札立という小字があります。それから、西古川（ニシフルカワ）・千束橋（センゾクバシ）・菅ノ里（スガノサト）。府中の真中に、鶴ノ里（ツルノサト）・石園（イシゾノ）・鶴ノ羽（ツルノハ）・鶴ノ前（ツルノマエ）。それから、亀ノ里（カメノサト）・亀ノ甲（カメノコウ）。亀ノ甲に被戸神社すなわち守公神社があります。郡田（くりた）にも亀ノ甲という地名がありますが、全国の国府所在地を調べますと、長門国府が亀ノ甲というところにあります。

次は八反畑（ハッタンバタケ）。市役所の字絵図は八反田となっておりますが、土地の人は「ハッタンバッケ」と云いますから、八反畑が正しいと思います。それから大坪（オオツボ）・下川跡。この他、新町に飛地として六つ小字があります。

われわれは、府中というとらえ方をするんですが、土地の人たちは違うんです。この辺を府中と云わずに、向花（ムケ）と云っていますから、本来は向花という大字だったと思うのです。府中というのは、土地の人たちにとっては、新しい大字という感覚のようです。

なお、亀ノ甲というところが、大隅国府の中心だろうと思います。亀ノ甲から蕾ノ里、八反畑、この一帯には布目瓦が落ちています。石園・鶴ノ羽・鶴ノ前も布目瓦が散布しているところです。大隅国府を探すためには、この地域の調査が望まれるわけですが、この地域は相当削られていて、どの程度大隅国府跡が把えられるのか、期待はするものの、難しいものを持っているなと感じているところです。1万分の1の地図に、こういった小字を確実に落しておくことは、地名研究では大切なことですので、そのサンプルの意味で、大隅国府跡所在地の小字紹介をした次第です。この中で、歴史的なものを探ることが出来るものは、気色の森・亀ノ甲・馬草田。気色の森は日本最南端の歌枕。文献上は馬草田だけですが、亀ノ甲・鶴ノ里・石園一帯は、まだ発掘調査の可能性が残っています。

〔質疑応答〕

肥後　質問はありませんか。

江ノ口　亀と鶴の話ですけども、これは亀が先で、鶴はそれに関して付けられた名前と考えて良いんでしょうか。

平田　それは判りませんが、どちらにしても、まあ、お目出度い名前でしょうからね。

江ノ口　土器川原はやはり田圃になるんですか。

平田　田圃になっています。こっちの方（パラフィンの地図）を見ますとね、

土器川原というのは、まだ南へ続くのです。上川跡・下川跡、その次、流合（ナガレアイ）と書いてありますね。これについては聞いて廻ったんですが、やはり「ナガレアイ」と読むようです。私が川内高校で教えていた時、生徒にこの名前をもつ子が居たのですが、「ハギエ」という姓でした。国分では「ナガレアイ」と呼んでいるようです。流合のすぐ下の方にですね、これは向花と野口にあることになりますが、「江ゴ」・「江後」というのが二つ重っています。先程、「えご」の話が出て来ましたが、ここもやはり、昔の川の痕だと思うのです。本来、手篭川が東側を流れ、もう一つ（天降川）は西から南側を流れて、府中は川の間に挟まれていたと思われるわけです。その二つの川の合流点が「流合」。「えご」というのは、4月頃、国分に「エゴ漁」というものがあると、写真入りで新聞に出たんですが、肥後先生、ご存知ないですか。川の中に特別な水路を作ってその上に橋をかけ、魚をその水路に導いて待ちかまえてとる特別な漁らしいです。それを「エゴ漁」と云っている写真が、今年4月（27日）、南日本新聞に掲載されました。脇元さん、知らんな。「エゴ」というのは、そういう「エゴ漁」をやっていた場所、そういうようなエゴでやる漁。エゴというのは、えぐったような所、特別な一つの流れを、エゴと云ったんじゃないでしょうか。そういう地名が考えられます。（後記。江児？餌篭？あるいは江川の転化か。広辞苑には、①谷などの水の流れ込んだ所。山の凹地。えぎ。いご。②川の入江。③海水の上って来る川、としてある。）

木場　「えご」というのは、仮名で書いてあるのと、「江後」と書いてあるのが、ありますよね。

平田　同じだと思います。「江ゴ」は大字向花、「江後」は大字野口に入ります。

木場　あぁ、なるほどね。

江ノ口　双児地名じゃないかな。

平田　分けたんでしょうね。

木場　先程の亀ノ甲、鶴ノ里。この地が大隅国府のあったところと考えられるんですか。

平田　そうです。

木場　まだ発掘は終っていないのですか。

平田　全然やっておりません。

木場　台地ですか。

平田　そうです。

原口　関係のないことですが、「めがね橋」と地図に出ているのは、どんな橋なんですか。

平田　現在は眼鏡橋じゃないと思いますが。肥後先生、昔は？

肥後　いわゆる眼鏡橋です。鹿児島のものと同じ頃に出来たんじゃないですかね。

平田　現在も眼鏡になっていますかね。

肥後　現在は改造してあります。（板書しながら）、昔はこのように眼鏡橋があって、その上を水路が流れていました。松永水田からの水路が。

平田　ははあ。（国衙ニ引水口という史料を想起して）

肥後　漏水がひどくて解体したんです。石造の眼鏡橋でした。

平田　現在も眼鏡になっていますか。

肥後　さあー。

江ノ口　鹿児島県には眼鏡橋がどっさいあったんだな。

原口　この眼鏡橋は、いつ頃まであったのですか。

肥後　エーと、これは比較的新しいですよ。作り変えたのは。眼鏡橋でなくなったのは。現在、一つか、眼鏡かは、ちょっと記憶していませんが。

木場　これは、人が渡るのではなしに、水路だけですか。

肥後　人も渡ります。

木場　兼用ですか。

肥後　（板書しながら）、上から見るとですね、橋の中央を水路が流れ、両脇に通路がありました。

木場　いわゆる通潤橋みたいなものですか。

肥後　なんですか？

木場　矢部の通潤橋のような？

肥後　ええ、そうですね。あれみたい。

木場　向うに押しあげるんじゃないですか？

肥後　いいえ、いわゆる水路です。では、時間も来たようですので、今日はこの辺で。

会報第5号の訂正

36ページ、4行目。それだけという名の……と、副田家という名の……に訂正して下さい。

各自の発言その他で、今までの会報すべてについて、誤りにお気づきでしたら、紙片にメモして、提出して下さい。

〔鶴丸城の語源〕

1. 慶長6(1601)年着工、慶長11(1606)年城の前の橋完成。
南北朝以来の山城で旧称「上山城」
鹿児島城 —— 御城・御内と称し、鶴丸城は江戸中期以後の美称?(鹿児島大百科)
鹿児島坂本村にあり、即府治なり、山に拠りて城とす、其山は鶴丸山といふ、此山の形、舞鶴に似たり、故に名を得たりとぞ(三国名勝図会)

2. 谷 有二「日本山岳伝承の謎」彩社.
丸(マル) { 形容 —— 城郭(本丸・二之丸)・山名(松洞丸)・集落(田主丸)
接尾 —— 地名(興安丸)・人名(牛若丸)・器物(雲切丸)
マルは山を意味する朝鮮語に他ならない ------ 金沢庄三郎「日鮮同祖論」

3. 山中襄太「地名語源辞典」
〜丸。ほぼマルく一郭をなした地形に名付けられた地名か。
楠原・清水編「地名用語語源辞典」
① 円形・球形を示す。山名、川の曲流部、山裾の湾曲部、円形の田や山間の小平地など。なお丸山はとくに円墳に名づけられている場合が多い。
② 中近世の城郭の部分をなす用語. ③〜バル(原=曠)の転. 北九州に多い〜丸の形の地名など. ④〜バル(張)の転か。全国的に立陵・台地の先端、張り出した所に見られる ⑤動詞マルグ(転)、マルゲル(転)などから崩壊地こり、斜面、堤防など「崩壊地形・浸食地形」を示すものであるか。山名語尾のマルもこの意か. ⑥ナル(均・生・鳴など)の転か. ⑦モリ(森・盛)などの転か。〜丸の形で山名の語尾につく。

4. 〜丸. 主として人名語尾。平安時代以降の開墾地名。
① 長幼順位名 ------ 太郎丸・次郎丸・三郎丸・四郎丸・六郎丸・九郎丸・十郎丸
② 数詞型 ------- 市丸・次丸(つぐ)・又丸・乙丸・乙王丸・三っ丸・八丸・外丸・塔丸・筒丸・千丸・千野丸
③ 大小型 ----- 大丸(おおまる・だいまる)・中丸・大小丸(おおこまる)・小丸(こまる おまる)
④ 神仏型 ----- 大王丸・天神丸・仁王丸・不動丸・神丸・神戸丸・童子丸・薬師丸・宮丸・宮王丸・比沙丸・弟子丸・力丸・盆丸・伊勢丸・鬼丸
⑤ 寿型(佳名) ----- 王丸・吉王丸・吉丸・吉野丸・秋丸(明丸)・裳裳丸(今朝丸)・今丸・京丸・千代丸・土与丸・安丸・益丸・福丸・徳丸・高丸・永之丸
⑥ 金石名 ------ 金丸・小金丸・岩丸・石丸・土丸
⑦ 動物名 ----- (十二支型) 根丸・牛丸・虎丸・辰丸・猿丸・鳥丸・犬丸・猪丸。小犬丸。鶴丸・雁丸。
⑧ 植物名 ------ 米丸・麦丸・桑丸・菫丸・笹丸(酒丸)・松丸
⑨ 色彩名 ------- 赤丸・黒丸・白丸
⑩ 水田名 ------ 田丸・田主丸・水田丸・野田丸・藤田丸・和田丸・貧田丸(ひんでん)
⑪ 地形名 ------ 沢丸・沼丸・津丸・瀬丸
⑫ 天文気象名 ------- 日丸・星丸(法師丸)・雨丸・雪丸・節丸・湧丸・場稲丸
⑬ 器物名 ------ 橋丸・笠丸
⑭ 城郭名 ------ 本丸・二ノ丸・出丸
⑮ その他 ------ 名丸・目丸, 武丸・文丸・歌丸・才丸・政丸・新丸・持丸・輿ノ丸・平丸・手古丸・軸丸・美濃保丸・喰丸・丈ケ丸・丸

5. 丸〜. 主として形状地名
① 自然地形 ------ 丸山・丸岡・丸岳・丸峰・丸岩・丸島・丸石・丸加山・丸倉山・古丸ケ山, 赤丸岬・丸江・丸潟・丸瀬・丸沢・丸沼・丸刺・丸谷・丸江川、丸野・丸原。
② 形状名 -------- 丸尾・丸尾原・丸尾山・丸尾崎・丸小野、丸味・丸亀
③ 植物名 ------ 丸木・丸柱・丸林・丸森・丸松・丸茂
④ 水田名 ------ 丸田・丸志田
⑤ 人為地名 ------ 丸名・丸目・丸買・丸蔵・丸栖・丸井・丸口・丸塚・丸内・人丸坪

⑥その他 ------- 丸子・丸押・丸サゲ・丸三・丸万・丸一決

丸尾 —— 名義は「田みをもった尾根」で、そのような立地集落の名となっている。「日本地名学」下。Fig. 187.

丸名 —— 昔、相模国(神奈川県)鎌倉あたりで十三石という語。

安齋随筆・二八「鎌倉辺りにて田地に一名と云ふは十三石也。是を丸名と云ふ。半分持ちたるをば半名といふ」(日本国語大辞典)

丸子 —— むかし丸子という部民があり、川岸に住んだので渡船の仕事をしたらしく、彼等の名によって丸子の地名が出たのではないか。丸子という地名は多く川沿いにあるという。(地名語源辞典)

6. 角田文衛「日本の女性名(上)」、教育社、P.203.

ただ注意されるのは、延喜天暦の時代に、庶民の男性名の語尾に用いられていた「丸」が貴族の男童の名の語尾に用いられ始めたことである。「丸」は言うまでもなく「麻呂」に由来しているが、少くとも平安時代中期には、第一人称主格の代名詞として用いられた。

7. 和名抄郷名

田丸 ------ 遠江国周智郡

満祿 ------ 安房国朝夷郡(吾妻鏡、丸御厨)

丸子 ------ 陸奥国安積郡、陸奥国宮城郡.

8. 大隅・薩摩の〜丸史料

①宮永社役支配状(保延元年;1135)

千与丸・釣丸・土与丸・福丸・宮与丸・宮王丸・安丸・安松丸

②建久図田帳(建久八年;1197)

地名 ------ 三郎丸・火同丸・弟子丸・千手丸・主丸

人名 ---- 藥師丸・熊同丸

③建治石築地役配符案(建治二年;1276)

地名 ------ 功徳丸・弟子丸名・米丸・用丸・末丸・法師丸・得丸

人名 ------ 横枝丸・神一丸

9. 鶴丸という地名と姓.

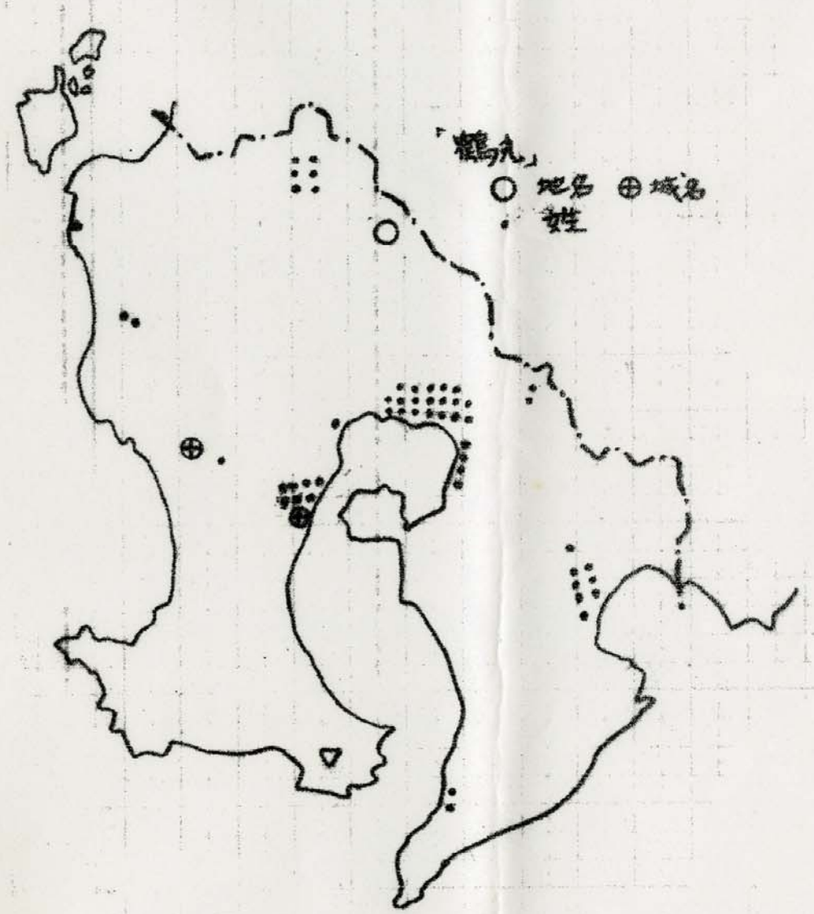
吉松町鶴丸 ------ 吉松郷地頭仮屋の所在地。

鶴丸姓 (S.48.7 鹿児島県電話帳による)

鹿児島(7)・川内(2)・阿久根(1)・大口(6)・国分(11)・西之表(1)

姶良(1)・隼人(8)・福山(4)・根占(2)・東串良(1)・有明(1)

大崎(6)・財部(2)・伊集院(1)。



楠元町の地名調査

昭和五十九年九月二日

江之口汎生

一、目的

地名は表意より表音で解釈すべきである。日常性が薄れつつある小字、俗地名の正確な訓みを地元の人から直接聞きとり記録する。

二、ポイント

小字、及び俗地名の①訓み　②範囲（場所・地目）の把握

③由来について調査し、合せて村落様体（石塔・伝承・信仰・古井戸・古屋敷など）を記録する……地誌

三　楠元の歴史の概要

別紙（角川地名大辞典）

四　小字の調査　（字絵図参照）

地元の淵上武義（八二歳）　淵上岩男（七八歳）久保田隆（六五歳）から大雑把な場所の特定、訓み方、地目などを聞いた。

◎地名の訛りと標準語及び誤記

11　大門口　でもんくっ　だいもんぐち

80　皆元　けもと　かいもと

48　桂山　かずらやま　かつらやま

34　（梅木）　うめっ　梅丸　うめまる

64　野空　のがら　のぞら

9　一条　（二）　（六）　（七）　（一二）　（一九）

11　大門口（五）　（一一）

14　免田　（一九）　165～9楠本免田ほんやく（本供役？）の米

243～16入来院内楠本免田五段事

19　森山　（八）

20　五代田（一八）　207～下　五代田

29　宝岩　（九）　大磯作也の水神？

34　梅丸　（二）　梅木

36　六田　（一九）　215～29ろく田二反内城之内

40　小山田（一八）　記念碑（一四）　112貢楠元、淵上門之内、小山田、下々田

48　桂山　（五）　神殿柴の採取地　天狗岩

49 50 井手上、井手元（一四）　112貢楠元、淵上門之内井手山、山畑

58 59 73　馬場・馬場口・馬立（五）馬の放牧場、馬舎があった。

60　池平　（一二）　（一八）

62　大園　（一九）　51～98大園此内天神敷地、免田在之（1329年）

44～84大園二弐宇、又二郎入道一宇無作人（1229年）

182～13・14楠元大園（別紙、1359年）

76　上原（一九）　245～23入来院、淵上、上原に於て（1339年）

（五）　万治2年塔ノ原より楠元村へ（1659年）

79　鐙　（五）　地頭が鐙を外した場所

81　三反田（一九）　26～71楠元の三反田（1490年）

83　池尻（一四）「上原門名寄帳」池尻中田（1765年）

89　赤坂（二）　赤坂川（五）　赤迫の供養塔

（八）　山之神、楠元村之内東阪

七、文献（俗地名）

別紙

八、その他の地名

※「淵脇」一宇無作人　（入、45～84・1229年）

「くすもとひさくくち」已上二十六丁四反……（入37～75・1250年）

※四ケ所城籠村一宇「淵脇」此内記沙門堂并十二宮、同敷地免田在之　（入・51～98・1329年）

「くす本三反」　（新田一　40～66・1411年）

火田分五反「くすもと」　右同

くすもと「てらさこ」　（入・25～71・1490年）

（持法院淵上平徳寺十一面観音・図絵、石塔編・1406年銘）

くすもと「くわはた」　（入・25～71・1490年）

82宍川　ししがわ　穴川　あながわ

五、文献（全体）

（一）角川地名大辞典（昭和五八年）

（二）鹿児島県地誌（明治）

（三）地理纂考

（四）三国名勝図会

（五）楠元村郷土史（昭和三〇年）

（六）薩摩国衙領考六題

（七）東郷町郷土史（昭和四四年）

（八）樋脇村史下巻

（九）宮之城人物伝

（十）郷土史と伝説

（一一）浜田郷土史上・下巻

（一二）川内市史上・下巻

（一三）川内市史石塔編

（一四）川内市史古文書編

（一五）川内市史続古文書編

（一六）川内市史字絵図集（正・続）

（一七）川内市史棟札集

（一八）川内市史溜池・耕地整理碑集

（一九）入来文書

六、文献（小字）

8　登瀬　渡船（五）　唐船、朝鮮

くすもと「一せまち」　（入・25～71・1490年）
くすもと「堂のまえ」　右同
くすもと「ぐほた」　右同
くすもとのつくだ　右同
くすもの上江河之門　右同
あかさか門二丁二反　（入・194～2・1501年）
なへ之門三丁二反　右同
下村十郎　右同
うけの門一丁二反楠元名（入・194～2・1570年）
三光之内長蔵　（石塔編103・1808年）
淵上門之内「小山田・下々田」「竹山・山畑」「井手山・山畑」　（古文編112・1855）
下江川溝　（地誌）
※くすもと一町之内浮めん五反　（新田一・41・1446年）
※「樋脇村史」に「犬馬場」「東の門」「東阪」「外城」「内城」「那知山」「宿田」が出る

九、地名考

「一条」上一重・下一重（東郷・斧淵）一重（垂水・本城）
一条（隼人・松永）南一条（垂水・高城・吉田・本城）
一宇村（いっちゅう・徳島）
「大人足形」大人跡（串木野・下名）大人・小人（阿久根・大川）
人足跡（国分・牛根麓）大人足（出水・武本）
大人形（牧園・下中津川、横川・上ノ）
大人足跡（福山・佳例川、宮之城地名53～31）
大人足形（おしとがし、郷村地名考34）
※地名覚書104頁　柳田
「涼松」
涼松（阿久根・脇元、知覧・中名、野田・上名西之表・西之表、同住吉）
須々原（鹿児島・平川）
涼田（隼人・東郷）
淳松（ママ）（阿久根・西目）
「供養壇」
供養平（頴娃・郡）
供養元（福山・佳例川、高尾野・上水流）
（宮之場・舟木、有明・中之内）
供養松、供養頭、高供養（枕崎・別府）
宇都供養（串良・細山田）
九曜ノ原（宮之場・広瀬）
九曜岡（末吉・諏訪方）
※供養坂（くえさかー串木野郷土誌988上）
※大崩（おおくよー有明・須田木）

くすもと　楠元〈川内市〉

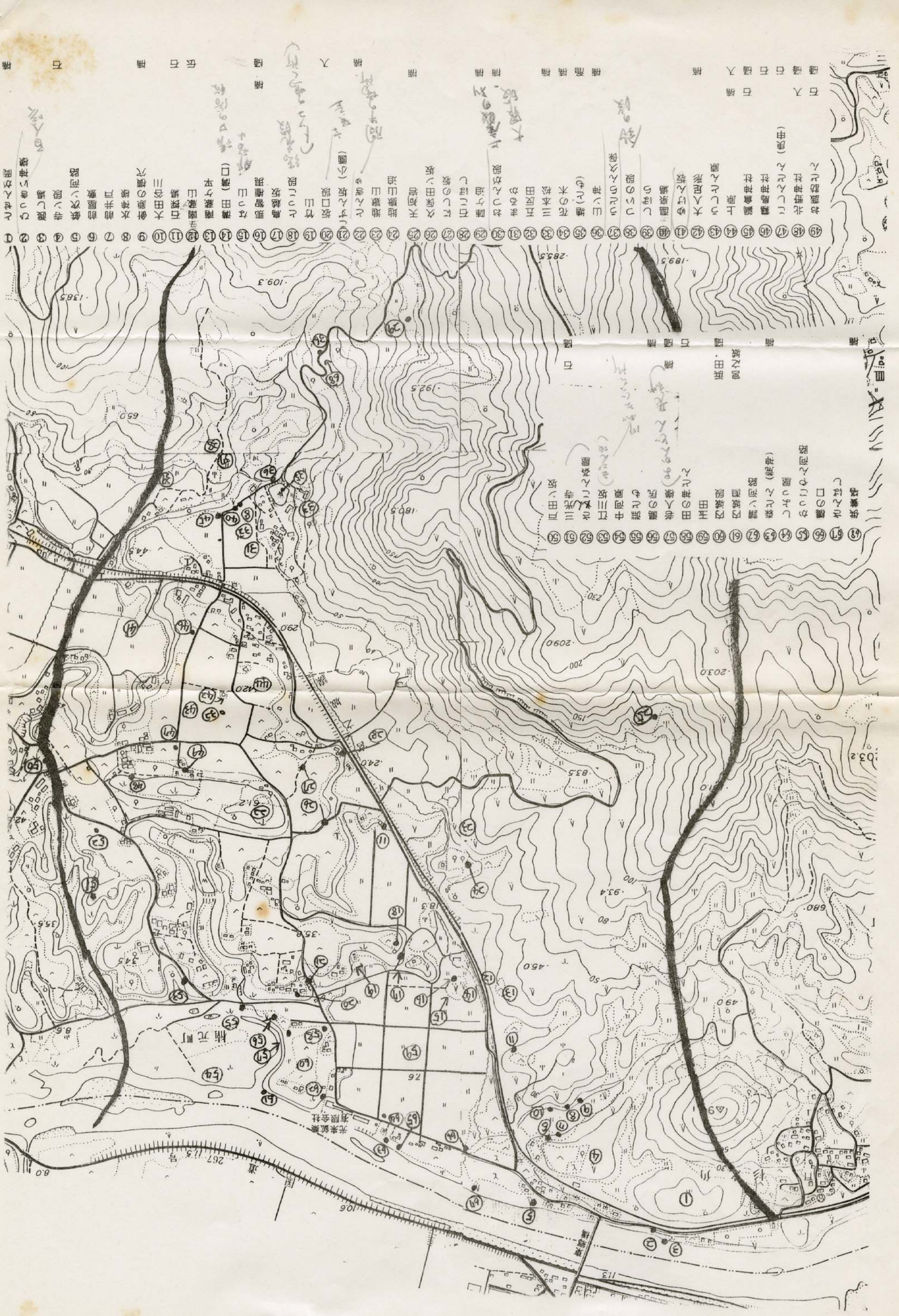
川内川下流左岸に沿って位置し，西部に上床（寺山）北麓が広がる。東部の馬立からは先土器時代のものと思われる柳葉石器（尖頭器）が出土した。

〔中世〕楠本　鎌倉期から見える地名。薩摩国入来院のうち。建長2年12月日付の入来院村々田地年貢等注文に「くすもとひさくくち」とあるのが初見（入来文書）。次いで永仁6年7月8日付の入来院分箱崎要害所石築地配分状に「楠本　一丈二尺四分　除三分一」と見え（同前），徳治3年正月日付の平氏女連署になる「入来院清敷南方色々御公事配分事」についての和与状に「一　楠本免田ほんくやくの米三斗五合五勺内　三舛五勺一才　清敷御分」と見える（入来文書／旧記雑録）。その後，至徳2年と推定される2月7日付の周防右京亮宛宮内大輔三雄挙状に「渋谷五郎重頼申本領安堵事，入来院之内清色郷北方，中村郷楠本村，市比野名地頭職，倉野村事」とあり，建徳2年10月15日付の渋谷重頼宛重門譲状，応永13年11月15日付の重長宛重頼譲状，嘉吉元年2月27日付の重豊宛重長譲状にも「一所　楠本村」が挙げられている（入来文書，旧記雑録）。下って，「上井覚兼日記」天正3年11月7日条によれば，本田薫親等が入来院重豊の謀叛を心配してその領地の削減を主張，「先々たうの原名三ツ一・中村名三ニツ・楠本名六町是ハ一円ニ，此方之内ニ柴を指入候なり」などと見える。

〔近世〕楠元村　江戸期～明治22年の村名。薩摩国薩摩郡樋脇郷（延宝9年まで清敷郷と呼称）のうち，なお，明治2年からは同郡平佐郷のうち。万治2年以降樋脇郷は鹿児島藩直轄領となるが，当村と久住村・中村の3か村は平佐郷を領した北郷氏の持切名で，のち明治2年平佐郷に編入される。村高は，「天保郷帳」685石余，「旧高旧領」482石余。文化5年の門数15。文久元年の衆中30人（上原文書／川内市史古文書編）。庄屋には，万治2年松山主右衛門，寛文9年中島軍蔵，宝永8年落合六左衛門などの名が見える（川内市史）。庄屋所は東部の辻に居住する落合氏宅が役所を兼ね，宝永年間以降の庄屋はほとんど落合氏によって継承された（落合氏系図／川内市史料集6）。神社には，諏訪上下神社がある（三国名勝図会）。「県地誌」によれば，戸数93・人口439（士族129・平民310），牛36・馬117，荷船2，用水池1（北東部の下江川溜池），小学校は中央部にあり生徒数男20・女11，物産としては米・粟・麦・蕎麦・甘藷・茶・煙草・実綿など。明治22年平佐村の大字となる。

一四　入來院楠本大薗のさいほう身曳狀案

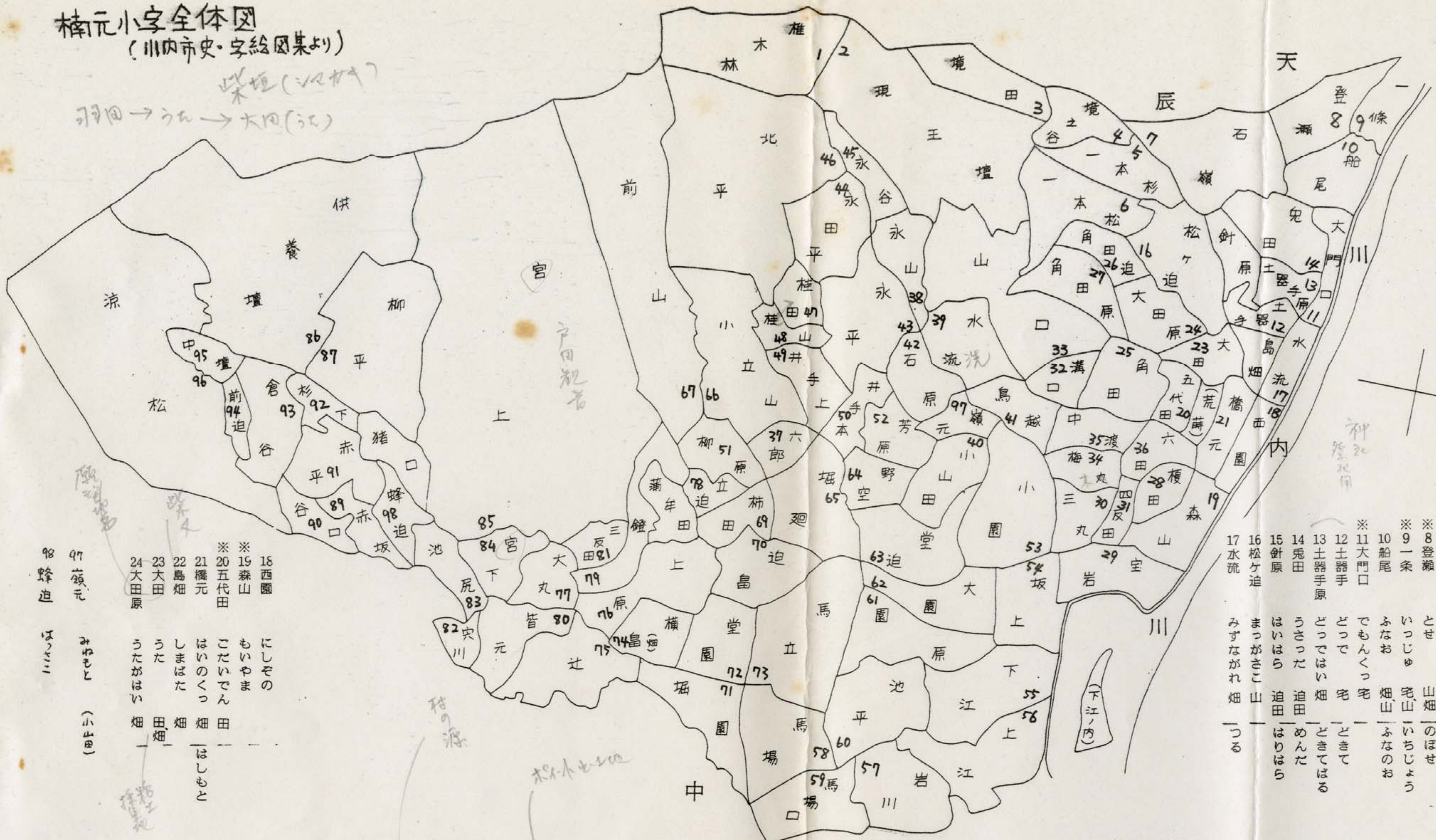
くすもとの大そのゝさいほうか一るい七人、むかへとのゝ御うちニひきふいたいをかきり（ふミ）□申候ところしち也。このうちに候太郎二郎男をハ。御うちにまいらせおき候、うへハもし御うちをまかり（ふ）□て候いかなるけもん・せいけ・しんしてゝゝゝ


北条鉱業
株式会社
267 115号
道
106
113
180.5
192.5
183.5
285.5
109.3
138.5
44.5
65.0
29.0
24.0
20.3.2
203.0
209.0
93.4
83.5
34.5
35.6
35.0
49.0
45.0
6.2
7.6
8.0
8.6
桂元町
北条鉱業
有限会社
(49) 鉱業所
(48) 北野神社
(47) 鶴亀神社
(46) 鶴亀神社
(45) 鶴亀神社
(44) 上原
(43) 北ごうの原
(42) 大足形
(41) 大ごうの坂
(40) 温泉場
(39) しゅう
(38) ごうの段
(37) 宮ごうの坂
(36) 神ノ山
(35) 地ノ(ゆ)
(34) 木の花
(33) 三本松
(32) 五反田
(31) ながれ
(30) 段ごうの坂
(29) 陣ケ迫
(28) 石ごうの坂
(27) ごうの坂
(26) 宮田ごうの坂
(25) 天狗谷
(24) 地蔵山
(23) 地蔵山
(22) ごうの坂
(21) ごうの坂(ごうの坂)
(20) 坂口段
(19) 竹山
(18) ごうの段
(17) 鳥越坂
(16) 那智権現
(15) なつ山
(14) 溝田(溝口)
(13) 南蔵ケ平
(12) 南蔵山
(11) 石狩鉱業
(10) 大田谷川
(9) 釜の原の橋ケ
(8) 前井戸
(7) 前屋敷
(6) 前河内
(5) 鉄砲
(4) 寺段
(3) 馬場ごう
(2) 藤寺ごうの
(1) 原ごうの
(50) 田ノ坂
(51) 三光寺
(52) 三光寺ごうの原
(53) 江川坂
(54) 中河原
(55) 鉱業所
(56) 鉱業所
(57) 鉱業所
(58) 田ごうの
(59) 玉田
(60) 鉱業所
(61) 鉱業所
(62) 鉱業所
(63) 鉱業所(事務所)
(64) ごうの原
(65) 鉱業所
(66) 口の鉱
(67) 鉱業所
(68) 鉱業所
(69) 鉱業所
(70) 鉱業所
(71) 鉱業所
(72) 鉱業所
(73) 鉱業所
(74) 鉱業所
(75) 鉱業所
(76) 鉱業所
(77) 鉱業所
(78) 鉱業所
(79) 鉱業所
(80) 鉱業所
(81) 鉱業所
(82) 鉱業所
(83) 鉱業所
(84) 鉱業所
(85) 鉱業所
(86) 鉱業所
(87) 鉱業所
(88) 鉱業所
(89) 鉱業所
(90) 鉱業所
(91) 鉱業所
(92) 鉱業所
(93) 鉱業所
(94) 鉱業所
(95) 鉱業所
(96) 鉱業所
(97) 鉱業所
(98) 鉱業所
(99) 鉱業所
(100) 鉱業所
(101) 鉱業所
(102) 鉱業所
(103) 鉱業所
(104) 鉱業所
(105) 鉱業所
(106) 鉱業所
(107) 鉱業所
(108) 鉱業所
(109) 鉱業所
(110) 鉱業所
(111) 鉱業所
(112) 鉱業所
(113) 鉱業所
(114) 鉱業所
(115) 鉱業所
(116) 鉱業所
(117) 鉱業所
(118) 鉱業所
(119) 鉱業所
(120) 鉱業所
(121) 鉱業所
(122) 鉱業所
(123) 鉱業所
(124) 鉱業所
(125) 鉱業所
(126) 鉱業所
(127) 鉱業所
(128) 鉱業所
(129) 鉱業所
(130) 鉱業所
(131) 鉱業所
(132) 鉱業所
(133) 鉱業所
(134) 鉱業所
(135) 鉱業所
(136) 鉱業所
(137) 鉱業所
(138) 鉱業所
(139) 鉱業所
(140) 鉱業所
(141) 鉱業所
(142) 鉱業所
(143) 鉱業所
(144) 鉱業所
(145) 鉱業所
(146) 鉱業所
(147) 鉱業所
(148) 鉱業所
(149) 鉱業所
(150) 鉱業所
(151) 鉱業所
(152) 鉱業所
(153) 鉱業所
(154) 鉱業所
(155) 鉱業所
(156) 鉱業所
(157) 鉱業所
(158) 鉱業所
(159) 鉱業所
(160) 鉱業所
(161) 鉱業所
(162) 鉱業所
(163) 鉱業所
(164) 鉱業所
(165) 鉱業所
(166) 鉱業所
(167) 鉱業所
(168) 鉱業所
(169) 鉱業所
(170) 鉱業所
(171) 鉱業所
(172) 鉱業所
(173) 鉱業所
(174) 鉱業所
(175) 鉱業所
(176) 鉱業所
(177) 鉱業所
(178) 鉱業所
(179) 鉱業所
(180) 鉱業所
(181) 鉱業所
(182) 鉱業所
(183) 鉱業所
(184) 鉱業所
(185) 鉱業所
(186) 鉱業所
(187) 鉱業所
(188) 鉱業所
(189) 鉱業所
(190) 鉱業所
(191) 鉱業所
(192) 鉱業所
(193) 鉱業所
(194) 鉱業所
(195) 鉱業所
(196) 鉱業所
(197) 鉱業所
(198) 鉱業所
(199) 鉱業所
(200) 鉱業所
(201) 鉱業所
(202) 鉱業所
(203) 鉱業所
(204) 鉱業所
(205) 鉱業所
(206) 鉱業所
(207) 鉱業所
(208) 鉱業所
(209) 鉱業所
(210) 鉱業所
(211) 鉱業所
(212) 鉱業所
(213) 鉱業所
(214) 鉱業所
(215) 鉱業所
(216) 鉱業所
(217) 鉱業所
(218) 鉱業所
(219) 鉱業所
(220) 鉱業所
(221) 鉱業所
(222) 鉱業所
(223) 鉱業所
(224) 鉱業所
(225) 鉱業所
(226) 鉱業所
(227) 鉱業所
(228) 鉱業所
(229) 鉱業所
(230) 鉱業所
(231) 鉱業所
(232) 鉱業所
(233) 鉱業所
(234) 鉱業所
(235) 鉱業所
(236) 鉱業所
(237) 鉱業所
(238) 鉱業所
(239) 鉱業所
(240) 鉱業所
(241) 鉱業所
(242) 鉱業所
(243) 鉱業所
(244) 鉱業所
(245) 鉱業所
(246) 鉱業所
(247) 鉱業所
(248) 鉱業所
(249) 鉱業所
(250) 鉱業所
(251) 鉱業所
(252) 鉱業所
(253) 鉱業所
(254) 鉱業所
(255) 鉱業所
(256) 鉱業所
(257) 鉱業所
(258) 鉱業所
(259) 鉱業所
(260) 鉱業所
(261) 鉱業所
(262) 鉱業所
(263) 鉱業所
(264) 鉱業所
(265) 鉱業所
(266) 鉱業所
(267) 鉱業所
(268) 鉱業所
(269) 鉱業所
(270) 鉱業所
(271) 鉱業所
(272) 鉱業所
(273) 鉱業所
(274) 鉱業所
(275) 鉱業所
(276) 鉱業所
(277) 鉱業所
(278) 鉱業所
(279) 鉱業所
(280) 鉱業所
(281) 鉱業所
(282) 鉱業所
(283) 鉱業所
(284) 鉱業所
(285) 鉱業所
(286) 鉱業所
(287) 鉱業所
(288) 鉱業所
(289) 鉱業所
(290) 鉱業所
(291) 鉱業所
(292) 鉱業所
(293) 鉱業所
(294) 鉱業所
(295) 鉱業所
(296) 鉱業所
(297) 鉱業所
(298) 鉱業所
(299) 鉱業所
(300) 鉱業所
(301) 鉱業所
(302) 鉱業所
(303) 鉱業所
(304) 鉱業所
(305) 鉱業所
(306) 鉱業所
(307) 鉱業所
(308) 鉱業所
(309) 鉱業所
(310) 鉱業所
(311) 鉱業所
(312) 鉱業所
(313) 鉱業所
(314) 鉱業所
(315) 鉱業所
(316) 鉱業所
(317) 鉱業所
(318) 鉱業所
(319) 鉱業所
(320) 鉱業所
(321) 鉱業所
(322) 鉱業所
(323) 鉱業所
(324) 鉱業所
(325) 鉱業所
(326) 鉱業所
(327) 鉱業所
(328) 鉱業所
(329) 鉱業所
(330) 鉱業所
(331) 鉱業所
(332) 鉱業所
(333) 鉱業所
(334) 鉱業所
(335) 鉱業所
(336) 鉱業所
(337) 鉱業所
(338) 鉱業所
(339) 鉱業所
(340) 鉱業所
(341) 鉱業所
(342) 鉱業所
(343) 鉱業所
(344) 鉱業所
(345) 鉱業所
(346) 鉱業所
(347) 鉱業所
(348) 鉱業所
(349) 鉱業所
(350) 鉱業所
(351) 鉱業所
(352) 鉱業所
(353) 鉱業所
(354) 鉱業所
(355) 鉱業所
(356) 鉱業所
(357) 鉱業所
(358) 鉱業所
(359) 鉱業所
(360) 鉱業所
(361) 鉱業所
(362) 鉱業所
(363) 鉱業所
(364) 鉱業所
(365) 鉱業所
(366) 鉱業所
(367) 鉱業所
(368) 鉱業所
(369) 鉱業所
(370) 鉱業所
(371) 鉱業所
(372) 鉱業所
(373) 鉱業所
(374) 鉱業所
(375) 鉱業所
(376) 鉱業所
(377) 鉱業所
(378) 鉱業所
(379) 鉱業所
(380) 鉱業所
(381) 鉱業所
(382) 鉱業所
(383) 鉱業所
(384) 鉱業所
(385) 鉱業所
(386) 鉱業所
(387) 鉱業所
(388) 鉱業所
(389) 鉱業所
(390) 鉱業所
(391) 鉱業所
(392) 鉱業所
(393) 鉱業所
(394) 鉱業所
(395) 鉱業所
(396) 鉱業所
(397) 鉱業所
(398) 鉱業所
(399) 鉱業所
(400) 鉱業所
(401) 鉱業所
(402) 鉱業所
(403) 鉱業所
(404) 鉱業所
(405) 鉱業所
(406) 鉱業所
(407) 鉱業所
(408) 鉱業所
(409) 鉱業所
(410) 鉱業所
(411) 鉱業所
(412) 鉱業所
(413) 鉱業所
(414) 鉱業所
(415) 鉱業所
(416) 鉱業所
(417) 鉱業所
(418) 鉱業所
(419) 鉱業所
(420) 鉱業所
(421) 鉱業所
(422) 鉱業所
(423) 鉱業所
(424) 鉱業所
(425) 鉱業所
(426) 鉱業所
(427) 鉱業所
(428) 鉱業所
(429) 鉱業所
(430) 鉱業所
(431) 鉱業所
(432) 鉱業所
(433) 鉱業所
(434) 鉱業所
(435) 鉱業所
(436) 鉱業所
(437) 鉱業所
(438) 鉱業所
(439) 鉱業所
(440) 鉱業所
(441) 鉱業所
(442) 鉱業所
(443) 鉱業所
(444) 鉱業所
(445) 鉱業所
(446) 鉱業所
(447) 鉱業所
(448) 鉱業所
(449) 鉱業所
(450) 鉱業所
(451) 鉱業所
(452) 鉱業所
(453) 鉱業所
(454) 鉱業所
(455) 鉱業所
(456) 鉱業所
(457) 鉱業所
(458) 鉱業所
(459) 鉱業所
(460) 鉱業所
(461) 鉱業所
(462) 鉱業所
(463) 鉱業所
(464) 鉱業所
(465) 鉱業所
(466) 鉱業所
(467) 鉱業所
(468) 鉱業所
(469) 鉱業所
(470) 鉱業所
(471) 鉱業所
(472) 鉱業所
(473) 鉱業所
(474) 鉱業所
(475) 鉱業所
(476) 鉱業所
(477) 鉱業所
(478) 鉱業所
(479) 鉱業所
(480) 鉱業所
(481) 鉱業所
(482) 鉱業所
(483) 鉱業所
(484) 鉱業所
(485) 鉱業所
(486) 鉱業所
(487) 鉱業所
(488) 鉱業所
(489) 鉱業所
(490) 鉱業所
(491) 鉱業所
(492) 鉱業所
(493) 鉱業所
(494) 鉱業所
(495) 鉱業所
(496) 鉱業所
(497) 鉱業所
(498) 鉱業所
(499) 鉱業所
(500) 鉱業所
(501) 鉱業所
(502) 鉱業所
(503) 鉱業所
(504) 鉱業所
(505) 鉱業所
(506) 鉱業所
(507) 鉱業所
(508) 鉱業所
(509) 鉱業所
(510) 鉱業所
(511) 鉱業所
(512) 鉱業所
(513) 鉱業所
(514) 鉱業所
(515) 鉱業所
(516) 鉱業所
(517) 鉱業所
(518) 鉱業所
(519) 鉱業所
(520) 鉱業所
(521) 鉱業所
(522) 鉱業所
(523) 鉱業所
(524) 鉱業所
(525) 鉱業所
(526) 鉱業所
(527) 鉱業所
(528) 鉱業所
(529) 鉱業所
(530) 鉱業所
(531) 鉱業所
(532) 鉱業所
(533) 鉱業所
(534) 鉱業所
(535) 鉱業所
(536) 鉱業所
(537) 鉱業所
(538) 鉱業所
(539) 鉱業所
(540) 鉱業所
(541) 鉱業所
(542) 鉱業所
(543) 鉱業所
(544) 鉱業所
(545) 鉱業所
(546) 鉱業所
(547) 鉱業所
(548) 鉱業所
(549) 鉱業所
(550) 鉱業所
(551) 鉱業所
(552) 鉱業所
(553) 鉱業所
(554) 鉱業所
(555) 鉱業所
(556) 鉱業所
(557) 鉱業所
(558) 鉱業所
(559) 鉱業所
(560) 鉱業所
(561) 鉱業所
(562) 鉱業所
(563) 鉱業所
(564) 鉱業所
(565) 鉱業所
(566) 鉱業所
(567) 鉱業所
(568) 鉱業所
(569) 鉱業所
(570) 鉱業所
(571) 鉱業所
(572) 鉱業所
(573) 鉱業所
(574) 鉱業所
(575) 鉱業所
(576) 鉱業所
(577) 鉱業所
(578) 鉱業所
(579) 鉱業所
(580) 鉱業所
(581) 鉱業所
(582) 鉱業所
(583) 鉱業所
(584) 鉱業所
(585) 鉱業所
(586) 鉱業所
(587) 鉱業所
(588) 鉱業所
(589) 鉱業所
(590) 鉱業所
(591) 鉱業所
(592) 鉱業所
(593) 鉱業所
(594) 鉱業所
(595) 鉱業所
(596) 鉱業所
(597) 鉱業所
(598) 鉱業所
(599) 鉱業所
(600) 鉱業所
(601) 鉱業所
(602) 鉱業所
(603) 鉱業所
(604) 鉱業所
(605) 鉱業所
(606) 鉱業所
(607) 鉱業所
(608) 鉱業所
(609) 鉱業所
(610) 鉱業所
(611) 鉱業所
(612) 鉱業所
(613) 鉱業所
(614) 鉱業所
(615) 鉱業所
(616) 鉱業所
(617) 鉱業所
(618) 鉱業所
(619) 鉱業所
(620) 鉱業所
(621) 鉱業所
(622) 鉱業所
(623) 鉱業所
(624) 鉱業所
(625) 鉱業所
(626) 鉱業所
(627) 鉱業所
(628) 鉱業所
(629) 鉱業所
(630) 鉱業所
(631) 鉱業所
(632) 鉱業所
(633) 鉱業所
(634) 鉱業所
(635) 鉱業所
(636) 鉱業所
(637) 鉱業所
(638) 鉱業所
(639) 鉱業所
(640) 鉱業所
(641) 鉱業所
(642) 鉱業所
(643) 鉱業所
(644) 鉱業所
(645) 鉱業所
(646) 鉱業所
(647) 鉱業所
(648) 鉱業所
(649) 鉱業所
(650) 鉱業所
(651) 鉱業所
(652) 鉱業所
(653) 鉱業所
(654) 鉱業所
(655) 鉱業所
(656) 鉱業所
(657) 鉱業所
(658) 鉱業所
(659) 鉱業所
(660) 鉱業所
(661) 鉱業所
(662) 鉱業所
(663) 鉱業所
(664) 鉱業所
(665) 鉱業所
(666) 鉱業所
(667) 鉱業所
(668) 鉱業所
(669) 鉱業所
(670) 鉱業所
(671) 鉱業所
(672) 鉱業所
(673) 鉱業所
(674) 鉱業所
(675) 鉱業所
(676) 鉱業所
(677) 鉱業所
(678) 鉱業所
(679) 鉱業所
(680) 鉱業所
(681) 鉱業所
(682) 鉱業所
(683) 鉱業所
(684) 鉱業所
(685) 鉱業所
(686) 鉱業所
(687) 鉱業所
(688) 鉱業所
(689) 鉱業所
(690) 鉱業所
(691) 鉱業所
(692) 鉱業所
(693) 鉱業所
(694) 鉱業所
(695) 鉱業所
(696) 鉱業所
(697) 鉱業所
(698) 鉱業所
(699) 鉱業所
(700) 鉱業所
(701) 鉱業所
(702) 鉱業所
(703) 鉱業所
(704) 鉱業所
(705) 鉱業所
(706) 鉱業所
(707) 鉱業所
(708) 鉱業所
(709) 鉱業所
(710) 鉱業所
(711) 鉱業所
(712) 鉱業所
(713) 鉱業所
(714) 鉱業所
(715) 鉱業所
(716) 鉱業所
(717) 鉱業所
(718) 鉱業所
(719) 鉱業所
(720) 鉱業所
(721) 鉱業所
(722) 鉱業所
(723) 鉱業所
(724) 鉱業所
(725) 鉱業所
(726) 鉱業所
(727) 鉱業所
(728) 鉱業所
(729) 鉱業所
(730) 鉱業所
(731) 鉱業所
(732) 鉱業所
(733) 鉱業所
(734) 鉱業所
(735) 鉱業所
(736) 鉱業所
(737) 鉱業所
(738) 鉱業所
(739) 鉱業所
(740) 鉱業所
(741) 鉱業所
(742) 鉱業所
(743) 鉱業所
(744) 鉱業所
(745) 鉱業所
(746) 鉱業所
(747) 鉱業所
(748) 鉱業所
(749) 鉱業所
(750) 鉱業所
(751) 鉱業所
(752) 鉱業所
(753) 鉱業所
(754) 鉱業所
(755) 鉱業所
(756) 鉱業所
(757) 鉱業所
(758) 鉱業所
(759) 鉱業所
(760) 鉱業所
(761) 鉱業所
(762) 鉱業所
(763) 鉱業所
(764) 鉱業所
(765) 鉱業所
(766) 鉱業所
(767) 鉱業所
(768) 鉱業所
(769) 鉱業所
(770) 鉱業所
(771) 鉱業所
(772) 鉱業所
(773) 鉱業所
(774) 鉱業所
(775) 鉱業所
(776) 鉱業所
(777) 鉱業所
(778) 鉱業所
(779) 鉱業所
(780) 鉱業所
(781) 鉱業所
(782) 鉱業所
(783) 鉱業所
(784) 鉱業所
(785) 鉱業所
(786) 鉱業所
(787) 鉱業所
(788) 鉱業所
(789) 鉱業所
(790) 鉱業所
(791) 鉱業所
(792) 鉱業所
(793) 鉱業所
(794) 鉱業所
(795) 鉱業所
(796) 鉱業所
(797) 鉱業所
(798) 鉱業所
(799) 鉱業所
(800) 鉱業所
(801) 鉱業所
(802) 鉱業所
(803) 鉱業所
(804) 鉱業所
(805) 鉱業所
(806) 鉱業所
(807) 鉱業所
(808) 鉱業所
(809) 鉱業所
(810) 鉱業所
(811) 鉱業所
(812) 鉱業所
(813) 鉱業所
(814) 鉱業所
(815) 鉱業所
(816) 鉱業所
(817) 鉱業所
(818) 鉱業所
(819) 鉱業所
(820) 鉱業所
(821) 鉱業所
(822) 鉱業所
(823) 鉱業所
(824) 鉱業所
(825) 鉱業所
(826) 鉱業所
(827) 鉱業所
(828) 鉱業所
(829) 鉱業所
(830) 鉱業所
(831) 鉱業所
(832) 鉱業所
(833) 鉱業所
(834) 鉱業所
(835) 鉱業所
(836) 鉱業所
(837) 鉱業所
(838) 鉱業所
(839) 鉱業所
(840) 鉱業所
(841) 鉱業所
(842) 鉱業所
(843) 鉱業所
(844) 鉱業所
(845) 鉱業所
(846) 鉱業所
(847) 鉱業所
(848) 鉱業所
(849) 鉱業所
(850) 鉱業所
(851) 鉱業所
(852) 鉱業所
(853) 鉱業所
(854) 鉱業所
(855) 鉱業所
(856) 鉱業所
(857) 鉱業所
(858) 鉱業所
(859) 鉱業所
(860) 鉱業所
(861) 鉱業所
(862) 鉱業所
(863) 鉱業所
(864) 鉱業所
(865) 鉱業所
(866) 鉱業所
(867) 鉱業所
(868) 鉱業所
(869) 鉱業所
(870) 鉱業所
(871) 鉱業所
(872) 鉱業所
(873) 鉱業所
(874) 鉱業所
(875) 鉱業所
(876) 鉱業所
(877) 鉱業所
(878) 鉱業所
(879) 鉱業所
(880) 鉱業所
(881) 鉱業所
(882) 鉱業所
(883) 鉱業所
(884) 鉱業所
(885) 鉱業所
(886) 鉱業所
(887) 鉱業所
(888) 鉱業所
(889) 鉱業所
(890) 鉱業所
(891) 鉱業所
(892) 鉱業所
(893) 鉱業所
(894) 鉱業所
(895) 鉱業所
(896) 鉱業所
(897) 鉱業所
(898) 鉱業所
(899) 鉱業所
(900) 鉱業所
(901) 鉱業所
(902) 鉱業所
(903) 鉱業所
(904) 鉱業所
(905) 鉱業所
(906) 鉱業所
(907) 鉱業所
(908) 鉱業所
(909) 鉱業所
(910) 鉱業所
(911) 鉱業所
(912) 鉱業所
(913) 鉱業所
(914) 鉱業所
(915) 鉱業所
(916) 鉱業所
(917) 鉱業所
(918) 鉱業所
(919) 鉱業所
(920) 鉱業所
(921) 鉱業所
(922) 鉱業所
(923) 鉱業所
(924) 鉱業所
(925) 鉱業所
(926) 鉱業所
(927) 鉱業所
(928) 鉱業所
(929) 鉱業所
(930) 鉱業所
(931) 鉱業所
(932) 鉱業所
(933) 鉱業所
(934) 鉱業所
(935) 鉱業所
(936) 鉱業所
(937) 鉱業所
(938) 鉱業所
(939) 鉱業所
(940) 鉱業所
(941) 鉱業所
(942) 鉱業所
(943) 鉱業所
(944) 鉱業所
(945) 鉱業所
(946) 鉱業所
(947) 鉱業所
(948) 鉱業所
(949) 鉱業所
(950) 鉱業所
(951) 鉱業所
(952) 鉱業所
(953) 鉱業所
(954) 鉱業所
(955) 鉱業所
(956) 鉱業所
(957) 鉱業所
(958) 鉱業所
(959) 鉱業所
(960) 鉱業所
(961) 鉱業所
(962) 鉱業所
(963) 鉱業所
(964) 鉱業所
(965) 鉱業所
(966) 鉱業所
(967) 鉱業所
(968) 鉱業所
(969) 鉱業所
(970) 鉱業所
(971) 鉱業所
(972) 鉱業所
(973) 鉱業所
(974) 鉱業所
(975) 鉱業所
(976) 鉱業所
(977) 鉱業所
(978) 鉱業所
(979) 鉱業所
(980) 鉱業所
(981) 鉱業所
(982) 鉱業所
(983) 鉱業所
(984) 鉱業所
(985) 鉱業所
(986) 鉱業所
(987) 鉱業所
(988) 鉱業所
(989) 鉱業所
(990) 鉱業所
(991) 鉱業所
(992) 鉱業所
(993) 鉱業所
(994) 鉱業所
(995) 鉱業所
(996) 鉱業所
(997) 鉱業所
(998) 鉱業所
(999) 鉱業所
(1000) 鉱業所

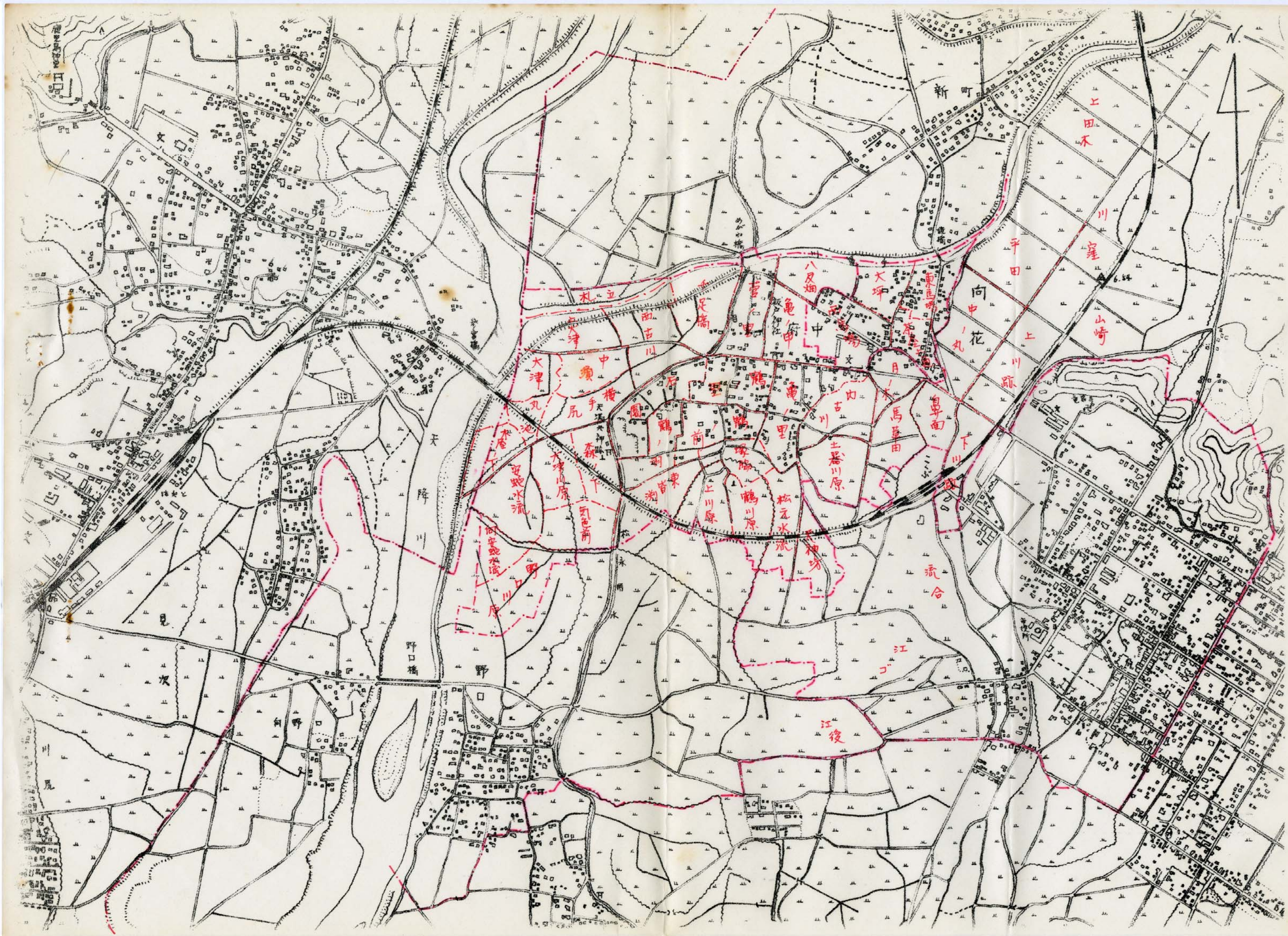
楠元小字全体図
(川内市史・字絵図集より)

柴垣(シバガキ)

羽田→うた→大田(うた)



No.	小字	地元調査	地目	市役所
1	椎木林	・しのっぱい	山林	しいのきばやし
2	現王壇	げんのだん	山林	
3	境田	さけだ	迫田	さかいだ
4	境谷	さこんたい		さかいのたに
※5	一本杉	いっぽんすっ	山田	
6	一本松	いっぽんまっ	山田	
7	石嶺	いしみね	山畑	
※8	登瀬	とせ	山畑	のぼせ
※9	一条	いっじゅ	宅、山	いちじょう
10	船尾	ふなお	畑、山	ふなのお
※11	大門口	でもんくっ	宅	
12	土器手	どって	宅	どきて
13	土器手原	どってはい	畑	どきてばる
14	兎田	うさっだ	迫田	めんだ
15	針原	はいはら	迫田	はりはら
16	松ケ迫	まっがさこ	山	
17	水流	みずながれ	畑	つる
18	西園	にしぞの		
※19	森山	もいやま		
※20	五代田	こだいでん	田	
21	橋元	はいのくっ	畑	はしもと
22	島畑	しまばた	畑	
23	大田	うた	田、畑	
24	大田原	うたがはい	畑	
25	角田	すんた	山田	すみだ
26	角田迫	すんたさこ	山田	
27	角田原	すんたはい	山、畑	
28	榎田	えのっだ	田	
※29	宝岩	たからいわ	畑	
30	三丸	みつまる	宅、田	
31	四反田	したんだ	田	よんたんだ
32	溝口	みぞぐっ	田	みぞぐち
33	山口	やまんくっ	山	やまぐち
※34	梅丸	うめっ	田	うめまる
35	中渡	なかわたし	田	
※36	六田	むた	田	
37	六郎	どくろ	棚田	ろくろう
38	永山	ながやま	山	
39	水洗	みざれ	田	みずあらい
※40	小山田	こやまだ	田	
41	鳥越	といごえ	墓、畑	
42	石原	いしはら	田	
43	永平	ながひら	山	
44	永田平	ながたひら	山田	
45	永谷	ながたん	山	ながたに
46	北平	きたひら	山	
47	桂田	かつらだ	山	
※48	桂山	かづらやま	田	かつらやま
※49	井手上	いでんうえ	田	
50	井手本	いでんもと	田	
51	柳原	やなっぱい		
52	芳原	よしはら		
53	小園	こぞん	畑	
※54	坂上	さかんうえ	宅	
55	下江	しもえ	畑	
56	上江	かみえ	畑	
57	岩川	いわご	畑	いわがわ
※58	馬場	ばば	宅、畑	
59	馬場口	ばばぐっ	畑	
※60	池平	いけひら	畑	
61	園原	そんばい	畑	
※62	大園	おおぞん	宅、畑	
※63	堂迫	どんさこ	畑、墓	どうさこ
64	野空	のがら	田	のぞら
65	堀廻	ほいまわし		
66	小立山	こたっちゃま	山田	こたてやま
67	前山	めやま	山	まえやま
68	蒲牟田	かまんた	田	かまむた
69	柿田	かっだ	田	
70	迫畠	さこはた	畑	
71	堀園	ほいぞん	畑	
72	堂園	どうぞん	畑、	
※73	馬立	またて	田、畑	うまたて
74	横畠	よこはた	畑	
75	辻	つじ	宅	
※76	上原	いえんはい	畑	
77	大丸	だいまる	畑	おおまる
78	立迫	たっざこ		
※79	鐙	あぶん	宅	
80	皆元	けもと	宅、墓	かいもと
※81	三反田	さんたんだ	田	
82	宍川	ししがわ		あながわ
※83	池尻	いけじり	田	
84	宮下	みやんした	田	
85	宮上	みやんうえ	山、宅	
86	供養壇	くよんだん	山	くようだん
87	柳平	やなっぴら	棚田	
88	猪口	いのんくっ	山田	いのくち
※89	赤坂	あかさか	棚田	
90	谷口	たんくっ	田	
91	赤平	あかひら	田	
92	杉下			すぎした
93	倉谷	くらんたい	田、谷川	
94	前迫	まえさこ		
95	中壇	なかだん	山	
96	涼松	すずまっ	山	
97	嶺元	みねもと	(小山田)	
98	蜂迫	はっさこ		


N.
新町
向中花
上田木
川窪
山崎
平田
上川跡
下川戸
流合
江ゴ
江後
大坪
東直前
八反畑
亀谷中
宮ノ里
立札
足崎
大津
中須
横手尻
天神
森下
大津川原
安蛇水流
向安蛇水流
野口川原
石屋
池ノ
鶴ノ
鶴ノ
前
東
淵
上川原
鶴川原
松五水流
神坊
土器川原
馬草面
鼻面
内古川
月ノ木
野口橋
野口
天降川
向野
次見
川見

地名研究会報　第7号

昭和60(1985)年3月17日

鹿児島地名研究会

I　第7回例会　12月2日(日)　教職員互助組合会館小会議室

(出会者)　池田信夫・江之口汎生・江平　望・小川亥三郎・片岡八郎・富永清志・中村明蔵・永山修一・永山徹弥・花園正志・原口　泉・肥後芳尚・平田信芳・二見剛史・藤浪三千尋・本田親虎・松田　誠・松浪由安・南　清孝・山口静也・山田慶晴(21名)

II　鹿児島名勝考読会　P.18～P.20

〔話題となった地名および事項〕　蒲野橋・孝行橋・田之浦・多賀山

前回までの説明についての修正および補足

平田　鶴丸城の語源について、前回云い落していたことがありました。会報第6号6ページの一番上に、後記として記してあります。その所在地「万年門」から発想される雅称だということです。それから、国分市府中の小字の中で「安蛇水流(アンジャヅル)」「向安蛇水流(ムコウアンジャヅル)」の説明が洩れていました。向安蛇水流は、現在、ソニー国分工場の一角で、安蛇水流はその北側の水田になります。安蛇は「行者(アンジャ)」すなわち禅宗の少年僧に由来するものと考えられます。その行者についての伝承は全く残っていませんが、地名に歴史が秘められている例とみられます。

原口　催馬楽に住んでおられる瀬戸口さんという方の話では、催馬楽城の位置は判っているそうです。また、あの時は矢上城もどこか判らないとしましたが(会報第4号6ページ)、三国名勝図会を見ますと、催馬楽城を矢上城とも云うとありました。そのことを補足しておきます。

蒲野橋(ヨシノバシ)

平田　蒲野橋というのはどこにあったのか、県立図書館に行って天保絵図を

見れば良かったのでしょうけれども、見ておりませんので。蒲野橋がどこにあったのか、ご存知の方、いらっしゃいませんか。

原口　あそこじゃないですか。平佐北郷屋敷と琉球館との間に、二つ橋がありますよね。新橋と蒲野橋と。

平田　琉球館のところにですか。

原口　現在の長田中学校のところに東西に走っている堀割がありましたが、あれに新橋と蒲野橋が架かっていて、そこを通って上町に通じていたわけです。天保絵図にちゃんと名前が書いてあります。ヨシノ橋と新橋と。

孝行橋(コウコウバシ)

平田　築地(ツキヂ)というのは、安永年間すなわち1770年代に埋め立てたところだと、鹿児島県地誌には書いてあります。私の不勉強で恐れいりますが、孝行橋というのがどこにあったのか。これも眼鏡橋で、もうすでに埋ってしまっておりますが。

江平　これは、あの橋のことじゃないの。あの一。

原口　鹿児島駅の横の道路は、昔、堀がありましたから、あそこに。現在の「えびす公園」に割れた石碑があり、それに池田正右衛門の顕彰の碑文が書いてあります。それがちょっと読めないので私に読んでくれと来たのですが、それを読むのは難しかったのでよく記憶しております。三国名勝図会と同じような内容のことが書いてあります。

平田　ああ、そうですか。私、あまり歩いておりませんので。

原口　えびす公園に行かれたら、ご覧になってください。碑文があります。近いうちに「池田正右衛門、母に孝養を尽すの碑」というのを青少年教育の一貫として建てることになっております。町内会長さんが大変ご熱心な方で、子供達に池田正右衛門のことを是非教えたいと、今、運動されています。

平田　孝子池田正右衛門を見直す時勢ということで、新しい名所になるだろうと思います。

田之浦（タノウラ）

平田　鶴江崎（ツルエザキ）というのは、紙園之洲（ギオンノス）の対岸で、現在宮林署があるところです。これは鶴が飛んで来たことで付いた自然地名だと思います。今日は多賀山を問題にしたいと思うのですが、その前に田之浦についてちょっと触れておきます。田之浦という地名は全国的に多いのですが、あそこは田圃があったような地形ではありません。海岸近くの狭い所に天水利用の田があって田之浦とつき、田がその浦のトレードマークとなって付いた地名かなとも思いますが、現在はその痕跡を探ることは出来ません。

江之口　註にあります、鉄とか陶。そういうような名残はどうなんですか。

平田　田之浦ですか。製鉄の名残にはちょっと気付きません。私は多賀山の麓に住んでおりますから、しょっちゅう歩いていますけれども、気付きません。あそこに慶田窯という薩摩焼の店がありますが、あの辺の山の土は焼物の原料として一番良い土じゃないだろうかと思います。それから掘った穴。ちょっと物騒で入って行けない穴がありますけども。

江之口　金糞が出て来るんですか。

平田　小さい時から歩いていますが、見当りません。

江之口　小字に残るとか。

平田　まだ小字までは調べておりません。

江之口　高麗人を連れて来たというのは、時代が特定できないのですか。そんなに古代じゃないと思いますが。

平田　これは慶田窯ですから、薩摩焼の年代にのっかって来ると思います。それから仙巌園は岩に字が書いてありますし、喜鶴亭というよび名は現在一般には云いませんが、鶴が舞いおりて来たことからそういう名が付いたのだと云うことで良いでしょう。

江之口　もう一点。田之浦のことにこだわるんですけども、金比羅権現を祀るということが書いてあります。これはどちらかと云えば航海の神なんでしょうが。この文章では金属の神という解釈ともとれるのですが、なにか理由があるのですか。

平田　うーん、そこまでは。金比羅さんということばは、土地の人も忘れていますよね。

多賀山（タガヤマ）

平田　今日は多賀山にたっぷり時間をかけて分析したいと思います。まず、プリントをお配りします。（後掲レジュメ）私は多賀山区という所に住んでおりますし、小さい時から遊んで来た所です。若い世代は行政的な隣組の呼称で多賀山と呼ぶのですが、老人は愛宕様（アタゴサァ）という云い方をします。愛宕神を祀っている印象の方が強いのでしょうか。ところが、多賀神社の方が勧請が古いわけですよね。愛宕の方が新しいんですけども、「愛宕さあ」という云い方が一般に浸透しているようです。

多賀山の住人という立場から、多賀山の「賀」というのが一体なにかと、取組んでみました。地名研究のあり方として、ひとつひとつの小さな地名というものを知っておくことも必要であるわけですが、今ひとつ、全国的な視野に立って、この地名がどういう由来をもつのかということに迫って行くことも大事なテーマだと考えます。その意味で、多賀山を取りあげました。

まず旧名浜崎または浜ヶ崎、東福と号す。16代島津義久が天正7年、近江国犬上郡の日少宮多賀神社を勧請、とありますが、これは薩藩名勝考・三国名勝図会、すべてそのように書いてあるわけです。

ところで、小さい時からこの○○賀というのは気になっているのです。○○賀という地名は非常に多いが、その意味が判らない。例えば、古代では斑鳩。これはイカルガという鳥から来たのだとの説がありますが、否定する地名研究者は多いようです。それから、蘇我氏のソガ。春日と書いて何故カスガと読むのか。飛鳥のアスカ。カスガのスガとアスカのスカとは似ているが、一体なにであるのか。

これが解けたら，古代史・古代の地名は，一度に解けて行くだろうと思います。国名を眺めると、伊賀国・加賀国・駿河国。それから東北の多賀城とあります。現在の県名では、佐賀県・滋賀県というのがあります。小さい時に夢中になった霧隠才蔵・猿飛佐助の伊賀流・甲賀流の忍術。鹿児島県では賀の地名は少ないのですが、川内に尾賀、尾賀貝塚というのがあります。国分に古賀の森があります。それで、この「賀」というのは一体なんだろうかと考えているのです。そこで、「ガ」について考えられるものを整理してみました。

（1）所有・指示を示す格助詞。漢ケ崎・山ケ野・松ケ崎・松ケ迫など。これはまあ、そういう呼び方をしたのだとすなおに考えられますが、ただ助詞とした場合に、これは大きな問題を含んでいるのではないかと思います。たとえば、牧ケ迫と牧之原の場合がありますが、この「ケ（ガ）」と「ノ」、恐らく「ケ（ガ）」が古く「ノ」が新しい呼び方ではないかと考えられるわけです。「ケ（ガ）」と「ノ」を整理して行くと，なにか判るのではないかと期待しているわけです。今後、郷土研究クラブの生徒を使って，鹿児島県の場合、全国の場合の「ケ（ガ）」と「ノ」を比較してみようと思っています。また、2万5千分の1図で「ケ（ガ）」の付く地名がどういう所にあるか「ノ」の付く地名がどういう所にあるかを比較して、その立地を考え、どちらが古く，どの時代に地名の呼び方が交替するかなどを考えてみたいと思います。「ケ（ガ）」と「ノ」ということだけにしぼっても、地名研究の内容が深くなりそうな気がします。

（2）家（ガ）を意味するのではないかと思われるもの。山鹿というのは明らかに山家だと考えられます。

（3）滋賀県とか佐賀県とか，賀のつくところは、わりと湿地帯が多いのではないか。そのことから考えると、ガタ（潟）・スガ（須賀）は湿地を意味する呼称に当然落着きます。

（4）多賀城の多賀などは、明らかに漢字の知識が入って来てからのもので、目出度い地名のよび名を考えてもよいのではないか。

（5）カ⟶ガの転化もあるかというのは、オカとオガのような例。例えば遠賀郡。古くは尚の水門のよび名があります。佐賀という地名は，風土記ではサカ（栄）から来たのだとしています。それから、シカとシガはよく入れ替っています。タカとタガ、これは入れ替ることは余りないのではないかと思います。その次のヒラカとヒラガは、その可能性があります。ところで、ヒラカですが、これは焼物の種類の名前です。これも追いかけなければいけないと思いながら、一向に追いかけていないのですが。ヒラカとかミカとかミカツキとか、それから永山先生が一番最初に物袋（モッテ）というのを疑問にされましたけれども、あれはモッタイからの変化で、その前はモタイ。ヒラカとかモタイなどは焼物の産地から来た地名ということで，全国的に眺めようと思っているものの一つです。

次に、和名抄に「賀」がどれだけ見えるかということで，拾いあげてみました。まずアガというのが、備中国英賀郡、播磨国餝磨郡英賀郷、若狭国遠敷郡安賀郷、常陸国那賀郡安賀郷、伊賀国伊賀郡阿我郷、これだけあります。カッコでくくってあるのは、地名用語語源辞典がどういう解釈をしているかを出しておきました。西日本に多い海岸地名で南方語に関係するのではないかというのが鏡味完二という地名学を研究した人の説です。吉田東伍は県（アガタ）の略とみています。地名語源辞典の編者は「上る」の意で微高地と意味するか？ハガ（崩壊地）の転があるか？としています。ハガの意味はよく判りません。

アガについては，アガル・サガル、アガタ・サガタ、アタ・サタという対照的な表現があり，サガの対照語の可能性も考えられます。

その次、イガというのは、伊賀国伊賀郡、参河国額田郡位賀郷というのがあるのですが，和名抄を見ておりますと、伊賀郡に阿我郷というのと猪田郷というのがありますから、あるいは合成地名か、また逆に分割地名かなという疑問をもちました。地名語源辞典などによると、井・ガ（処）で，井戸のある処・水のある処という地名か、などの解釈がなされているようです。

その次、ウガ。出雲国出雲郡宇賀郷。これはウカと読むのか、ウガと読むのか

自信がもてません。神名はウカガミというようです。ウということに関しては、鹿児島弁で大崎（ウサッ）・大崎ヶ鼻（ウサッガハナ）など気になる表現をします。大を古くは「ウ」と読んだ時代があり、それが「オオ」と読むようになった変化があるのではないかを考えたりします。大（ウ）に対して、小（オ）と読むわけです。オオ（大）と読む場合には、コ（小）と読むのではないか。すなわち、大・小が、ウ・オ、オオ・コと比較された時期があったのではないかと考えるのです。というのは、宇賀（ウガ）という地名は1例ですが、現在、大賀（オオガ）という地名は非常に多いからです。

オガには※印がつけてありますが、これは延喜式の神名に出て来るものです。出羽国田川郡遠賀神社。その他、これに近いのが男鹿・牡鹿半島・遠賀郡です。これはヲカと同じ意味か。オガす（かき取る）の語幹で崩壊地形を意味するのか。

その次、カガ。加賀国加賀郡、出雲国嶋根郡加賀郡、下野国足利郡、これは葦の生えているカガ？　カガは津軽方言では芝の生えている所。平坦な草地、これは柳田国男説。カ（接頭語）・カフ（飼）から語源が来ているのだという説。鏡味完二説は摺鉢の方言から来たとしています。カケ（欠）の転、カ（欠）・ガ（処）、動詞カガる（掻）の語幹で崩壊・浸蝕地名をいうか、とか。ここらはあまりにも考えすぎているのではないかと思いますが、カガというのはよく判っておりません。

クガというのがあります。これは陸（クガ）で陸地の意味か、コガの転で空閑地をいうか、また崩壊地形を示すかなどの説があります。地名研究者は、地形地名というのにこだわりすぎている点が強いのではないかと思います。

その次、サガ。肥前国佐嘉郡、豊後国海部郡佐賀郷、備後国邑知郡佐我郷、出雲国楯縫郡佐香郷、常陸国茨城郡佐賀郷。

その次、シガというのもあるわけですが、近江国滋賀郡、陸奥国名取郡指賀郷、筑前国糟屋郡志賀（シカ）郷。これは、スガが変ったのか、東北方言では霧氷のこと、シ（石）・ガ（処）の意か、シガム（噛）の語幹で崩壊・浸蝕地形をいうか、シガラムと

関係する地名なのか、などの説があります。

2枚目に行きまして スガ。スガ郷というのも多いわけです。鹿児島県に須賀という姓もたくさんありますが、伊勢国壱志郡須可郷、下総国迦葉郡須加郷、下総国海上郡須賀郷、参河国幡豆郡修家郷。これはス（洲）・ガ（処）の形で海岸砂丘をさすか、スガフ（次）で段差のある地形か、スグ（直）の転で直線状の地か、スゲ；菅から菅生（スガウ）になるカヤツリ草科の植生地名か、これがまあ自然な解釈のような気がします。スガル（尽・末枯）で盛りを過ぎて衰えるの意から痩地をいうか。スガル（嵌）で嵌めこまれたような穴状の地形か、スカ（透）の転もあるか、スガスガしいから来たか、ス（栖）・カ（処）で神の居処か、富山の方言でスガム（曲る）か、同じく富山の方言で氷か、ス・ケ（ガ）という語形もあるか。

次にソガ。これは蘇我氏と関係があるわけですが、信濃国筑摩郡宗我郷、丹後国桑田郡宗我部郷。ス（洲）・カ（処）・サカ（坂）・サガ（険）・ソギ（削）・ソガ（処）などからと解釈されています。ソガという地名から蘇我という姓が出て来るのでしょうが、これは蘇我氏に関係ある地名と解釈せざるを得ないわけです。

その次、タガ。陸奥国宮城郡多賀郷、陸奥国行方郡多珂郷、常陸国多珂郡、近江国犬上郡田可郷、播磨国多可郡。延喜式の中にもそこにあげたような多賀という名の神社があるようです。（後掲レジュメ）　それで、タカ（高）に同じか、あるいは賀が多いとの瑞祥地名と考えた方が良いのではないか。食い違ったということから段丘・断層崖を示す地形名と解釈するのは、あまりにうがち過ぎだろうと思います。静岡県では方言で小溝のことらしいです。

次に、ツガ。下野国都賀郡、石見国邑知郡都賀郷。ツギ（継）と関係し、段差のある地形をいうか、ツガフ（番）で二つのものが対応した状態を示すか、ツカ（塚）の転か。栂の植生によるか。これが自然だろうと思います。

その次、テガ。常陸国行方郡提賀郷。現在でも手賀沼というのがあります。これもよく判りません。

その次のハガというのは、東北から関東にかけて多いようです。常陸国芳賀郡

芳賀郷、上野国勢多郡芳賀郷、下野国芳賀郡芳賀郷、陸奥国安積郡芳賀郷。ハガス(剝)の語幹か。禿(ハゲ)に関係あるかも知れませんが、よく判りません。

その次、コウガ。いわゆる伊賀・甲賀のコウガですが、近江国甲賀郡、志摩国英虞郡甲賀郷、河内国讃良郡甲可郷があります。柳田国男は、コウガ・カガ・カマカ・コーゲなどはすべて採草地だとしています。滋賀・三重・大阪の三地とも高燥地で、カガなどと全く同じ条件だとみています。これは、地名用語語源辞典に述べてあることです。

次のヤマガ。信濃国諏訪郡山鹿郷、信濃国小縣郡山家郷、筑前国遠賀郡山家郷があります。山家と書いてヤマムヘ・ヤマイヘと読むのが信濃と上総にあります。信濃国筑摩郡山家郷(也末無倍)と上総国周淮郡山家郷(也末以へ)です。筑後国御井郡山家郷はよみがふってありませんが、九州のものはヤマガとよみますので、これも恐らくヤマガと読むのでしょう。

その他、ガに近いものとして、オオカという郷名、アワガ・アイカ・アラカなどの例があります。和名抄の郷名でもこれだけあるわけですから、現存地名を引き出すと、もっと数は増えます。

結論的に申しますと、多賀山のタガは多賀神社を勧請したために付いた地名だと片付けてもよいわけですが、「賀」という地名一つを分析するだけでも、これは地名研究にとって大きなテーマが含まれていることを明らかにしたかった次第です。また、いわゆる所有格の助詞「ノ」と「ケ(ガ)」の転化が、どの時代になるということがもしつきとめられたら「ケ(ガ)」が付く地名、「ノ」が付く地名、ただそれだけである程度の時代的なとらえ方が出来るのではないかと、思ってみたりもします。そういう意味で、この地名は大事な地名であるとのとらえ方をしたいわけです。以上で、多賀山の説明を終ります。

〔質疑応答〕

江之口　先程、大・小の問題が出ましたけれども、古い時代は両方とも「オ」の訓みで、互換性があったのではないか。小も「オ」と読んだ……

江平　17番のこと。和名抄にあるかどうか判りませんが、日下(クサカ)などもあるんじゃないでしょうか。

平田　クサカですか。たくさんあります。クサガでなかったから、あげなかったのです。

江平　いや、カがあがっていたものですから。

平田　その他、カスガもありますし、アスカもあります。

江平　飛鳥のアスカは枕詞があったのではないですかね。春日のカスガも同様に。

平田　春の日がカスガに？

江平　飛ぶ鳥のアスカと------

平田　あれはいろいろな説があるけど、現実にはよく判らないのではないですか。

江之口　要するに、枕詞からむいているけれども、その本(もと)が判らないということです。

平田　今日は、質問があまり出ないようですが。

原口　一つ関心をもっているのですが、賀ということばは鹿児島ではケンゴとよぶものがあって、慶賀の字をあてています。非人・穢多・無宿・慶賀などが地名にどういうふうに刻まれているかは重要な問題なのですけども、先生のお調べになったのは出ていないようですが。慶賀はともかくとしても、そういう意味あいで出て来るのがあるのかなと思うものですから。その辺はどうですか。

平田　そこまでは、まだ感じておりませんけれども。

原口　いわば非農業民は移動しているわけですから、鹿児島の地名にどういうふうに印されているのかということ。そういう観点で地名を探って行かないと判らないのではないか。そういう関心も必要ではないか。

平田　当然それも踏まえてやります。

二見　11)のタガというので、タカ(高)に同じというのがありますが。

平田　これは地名用語語源辞典にそう書いてあるのですが、高いが多賀に変ったというものです。

二見　人の名前でですね、多賀夫と書いてタカオと読ましたりするのがありますが。

平田　読み方はカもあるでしょうし、ガもあるわけでしょうから。

二見　タカとのつながりは考えられないものでしょうか。

平田　高いところですか。

二見　高山（タカヤマ）というのは、あちこちにありますが。

平田　高山はたくさんありますよね。

二見　タカヤマとタガヤマは関係ないでしょうか。

平田　同じ場合もあるでしょうし、あえて賀と云った場合には、めでたいことが多いようにというか、そういう地名ということが考えられるわけですね。ただ単に濁ったのだと片付けられたら簡単なのでしょうが。

江口　この多賀山は少くとも多賀と書いてありますが、多賀大社は本来なになんでしょうか。

平田　武の神様。

原口　行脚（アンギャ）との関連で補足しますと、先程の安蛇水流を行者とされるのも同じ系統の考え方。行者、行脚。江戸時代は行脚とよんでおります。行脚は恐らく動詞に使っているのを間違えて使ったと思われますが、これは名詞ですね。そういう動く人に焦点をあてて、そちらの方で地名を見ているとですね、地名用語辞典の場合はなぜか地形とか状態的なものにとらわれすぎていて、非常に解説的なものを感じます。そういうことでなく、庶民的と云いますか、伝承地名と云いますか、ある人の育ちというか、そういう人の動きに関するものの方が地名では重要であるという、そのような関心を啓発されているのだなと、私は受けとめていたのですけど。ただ感想で申しわけありません。

平田　いえ、いえ。そういう視点をご指摘いただけたら、有難いのです。

原口　それからもう一つ。地名についていろんな説がある場合、どれを採るかということは、大抵の場合、解決しないわけですね。地名を考察することで、なにを明らかにしようかという目的意識の問題も重要だと思います。それはいろいろ進んでからでしょうが。

平田　確かにそうなんですよね。ここでカッコにくくってあるのは、ほとんど地名用語辞典の引き写しなんです。地名学者というのは、こういう解釈をしているのが主流です。私はこれではいけないのではないかという問題提起の意味で引用しているわけです。

原口　もう一つ。多賀山の方が起源が古いと云うことなんですけどね。一般には愛宕山の方が浸透していることについて、古いものの方が必ずしも、ずっと弘まっているというのではなくて、新しいものの方が残っていることに対して、規定性が強いというそういう動きの面でですね、ここを土地の人がそのように呼んでいるから、この地名の方が古いのではないかとする、いわば民俗学的な解釈に対する一つの警句になると思うのです。愛宕山の方が新しいのだけども、一般では多賀山、土地の人は愛宕山と呼んでいる。例えば、よその県でですね、土地の人は愛宕山と云っているから愛宕山の方が古いのではないか、まあ、そういうことを云う人は居ないとは思いますけども、そういう危険をですね、皆が学者であれば犯し易い。そう云ったことを、いろんな角度から、地名研究会で検討して行けたらと思います。

江平　愛宕山が新しいんですか。

平田　多賀神社の勧請が古くて、愛宕の方が新しいのではないかと思うのですが。愛宕信仰というのがこちらに入って来るのは、江戸時代になってからではないか。

江平　多賀山のずっと奥の方にある神社がありますよね。

平田　東福寺城跡の奥の方にあるのは摩利支天です。

江平　摩利支天。

平田　今後、老人に片っ端から聞いて歩かなければと思ってはいるのですが。

原口　その時代の内部の住民構成というのを無視は出来ないですね。どういう人達が住んでいたか、どういう人達が使っていたか。どの人が有力者で、だれが名付けたか。新しい場合もそれが云えるのではないかと思います。中世までは、それが判りませんが。

本田　その墓石はなにか一種の祠がありますか。

平田　現在は多賀神社に合祀されているのではないですか。

本田　昔のは、石で作った祠があるもんですよね。

平田　石の祠は残っていますよ、奥の方に。

本田　年号は書いてありませんか。

平田　そこまでは、まだ見ていません。

本田　私の村の墓石は二つあります。奥牟田の方にも一つあります。その三つの墓石がですね、どれもこれも同じ型のもので、明和七年八月の銘があります。三つとも同じ日に勧請しています。だから、その頃流行ったのではないかと思うのです。自分の村だけならなんですが、よその村のも同じ日です。

平田　一時間経ちました。これで前半を終りたいと思います。

Ⅲ 問題提起　小川亥三郎『国料という地名』

鹿児島県内に国料という地名がいくらかございます。そのうち、私が探し出しましたのが、そこに出しております7ケ所でございます。（後掲レジュメ）他にもあるかも知れませんが、まあ、これだけ探し出したわけでございます。宇宿町に上国料とか国料という姓が多いということは、以前から聞いておったのでございますが、二・三年前、宇宿町の字絵図を見まして、その中に字国料という地名があることが判りました。上国料という姓は、この字国料から起ったのだろうというふうに考えたわけでございます。この国料というところは、ほんとうに判り易いところでございます。宇宿小学校付近が字国料というところになっております。字国料はK田のある平地よりもちょっと3メートルぐらい高くなっておりまして、そのうしろはシラス台地になっております。そういう、いわば宅地でして、田圃はございません。そのような高まった宅地が少し続いております。その中に、上国料栄造という90才になる古老の方が居られまして、この方は以前教師をしておられたこともございまして、まだあの辺では知識階級でございます。この方に逢いまして、いろいろ聞いてみたところが、この小学校の付近は役所という別名があるんだと。役所という別の地名があるんだと。役所というのはなにかというと、江戸時代に庄屋の役所があった所だという話でございます。その上国料さんがおっしゃるには、国料というのは国の領地であったんじゃないかというようなお話なんです。全く、これは大変な地名だと考えたわけでございます。電話帳を調べてみますと、上国料姓がざっと36軒、国料姓が12軒ぐらい。これはざっとですけれど、大変多い姓でございます。

国料とは一体なんだろうか、ということでございますが、結論から申しあげますと、兵庫県春日町に国領という地名がございます。昔は国領村と云っておったようでございますが、町村合併で春日町の大字になっております。ここは古くは国料とも書いたそうでございます。国料と国領、発音が同じですが、字が違っておりますので、随時、混同して困るのでございますが、古くは料という文字を使って国料とも書いたのでございます。そうしますと、国料と国領、この両方は結局同じ意味ではないかということになるわけです。

国料、これは国衙料所の約であるといわれております。料所というのは領地のことでございますので、国料というのは国衙領・国領あるいは公領とも云いますが、これらと同じ意味ではなかろうかというふうに考えるわけでございます。国料というのは、まあ、荘園のさかんな時代に、国衙の支配を受ける土地を云ったのではないかと思われるわけでございます。ただし、国衙の支配と申しましても、いわゆる一円公領とか、あるいは薩摩の方で島津御庄寄郡というようなことで単独なものもありましたので、そう完全な支配を受けていないという所も多かった

のではないかと思います。薩摩国図田帳では公領の文字を使い、大隅国図田帳では国領の文字を用いておりますが、これは執筆者の好みによって違ったのであって、意味は同じということになるわけです。

宇宿町の地形をちょっと申しあげますと、北と南はシラスの台地でございます。その間にかなり広い平地がございます。その平地は全部水田でございました。ところが最近は宅地が非常にたくさん出来ております。そのシラス台地の下に点々として集落があるわけでございます。宇国料も、そのようなシラス台地の下にあって、水田はないのです。江戸時代には庄屋の役所があったわけですから、まあ、江戸時代からやはりそういう宅地であったんじゃないかというふうに思われるわけです。建久図田帳を見ますと、耶々散在という文字が出ていますが、公領とか庄園とか云いましても、一箇所に百町歩とか二百町歩というようなふうに固まっておったんじゃなくて、散在しておったのを合算した数字であるようです。

国料という地名、やはりこれは中世荘園の地名ではなかろうかと考えるわけでございます。中世史については全くの素人でございまして、判りません。皆様方のご教示を得たいと思っている次第でございます。

2番に行きまして、鹿児島市坂元町国料という集落がございます。その集落の中に、また字国料という小字もございます。今朝ほど川内の方と話があったのでございますが、国料は別名コクユーとも発音しております。川内の国料もコクユーと発音しているそうでございます。本田先生のお話によりますと、料というりの音は鹿児島県では出しにくいので、これがコクユーと訛ったのだろうということでございました。たとえば有馬をアイマというのも、その例であろうということでございました。

ここは谷間の傾斜地でございまして、V字形をした傾斜地。この傾斜地に、階段状に集落がございます。田圃はもと一反歩ぐらいあったそうですが、現在は宅地になっておりますから、そのような畑も田圃もないような狭ぐるしい処に集落がございます。国料鎮守神社という神社もございます。これは明治初年には稲荷

神社と云っていたそうでございます。農業の神様ということでございます。これは江戸時代の享和二年に勧請されたそうでございます。国料公民館という公民館もございまして、小なりと雖も一つの集落の形をなしております。こういう所でどうして生活しておったのだろうと考えますと、この台地の上には平地がございまして、いわゆる原(ハイ)、紫原(ムラサッ、バイ)の原でございます。そこに畑がございまして、そこにのぼって畑を耕しておったのでございます。いずれにしましても、どうしてそんな谷間の狭い所におったかと云いますと、台地の上は水が乏しいし、井戸も深いし、干ばつにあったら水がきれるというんで、実際は住みにくかったのではないか。それで、谷には谷川があるし、湧き水があったり、まあ、井戸も浅いというようなところで、谷間に住んでいたんじゃないかと思われます。国料という姓はございませんが、坂元町や吉野町には二・三軒ございます。

貧しい地形のところに、国の領地がどうしてあったのか。こんな所を国衙が領地として取ったんだろうかというようなことがございまして、非常に謎があるわけでございます。これは、後ほど申しあげることにいたします。

次に、3.の川内市大小路町字国料。これも、コクユーとも発音するんだそうです。現在は宅地と畑と半々でございますが、もとは畑であったそうでございます。これもまあ、古代や中世の頃はどうか知りませんが、とにかく畑地でございまして、田圃はなかったようでございます。

4番目に、姶良郡隼人町大字小田字国領畑。これは領地の領を書いてございますが、これも同じ意味ということで、そこに入れております。文字通り、畑でございまして、現在は宅地も出来ております。畑もございます。田圃はございません。此処に、西国領という姓の人が居ります。

5番目に鹿児島市中山町。旧谷山市大字中というところがございます。ここに山之園という部落がございまして、そこに字国料平という地名がございます。ここは山裾の緩傾斜地で、棚田がございます。国料姓が一軒ございます。この部落

は新開地ではございません。古くからの農村部落でございます。ここは田圃があるわけです。

6.指扇郡豊入町大字中名字国料。これは図の裏にございまして、細長い水田になっております。ここから五へ六百メートル離れたところに御領原（ゴリョウバイ）というところがあります。川を挟んで、両方相対しておるような格好でございます。国料、国衙の領地に対して、御領というのは庄園でございましょうが。誰の庄園であったかよく判りませんが、島津庄であったかも知れません。御領原という集落がございます。

それから、出水郡高尾野町大字柴引字国料という所がございます。高尾野の麓部落の北のはずれに、紫尾神社という神社がございます。そこの近くに、立派な水田がございます。そこが国料になります。集落のあるところは台地になっており、水田のところは低くなっております。昔から水田だったと見られました。

これをまとめてみますと、水田のない所が4ケ所、水田のあるところが3ケ所。むしろ、水田のない所の方が多く、数百年前の地形と現在の地形と同じとは考えられませんけれども、たとえば坂元町の国料なんかは谷間でございまして、昔から田圃はなかったようなところでございます。国の領地ともあろうものが、どうしてそんなあまり価値のないようなところにあったのかというのが、疑問に思ったのでございます。これもよく判らないのでございますけれども、まあ一応考えてみますと、荘園もはじめの頃は水田を主体にしているようでございますが、しまいには水田も足らなくなって、原野・山林なども庄園に取り込んだようでございます。国料の場合も、そういうルーツがあったんじゃないかというふうに想像される次第でございます。

次に山田文書。これは鎌倉時代のものですが、これをちょっと見てみますと、「谷山郡注進文永九年分水田神田寺田取帳事」というのがございます。「三月廿七日、後迫国領七段ばかり、黒丸五段ばかり」というのがございます。後迫（うしろざこ）というのはどこかと申しますと、旧谷山市大字中に字後迫という地名

が現在もございます。多分そこだろうと思います。そこに国領があったわけです。「黒丸五段ばかり」これも如はり黒丸の国領が五段ばかりという意味ではなかったかと思います。黒丸という地名は現在はございませんが、字黒土田という地名はございます。これだろうと思うのです。黒丸の丸、丸というのは田圃を意味します。土が黒かったので黒土田とか黒丸と云ったのではないか。それから「こんけ宝田」というのがありますが、恐らくこれは権現堂田ではなかったか。これの誤記か誤字ではなかったかと思います。これが五段。「田薗十段、うすく」、昔は字宿は「うすく」と発音しておったのでございます。「薗畑一段廿歩ばかり、如見三段ばかり」、如見というのは妙見の誤記ではないか。宇宿には妙見神社という古い神社がございます。これは桓原氏が建立したんじゃないかと云われておりますが、この妙見神社の田圃が三段ばかりということじゃないかと思います。「寺田三段ばかり、うすくの国領五段ばかり」、うすくが、こうダブっているのでございましてよく判らないのですが、とにかく、この鎌倉時代には国衙の息のかかった田圃が谷山郡にはあったと、現実に国領であったということが、これで判るんじゃないかと思います。ちなみに山田氏というのは、島津家第二代の忠時の庶子忠継をもって、その祖としておるわけでございます。これが谷山郡の地頭職をもっておりまして、二代が忠真。忠真に三人の子がおりまして、長男が土用熊丸、これが谷山郡の地頭職を相伝します。二男の宗久が山田村と上別府村の地頭職を相伝します。三男の直久が宇宿村の地頭職を相伝しておったようでございます。七代の忠尚が有名な山田聖栄自記の著者でございます。

次に、旧記雑録前編（二）にございます「萩原某宛知行目録」。これは室町時代のものでございますが、この文書は入来院家の家臣田中氏の所蔵という註が付いております。「谷山中村の内」、この中村というのは、旧谷山市大字中のことでございまして、山ノ薗部落という部落がございます。これは、まあ三十軒ぐらいの小さな部落ですが、新開地ではなくて古い集落でございます。「四反西田ふる川、四反こくれうのうと」、ここに国料が出て来るわけです。先に申しましたよ

うに，宇国料平という地名がございますので、この辺ではなかろうかというふうに考えます。それから「四反めくり町」。「めぐり」という字は，現在も巡町がございまして，巡航船・巡査の「巡」の字を書いております。「五反、ほしく田」。「ほしく」は星久という字を書きます。星久田という字名が現在もございます。それから「ほり町」，これは現在、堀之内とか水堀とかいう字名がございますが、そこではなかろうか。「ほり町薗田五反、浮見三反、まへ田」、前田という地名も残っております。「以上二町四反、長禄五年二月廿五日、萩原殿」。これを見ますというと、室町時代の頃は、国の領地というものは実体がなくなーって、地名だけになっているようでございます。

それから、次のNo.2のページに参りまして、「宇宿町妙見神社境内水神碑」というのがございますが、「壬寅之春」、これは天保十三年のことではなかろうかと想像しております。「役人、町田吉兵衛、庄屋、吉利六郎兵衛、同、梶原年之助」、庄屋が二人居ったようでございます。この庄屋が勤めておった役所が、つまり、宇宿小学校付近の役所という地名の所にあったわけです。「名主、浜田門、六右衛門。国料門、小兵衛。□重門、甚兵衛」となっております。名主は名頭のことだろうと思います。浜田門というのはどこかと云いますと、海岸の方の国道付近を、現在も浜ン田（ハマンタ）と云っておりますから、あの付近ではなかろうか。国料門は、いわゆる宇国料。小学校付近に国料門という門があったようでございます。□重門、これはどこか判りません。つまり宇宿にはこの三つの門の他にもいろいろあったんでしょうけれども、この水神碑に関係のあるのは、この三つの門であったと思います。上国料・国料という姓は、つまり、この国料門という門名を明治になってからとって付けたのではないかと感ずるわけでございます。

以上でございますが，国料という地名は、鎌倉時代には実体があったけれども、だんだん実体がなくなって地名だけになり、江戸時代には門名となってしまったということを、これで一応示したつもりでございます。実は判らないことが多く、

皆様方のご教示を得たいと思っている次第でございます。

〔質疑応答〕

肥後　どうもありがとうございました。質問をお願いします。

江之口　当時とは地形が違っておりますし，また状況も変っているので一概には云えないと思うのですけれども、水田なし4ケ所・水田あり3ケ所とのことなんですが、その辺はどうなんでしょうか。やはり、国領となれば、もともとは田圃だったでしょうから。その地形が、昔は田圃だったかも知れんということなんでしょうか。

小川　まことにごもっともなご意見で、私もそこのところは判らないのですけれども、坂元町の国料なんかに行ってみますと、全くの谷間で、V字形の傾斜地でございます。田圃も一反歩ぐらいは昔あったというほどの、田圃もないようなところです。たしかに、昔も今も田圃はなかったんじゃないかと考えられる所もございます。それから、宇宿町の小学校付近。ここも、どう見ましても田圃があった形跡がございませんので、解釈に苦慮しているわけでございます。

江之口　これは全くの素人考えなんですけれども、国料という地名が起った背景ということですが、律令が守られておれば、別にそういう名前が生まれるはずはないと思うのです。国料というのは、いわば皆、国領ですから。荘園の力がだいぶ強くなって来るのと反比例して、国の領地が狭められる。そうなると、荘園主と国の力の釣合いというか、その関係になると思うのです。国領は本来良い田圃でなければならないけれども、荘園とのいろいろな問題に巻き込まれ、荘園の方が強すぎて、国料は谷間の方に追いやられてしまった、と。今、ちらっと、そう考えたんですけど、いかがなものでしょうか。

小川　そういうことも考えられると思います。荘園の力が強くなって、国領がだんだん隅へ追いやられるということも、確かにあったのではないかというふうに思います。

池田　川内の国料ですが，周囲は下田か下々田ばっかしなんです。古い文献

から見た場合、畑とか田圃です。地籍図にあります畑・田圃、みな下々田か家畑が多いんです。

江之口　最初、別名役所ということをおっしゃったんですけども、ちょーとうがちすぎ、考えすぎかも知れませんが、田所（タドコロ）というような性格の場所ではなかったのでしょうか。単に江戸時代でなく、もっと古い時代に由来する地名としてそこでは使われていないのでしょうか。江戸時代の役所ということなんでしょうか。

小川　そういう話は聞かなかったのですが。実際、役所という地名は県下のあちこちにございまして、大概、江戸時代の庄屋の役所があったところです。指宿にも、国分にも役所という地名があります。国分郷土誌を見ますと、庄屋役所というのが、あちこち出て来るようです。恐らくこの役所というのは、江戸時代の庄屋の役所ではなかったろうかと考えております。

江之口　何故そういうことを質問したかと申しますと、ここにいらっしゃる富永先生が川内の中郷で、田所という俗名を拾ったわけです。地元の人に聞いてみると、役所があったというのです。田所となると、そうとう古い地名ですから、今ちょっと役所を聞いてですね、それがそこまで遡るものかどうかと不審に思ったものですから、聞いたのですが。

中村　宇宿の国料ですけど、私もあそこの国料さんという方を知っているのです。脇田の電停から30メートルぐらい鹿児島寄りに最近鉄筋の三階建を建てられたのですが、あの方、国料さんという方なんですがね。あの辺も国料と云ったのではないかということと、ちょっと考えるんですけどね。それから、あそこは脇田（ワキダ）という地名です。これもちょっと引っかかるんですけどね。それが、いつ頃から脇田という地名が始まったか判りませんけども。その役所は小学校の敷地ぐらいだったかも判りませんけれども、田圃はあの下にもあったのではないかと、ちょっと想像ですけれども、考えます。今の国料さんは、そこに居るのですね。下の方にですね。それと、もう一つ。今、こちらの方が云われたことですけども、私は全部田圃ではなかっただろうと思うのです。すべて田圃で解釈する必要はないのではないか。畑もかなり入っていると基本的に考えます。

小川　ああ、そうですね。まあ、はじめは良い田圃の所ばかり取りこんでおったのでしょうけれども、しまいには田圃も足らなくなって山林原野まで取りこんだのではないかと思います。

江平　地名はだんだん小さくなったり、移転したりしますから。だんだん田圃がなくなっても、国領に関係された人の住まいが地域を狭められて行ったんじゃないかと思います。

小川　そういうことも考えられますね。もっと広かったのだけど、狭くなって行ったと。

江平　中世文書の国料が今も小字に残っている。これは文献的にも較差が判って面白い気がします。

原口　国御領・公領というと、なにか今給が、水田みたいなものを制度的なものに考えているようですが、そうなんでしょうか。班田収授法はそうだったかも知れませんけれども、公領というと、まあ、貢課の単位は水田にあるかも知れませんけれども、南九州で公領を水田だけで片付けて良いか。今の基本的には畑を含めて公領と考えておられるということ、そういうことでよろしいでしょうか。

中村　はい。

原口　しかし、畿内なんかを考えると、班田収授法による限り、水田を主体とした、そんな感じですが。そうしますと、「領」はこの辺境の方に見られるわけですね。

中村　田圃と畑をですね、簡単になかなか比率は判らないのですけどね。例えば、これは全然参考にはならんと思いますけども、現在の耕地に対する水田率ですね、耕地に対する水田率を日本全国調べますと、鹿児島県は水田率が33%なんです。ということは、畑地が2倍あるんですね。畑地2に対して水田1。西日本で一番低いのです。これは、先進地域であるかつての畿内ですね。畿内も現在

は様子が違いますから全然参考になりませんが、仮に統計だけを見ますとですね、現在でも五畿内と云われたところは、まあ、京都・奈良・大阪・兵庫ですね、この4府県をとってみると、いずれも水田率が70%を超えているのです。古い資料が全然ありませんから、現在の資料をただちょっと持出しているだけですけども。私はあんまり水田ばっかりという必要はないのではないか。国供領だから、もともと水田だったということも、僕はそう支持しないのですけどね。もともと畑もあった。そういう考え方なんですけども。

――― テープがセットされておらず若干記録脱落 ―――

南　先程の慶賀についてですが、「けいごふでん」というような読み方はありませんか。

小川　「けいごでん」ですか。

南　「けいごふでん」じゃないでしょうか。重永の畑。

小川　「けいご」　そういう小字がありますか。田圃じゃないでしょう。

南　畑です。

小川　福岡市に警固町というのがあります。あれと、同じ系統だろうかなと思っているんですがね。なにか、よく判らないのですけども。

中村　この妙見神社の碑に見える梶原さんというところは、勝田からずーっと入って行ったところに、今でもあるのですね。梶原という地名が。

平田　梶原迫というのがありますよ。

中村　あの辺は、水田があると思うのです。

小川　梶原姓がかなりあるようですね。神社は梶原氏がもって来たんじゃないかというような伝承があるようです。

江平　図田帳は全部水田ですわ。水田の面積。山田文書のこれもやはり水田の面積。

小川　そうですね。図田帳はほとんど水田ですね。

江之口　図田帳では、薩摩国は公領で、大隅国は国領の文字の使いわけがあ

るということは、これで初めて知った恥ずかしい話ですが、どういうことなんでしょうか。

小川　これは意味が同じ。

江之口　意味は同じですが。

小川　執筆者が違うから。これは執筆者の好みにそって、そのように書かれたということです。

原口　この史料は江戸時代と室町時代の違いがありますけども、料と書いた場合は私領ではなくて律令的な国家に区分する公領という意味で、料と領とは明らかに江戸時代においては字の使いわけがあるようになっております。天領と云った時には領で、直轄領・幕府領に関しては領は付いて来ない。そういう違いが江戸時代には認められるのですけども。その前がないわけですね。

江平　室町時代の御料所は。

原口　それはもうだいぶフューダリズムの領であって、私領地としてのよび名ではないかと思うのですね。そういう理解、いわゆる諸代の御料献上、料所というのは、そういう中でですわ、室町時代の料所を捨てて、江戸時代の料所。そこにはないと思いますが。それから天領。天領ということばは、江戸時代にはないわけです。そういう中で見ますけども、それと、律令時代の領と混って来るんですけども。

江平　それから、もうひとつ。薩摩国図田帳には国領の名前があります。公領というのも使いわけてあります。

小川　ああ、そうですか。

平田　中世文書にですね、「うすく」と平仮名で書いたものの他に「うすき」と書いたものはありませんか。全部「うすく」ですか。

小川　そこまでは調べておりませんけれども、私が見るところでは「うすく」となっているようです。

平田　そうですか。「うすく」が「うすき」に変ったのは、わりに新しいと

いうことになりますよね。そこで、この前の江平先生の「くびれ」「きびれ」「きびれ」という説、「く」と「き」の変化というのは、「うすく」と「うすき」の例があり、「くびす」と「きびす」の例があるわけですが、他に調べたら、なかなかないんですよね。

小川　市来（いちき）というところがありますよね。これは、中世の文書では「いちくの院」と発音しているようですね。

平田　仮名で書いてありますか。

小川　「いちくのゐん」と。

江之口　角川地名大辞典を見る限り、文献は皆「うすく」なんですね。応永の頃まで「うすく」で通っているようです。それが、まあ、この字を使って読みづらいので、「き」と読むのは割りに新しいのではないでしょうか。

平田　なにが？　「く」から「き」に変るのが？

江之口　「うすく」で出てるようです。「き」という読みは新しいのじゃないかと思います。判りません。

江平　指宿は、やっぱり「すき」だったんですかね。

平田　古くから「いぶすき」でしょうね。たまたま、同じ宇宿と書いて大島の方は「うしゅく」と読み、鹿児島では「うすき」と読む。一般に大島の「スク」は、こちらの「スキ」だというような解釈がなされているんですけどね。この前の江平先生の「くびれ・きびれ」で、私は和名抄を全部引いたのですが、転化しているという例はほとんどないのです。「び」から「ひ」に変ったとして「きびれ」と読む可能性も否定は出来ないのですが、「比（び）」と読んだ地名は現在も「び」と読んでいますし、「ひ」と読んでいるのは、現在も全部「ひ」と読んでいるわけです。それから、「く」と読んでいる地名が「き」と変っているのも、そんなにありません。それでね。

江之口　地名というのは難しいから、まあ、そう結論を。いろんなのを考えるということで良いんじゃないでしょうか。いろいろ辞典なんかも読んでみますけれども、他に問題がないかというと、もう、むしろ正解というか、定説の方が少なくて、ほとんどもう、なんと云いますか、辞典という性格で無理にこじつけたのも多いので、そういう意味ですべての地名についての考察というのが始まったのはまた新しいですし、一部の地名についての研究というのは昔からあっていたわけですけど、小字全部を対象にした研究というのは最近はじまったばっかりで、その辺の可能性を最初から狭めなくて広げていけば良いのではないでしょうか。

江平　文字につられて「きいれ」となったら、どうでしょうか。

本田　宇宿の正しい現在のよみはなんですか。

小川　なんですか

平田　現在は「うすき」か「うすく」かということです。

小川　現在は「うすき」

本田　「うしゅく」・「うすき」？

平田　「うしゅく」とは云いません。

本田　「うすき」

小川　そうです。

平田　宇宿（うしゅく）小学校とは云いません。宇宿（うすき）小学校です。

中村　大島の貝塚は「うしゅく」ですか。

平田　大島のは宇宿（うしゅく）貝塚です。

原口　大島の宇宿（うしゅく）と鹿児島の宇宿（うすく）が関係があるのかどうか、全くの疑問だと思うのですけどね。たとえば、本土の場合の宿（しゅく）というのは宿（しゅく）です。宿には別の意味があるわけで、仮設の宿（しゅく）から来ている。そう云った非農業民の居住・往来との関係を指摘されていますし、ですから、宇宿の宿（しゅく）という漢字には、そう云った可能性もやはり考えられます。指宿を指でさした宿であるとか、そういうような宿（やど）という、今の感じでね、そうした旅行をした人はいないわけで、やっぱり生業を荷っている人にとっての宿（しゅく）である。それから、湯がたくさん出るから湯富宿

（ゆぶしゅく）とか。それはまあそのような解釈でなくて、そう云ったことでなくて、移動する人々にとっての宿（しゅく）という可能性があるのではないかと思うのです。先程の山川町の「けんご」というのは、どんな漢字を書いてあるのでしょうか。

南　片仮名で書いてあります。二つあるんですよ、大字ごとに。今一つの大字にも「ケイゴ」があります。一方は片仮名の「ケイゴ」、もう一つの方は、たしか「慶固」という字が書いてあるようです。

原口　警固番役の警固ではないのですか。

南　いえ、警固ではなく、慶固。県の地名辞典にも出ています。

永山　ちなみに、谷山に慶児という姓があります。慶児と慶固の二つあるようですが。電話帳にもその苗字が載っています。

江平　山川の「ゴ」は「固」ですか。

南　「固」です。

江之口　今、原口先生のおっしゃった地名というのは、たしかに鹿児島にもあります。これは地名ではないのですけども、政所と書くものがあります。いわゆる政治のつもりであったんですけども、決して政所ということでなく、地元で聞いてみると、魔所のようなんですね。魔の所というようなふうに地元では解しています。その神様を「ケイゴの神さあ」と云っております。それ以外に、警固というのは、角川地名大辞典のカードの中で、ちらっと見たような気がします。やっぱり、そう云ったものも調べてみる必要があると思います。

原口　それから、先生。山ノ薗門の田圃はせいぜい一反か二反かなんですけれど、全部水田ですか。

小川　そうですね。

原口　谷山に御領という地名はありませんでしょうか。南高校近くあたりに。これは記憶違いかも知れません。これは、前に話題にのぼりましたが、国料平が緩傾斜地であるというのは、これに合うような気がしております。もう一つ、役

所というのは大体役所の所在地だと思うのですが、これは徳之島でも一緒ですね。島役人が居た所を、曽（あっかい）単位に役所（やくじょう）と呼んでいるようです。もちろん、亀津に仮屋がありますけど。あちこちに、島役人のいたところを役所と。

永山　今、御領というのが出ましたが、御領と国領。御領園・御領という苗字はあちこちにたくさんあります。それで、国料・御料園という苗字もありますが、なにか関係があるでしょうか。

小川　御領というのは荘園のこと。島津御庄・殿下御領とかいいます。国料は国衙の領地のこと。

江平　県議会にも、御領という議員がおられます。

本田　政所というのは？

江平　領家とか、古い苗字がありますね。

原口　それは荘園の領主、支配者の領家ということでしょう。

江平　トラックの横に付いている苗字を見ていると、よくそういうのがありますね。あー、これは地名との一つながりがあきなあと思って見ています。（笑）

原口　鹿児島はそういう意味では、机に坐っているより、あっちこっち歩いた方が勉強になりますね。どこに行っても退屈しません。それからもう一つ。No.2の史料に出て来る名主を「みょうず」とお読みになったのは、これは門の名頭（みょうず）という意味ですか。

小川　これから見ますと、普通は名頭と書いてあるんですけれど、名頭の語源はこの名主（みょうず）から来ているのではないかと考えたんです。

原口　それはそうだと思うのですけれど。名主（みょうしゅ）が江戸時代には村役人、他所で云えば名主（なぬし）と云ってます。もう一つ、名主（なぬし）というのがありますね。江戸時代の薩摩藩では庄屋までが武士役で、方限（ほうぎり）毎の長が名主（なぬし）となっております。その名主ではないので、これを「みょうず」と読まれたのかなと思いまして。

小川　浜田門とか国料門の名主ですから、「みょうず」の意味だろう。これは字を間違えたのかどうか知れませんが、やっぱり、これは「みょうず」、「乙名（おつな）どん」というものだろうと考えるのです。名主（なぬし）ではないと思うのです。

原口　名主（なぬし）は別に居るのに、これを名主（みょうず）と書いた？

小川　これは書き間違えたのか、それとも、名頭の諸源はびょっとしたら名主（みょうしゅ）かなあと。

原口　それはそうだと思うんです。でも、この天保の時代にですね。名主（なぬし）という方限の長が明確に居るのに、間違えるような可能性は多分少ないわけですね。名主（なぬし）さんは、だれそれというのは判っているわけですね。それなのに、その門の乙名である名主（なぬし）を張りつけたのでしょうか。そういう可能性はほとんどないと思うのですけど。別に名主（なぬし）という職制がなければ問題はないと思うのですが、地域に居るわけです。それで、私は知らないんで、国料さんが名主家か、どういう方限になってるのかが判れば、はっきりするとは思いますが。でも、この書き方だったら、先生のおっしゃるように、「みょうず」ですね。

小川　この書き方では、やっぱり「みょうず」と納得した方が良いように思いますけど。ちょっとした昔の石碑なんかを見ますと、誤字が多いようですね。庄屋が二人居ったというのは、どういうことでしょうかね。輪番でやったのでしょうか。それとも、先輩・後輩みたいなことだったんでしょうかね。

原口　大きな村では、庄屋が二人ぐらい居ることはあります。

小川　ああ、そうですか。

原口　妙見神社がそんなに広い信仰を集めていたんですかね。二人居ても、おかしくはないわけです。大抵そうではなかったかなと、ちょっと思うのですが。

小川　古いところは分散していたんでしょうね、地域は。

原口　地域はもちろん分散していると思うのです。それは、どうでした？

たしか、大きな村では、庄屋一人でなくても良いのではないかと思うのですが。

本田　大体、一門というのは二町数反でしょう、田舎では。三町ないですよ。それがはみ出したら、一つ作らねばしょうがない。たとえば、五町あったら二つ作らんといかんのです。その場合、一方を国料とおって、一方を方言で「コクユー」、どうですか。

江之口　えーと、話は飛びますが、小川先生のところに敷料というのがありますね。あれは、なんですか。

小川　私の解釈ではですね。敷領は、開聞新宮という大きな神社がありますが、あそこの領地だったらしいのですね。

江之口　神領・神田ではなくて、敷領なんですか。

小川　宮司職という職名があったようですがね。宮司職の料地ではなかったかと、解釈しとるんですがね。

江之口　字が違うわけですね。

肥後　意見も尽きないようですけれども、時間が参りましたので、この辺で終らせていただきます。

No. 1

国料

小川文三郎

(1) 鹿児島市宇宿町字国料　宇宿小学校付近　宅地とシラス台地

別名役所

国料とは　兵庫県春日町国領は古くは国料とも書いた。国料は国領と同意か。国料は国衙料所の約、料所は領地・国料は国衙領・国領・公領等と同じ意味で、荘園時代、荘園に対して国衙の支配を受ける土地をいったか。鎌倉時代

薩摩国国田帳は公領の文字、大隅国国田帳は国領の文字を多く用いている、

宇宿町の地形、字国料に水田はない

(2) 建久図田帳に「郡々散在」の文字がある。国料は中世の地名であろう

鹿児島市坂元町国料（集落）・字国料　谷間の傾斜地、宅地、山林

水田はもと一反位あったが今は宅地、国料鎮守神社（明治初年稲荷神社）、

享和二年（一八〇二）勧請　国料公民館　国料姓はない、坂元町・吉野町にあり

(3) 川内市大小路町字国料　宅地と畑半々、もと畑地

(4) 姶良郡隼人町大字小田字国領畑　宅地・畑　西国領姓あり

(5) 鹿児島市中山町（旧谷山市大字中）山之園部落　字国料平

山すその緩傾斜地で棚田・国料姓一軒

(6) 揖宿郡喜入町大字中名字国料　岡すその水田　国領原と対す

(7) 出水郡高尾野町大字柴引字国料　立派な水田

まとめ　水田なし　四か所　水田あり　三か所

山田文書（内鎌倉時代のもの）

谷山郡

注進文永九年（一二七二、鎌倉）分水田神田寺田取帳事

三月廿七日

後迫国領七段ハカリ　黒丸五段ハカリ

こんけ宮田（堂？）五段　田薗十

うすく

国領一段廿八カリ　如見（地？）三段ハカリ

寺田三段八カリ　うすくの国領五段ハカリ

旧記雑録前編(二)

萩原某宛知行目録（室町）

谷山中村の内（旧谷山市大字中）

山ノ園ノ門（今山之園部落）

四反　西田ふるい

二反　これうのうと（字国料平付近か）

四反　めくり町

五反　ほしく田

一反　ほり町　出き田　薗田

五反

浮免　三反　まへ田

長禄五年（以上二町四反）二月廿五日

萩原殿

No.2

宇宿町妙見神社境内水神碑（鹿児島市史Ⅲ）

（天保十三年か）壬寅之春　中略

役人　町田吉兵衛　庄屋　吉利六郎兵衛

同　板原年之助

名主　浜田門六左衛門

同　料門小兵衛

□重門甚五衛

〔多賀山〕（タガヤマ）

1. 旧名、浜崎（浜ケ崎）、東福と号す。第16代島津義久が、天正7年（1579）、近江国犬上郡の日之少宮多賀神社を勧請。

2. 「～ガ」の地名・姓は多いが、意味不明。

① 斑鳩・蘇我・春日・（飛鳥）　②伊賀・加賀・駿河・多賀城

③ 佐賀・滋賀　④ 伊賀・甲賀　⑤ 尾賀・古賀の森

1) 所有・指示を示す格助詞 …… 浜ケ崎・山ケ野・松ケ崎 etc.
2) 家（ガ）を意味するもの …… 山家・山鹿 etc.
3) 湿地を意味するもの？ …… ガタ（潟）・須賀
4) 賀（ガ）を意味するものか？ …… 多賀？
5) カ→ガの転化もあるか？ …… オカ（オガ）・サカ（サガ）・シカ（シガ）
タカ（タガ）・ヒラカ（ヒラガ）

「倭名抄にみえる～賀地名」　（※印は延喜式神名）

1. アガ —— 備中国英賀郡、播磨国飾磨郡英賀郷、若狭国遠敷郡安賀郷、常陸国那賀郡安賀郷、伊賀国伊賀国阿我郷。

西日本の海岸に多い地名。南方語に関係する（鏡味完二）
「景（アガタ）」の略（吉田東伍）
「上る」の意で、微高地を意味するか？ ハガ（崩壊地）の転？（柳原）

2. イガ —— 伊賀国伊賀郡、参河国額田郡位賀郷。

阿我郷・猪田郷 ＞ 伊賀郡。合成地名？ 分割地名？

3. ウガ —— 出雲国出雲郡宇賀郷。

大神が女神を伺ったところに由来（出雲国風土記）
穿（ウガツ）の語幹で、崩壊地形・浸蝕地形を示すか？（柳原）
宇賀神を祀ったところか？（柳原）

4. オガ —— ※出羽国田川郡遠賀神社　男鹿・牡鹿・遠賀（→オンガ）
筑前国遠賀郡

ヲ（峰）・ガ（処）で、ヲカと同義。オガス（かき取る）の語幹、または
ウギ（穿・剥）の転で崩壊地形をいうか？（柳原）

5. カガ —— 加賀国加賀郡。出雲国嶋根郡加賀郷。（下野国足利郡）。

①芝草・芝生・芝原（津軽方言）②平坦な草地。カ（接頭語）・カフ（飼・生）が語源（柳田国男）。③摺鉢地形。スリバチの方言カガス（島根）から。（鏡味）④露出した岩。カカラの語幹からか（鏡味）。⑤カケ（欠）の転、またはカ（欠）・ガ（処）、あるいは動詞カガル（掻）の語幹で、崩壊地形・浸蝕地形をいうか。⑥加賀国の伝播地名。

6. クガ —— 周防国玖珂郡玖珂郷。

①クガ（陸）で「陸地」の意か。②コガ（空閑）の転で「空閑地」。③クガス（転）の語幹で崩壊地形を示すか。④ク・ガ（処）という地名か。

7. サガ —— 肥前国佐嘉郡、豊後国海部郡佐加郷、備後国邑治郡佐我郷、出雲国楯縫郡佐香郷、常陸国茨城郡佐賀郷。

日本武尊が栄之の都と称したことに由来（肥前国風土記）
神が酒を醸したことに由来（出雲国風土記）
「坂」の意、つまり「傾斜地」をさすものと考えられる。
サガと濁るものはスガと同じで、砂丘地を指す説もある。（柳原）

8. シガ —— 近江国滋賀郡、陸奥国名取郡指賀郷、筑前国糟屋郡志珂郷。

①ス（州）・ガ（処）の転。州処、つまり「砂州のあるところ」。（鏡味）
②氷・霧氷の方言（青森・福島など）。樹氷をいうか（山中襄太）。
③シ（石・磯）・ガ（処）の意か。漁民・海士・漁業地・島・岩礁など。（松尾俊郎）。④シガム（噛）の語幹で噛みとられたような状態、すなわち崩壊地形・浸蝕地形をいうか。⑤シガラム（柵）と関係し、「からみついたような状態」・「柵堤で川をせきとめた所」・「（何かで）防ぎとめられた所」などをいうか。

9. スガ —— 伊勢国壱志郡須可郷、下総国迦毘郡須加郷、下総国海上郡須賀郷、
参河国幡豆郡修家郷。

①スカに同じ。ス(砂・洲)・ガ(処)の形。小規模な海岸砂丘や河岸砂丘を指す語。②スガフ(次)の語幹で「くい違う」意から「段丘・段差のある地」をいうか。③スグ(直)の転で、「直線状」の地か。④スゲ(菅)でカヤツリグサ科の植生による地名か。⑤スガル(尽・末枯)の語幹で、「盛りをすぎて衰える」の意から、「瘦地」とか「尾根がつきる所」などをいうか。⑥スガル(嵌)の語幹で「嵌めこまれたような地形、穴状の地」をいうか。⑦スカ(透)の転もあるか。⑧すがすがしいの意(丹羽基二)。副詞スガスガから「(水流などの)滞りなく流れる状態」もいうか。⑨ス(栖)・カ(処)で居処。神の居処(丹羽)。⑩スガム(曲る;富山県の方面)の語幹で、「曲流点・曲り角」をいう例もあるか。⑪氷・氷結した雪(北海道・富山県の方言)。⑫ス・ケ(助)〜という語形もあるか。

10. ソガ —— 信濃国筑摩郡宗我郷、丹波国桑田郡宗我部郷 etc.

①ス(洲・砂)・カ(処)の転か。②サカ(坂)より(鏡味)。③サガ(嶮)の転で「嶮阻な地」か。④ソギ(削)の転か。⑤ソ・ガ(処)という語形か。⑥蘇我氏に関連する地名か、その部民によるか。

11 タガ —— 陸奥国宮城郡多賀郷、陸奥国行方郡多珂郷、常陸国多珂郡、
近江国犬上郡田可郷、播磨国多可郡。

※遠江国鹿玉郡多賀神社、近江国犬上郡多何神社、陸奥国名取郡多加神社、陸奥国宮城郡多賀神社、陸奥国行方郡多珂神社。

①タカ(高)に同じか。高地のこと。瑞祥地名的にも用いる。
②タガフ(違)の語幹で「食い違った地形」すなわち「段丘・断層崖」などを示すか。③小溝(静岡県の方言)。

12 ツガ —— 下野国都賀郡、石見国邑知郡都賀郷。

①ツギ(継)と関係し、段丘など「段差のある地形」をいうか。
②ツガフ(番)の語幹で「二つのものが対応した状態」を示すか。
③ツカの転か。(塚・高処(ツカサ)などの例から、小高い所の意味)
④マツ科の高木「栂」の植生によるものか。⑤ツ・ガ(処)の語形もあるか。

13 テガ —— 常陸国行方郡提賀郷。

①トガの転で尖った地形をいうか(崖地の称?)。②ツガの転で段差のある地形をいうか。③テ・ガ(処)という地名か。

14. ハガ —— 常陸国那賀郡芳賀郷、上野国碓多郡芳賀郷、下野国芳賀郡芳賀郷、
陸奥国安積郡芳賀郷。

①崩崖・崖。ハガス(剝)の語幹か。ハグ(剝)の語幹ハに ガ(処)のついた形か。(崖地を示す地名。全国的に見られるが、とくに北関東から東北に多い。③ハ(端)・ケ(助詞)〜の形のものもあるか。

15. コウガ —— 近江国甲賀郡、志摩国英虞郡甲賀郷、河内国讃良郡甲可郷。

コウガは、柳田のいうカガ・カヌカ・コーゲなどと同じく、採草地に他ならないという。滋賀・三重・大阪の三地とも高燥地でカガなどとまったく同じ条件である。

16. ヤマガ —— 信濃国諏訪郡山鹿郷、信濃国小県郡山家郷、筑前国遠賀郡山鹿郷、
肥後国山鹿郷、日向国諸縣郡山鹿郷。

ヤマムヘ —— 信濃国筑摩郡山家郷(也末無倍)

ヤマイヘ —— 上総国周淮郡山家郷(也末以へ)

ヤマガ・ヤマムヘ・ヤマイヘのどれか —— 筑後国御井郡山家郷。

17. オウカ —— 伊勢国飯多郡相可郷、常陸国行方郡逢家郷。

アワガ —— 但馬国朝来郡粟賀郷。

アイカ —— 出雲国秋鹿郡秋鹿郷。

アラカ —— 相模国高座郡有鹿郷、紀伊国名草郡荒賀郷。

地名研究会報　第8号

昭和60(1985)年6月2日

鹿児島地名研究会

Ⅰ 第8回例会　3月17日(日)　教職員互助組合会館小会議室

(出会者)　江平　望・片岡八郎・唐鎌祐祥・中村明蔵・永山修一・永山微弥・肥後芳尚・平田信芳・藤浪三千尋・二見剛史・本田親虎・南　清孝・脇元東明・西薗一俊(14名)

Ⅱ 薩藩名勝考読会　P.22～P.26.

〔話題となった地名および事項〕　境河、神月川、常盤谷と枯木迫、島津綱貴と桜島、水上・尾畔・野元・田毛など、一条宮と条里地名、柴立と「立」地名、郡元・中村・宮田、紫原、向嶋と桜島、郡山一之宮、著雍と湛灘。

境河(サカイガワ)

江平　地名にはあまり関係はないのですが、24ページ上段の「境河千島」。「境河まかへる汐にさそはれて浦の千島も瀬々々とふらん」とありますが、三国名勝図会と比べてみると、「汐みちくる」となっていました。

平田　「まかへる汐」でなくて、「みちくる汐にさそわれて」

江平　「満ちくる」の「満」を「ま」と見て、「ち」を変態仮名の「か」と見、「く」を下の方を長く見て「へ」と見たとすると、そのようになるわけです。「みちくる汐」とした方が、意味がつながるようです。原文がまちがいではないかと思って、三国名勝図会と比べてみました。ちなみに、境河というのは、今の新川のもとの名前です。これも三国名勝図会に「水源は犬迫村横井より出でて、田上村に来り、郡元村の海に注ぐ」と。「郡元村の辺に於ては新川と唱ふ。もと、この河流、荒田村・中村の境を流れ、海に注ぎける故、境河と云ひしを、文化三年、今の呼称とせり」

平田　昔、現在の鹿児島大学の構内を横切っていた川がありました。藩政時代に付け変えられ、それで新川と名付いたわけです。今日は江之口という切り込み隊長が居ないため、なかなか糸口がつかめないようです。それでは、私がこんな疑問をもっているということを、いくつか出してみましょう。

神月川(コウツキガワ)

平田　まず神月川。鹿児島の目ぼしい川、甲突川のことです。これは神嘗月・神月が甲突に訛ったというような解釈がなされているのですが、神月(カミツキ)という地名は、鹿児島県内の小字を調べると、一ケ所しかないのです。神月という地名がたくさんあり、それが甲突に訛ったのであれば、やり易いのですが、ちょーと無理だと思います。小字を調べていますと、高付(タカツキ)という地名が非常に多いことに気付きました(県内に40ケ所)。これがなにを意味するのかまだ判りませんが。ところで、幸加木(コウカキ)川という川が現実にあり、もう一つ高付川という川が仮にあって、これが一緒になったとしたら、甲突川という重箱読みの地名も考えられて来るなと、思います。そんな疑問をもっています。神月が甲突に訛ったとみる考え方は成立たないのではないかと。

常盤谷と枯木迫

平田　常盤谷、これは島津綱貴が枯木迫は縁起が悪いということで名前を変えさせているのですが、常盤という地名も案外あるようです。国分には常盤の苗字もあります。常盤田(鹿児島市小山田)・常盤谷(鹿児島市常盤)・常盤(国分市上小川)・常盤(国分市福島)・常盤迫(頴娃町御崎)・トキワ(竜郷町竜郷)・常盤元(東郷町斧渕)・常盤原(郡山町郡山)・常盤山(郡山町郡山)が地名辞典の小字一覧から拾えます。また、枯木迫という地名は、県下にたくさんあります。木が枯れるということは、昔の人々にとって、やはり恐しいことだったのでしょうから、神を祀って恐れたのではないかと考えられます。なお、昔の人の考え方は、枯木の反対は「青木」だろうと思います。

島津綱貴と桜島

平田　島津家20代の綱貴ですが、これは将軍綱吉の名を一字貰っているわけ

ですね。しかし、島津は大大名として、将軍家に対して一つの見識をもって行動したということを薩摩の史家は云ってるのでしょうが、綱吉の一字をもらったということだけでも、幕府に遠慮があるわけですし、それから、これは「隼人文化15号」に書きましたけれども、桜島という名前を付けるのも綱貴の時のことで、元禄十一年です。それまでは、向嶋（ムコウジマ）であったわけです。向嶋の蜜柑を献上するのに、刃向うという意味にとられては都合が悪かろうということで、桜島と名前を付け変えたようです。

本田　それは、元禄ですか。

平田　元禄十一年です。

本田　そんなに、新しいのですか。

平田　はい。

水上・尾畔・野元・田毛など

平田　水上は水上坂（ミッカンザカ）の所ですね。水が出る所で水上（ミズカミ）・水下（ミズシタ）という地名があるようです。尾畔（オグロ）という地名も多いようですが、「尾」の場合は小（オ）と御（オ）が考えられます。語尾に来る場合は、尾＝尻。尻を上品に云う意味で尾となり、尻が尾に変る地名が多いようです。（付記．その他に、松尾・竹尾などのように松生・竹生の変化とみられるものと、尾根・岡の省略形とみられるものが考えられる。松王・竹王などの変化もあるか。）　尾畔は土の色が黒いということで付いた地名のようです。野元（ノモト）は野を祀る神があったのでしょうか。元（モト）という地名の所には、大抵なにか神を祀る場所があるようです。その次の田毛（タケ）村は、竹で良いのではないかと思います。それから、これはまだ充分調べてはいませんが、高隈の隈（クマ）というのも、突込んで分析してよい地名だろうと思っています。開聞（ヒラキキ）の「キキ」というのがなんであるのか。24ページの下の方にある平沙（ヒラサ）。鹿児島県には〜佐という地名が多いので、この佐（サ）も分析の必要があると思います。

一条宮と条里地名

平田　それから、一条宮。前々回、江之口さんの報告で、一条を楠元では「イッジョウ」とよぶと云われたことを聞いて、これはと感じはじめたのですが、結論から云いますと、この一条は条里地名だろうと思います。と云いますのは、鹿児島県地名大辞典の小字を繰返し見ているのですが、小字一覧を見ている時に大坪（オオツボ）という地名が非常に多いのに気付きました。鹿児島県に大坪という地名が65あります。それで、「坪」地名を拾ってみました。今日はカードを持って来ましたが、一条とつく地名が、鹿児島市下福元、国分市上井、川内市楠元、隼人町松永、吉田町本城にあります。一重というのまで入れると、合計9になります。二条はありませんが、二重という地名が3ヶ所あります。三条は大口市にあります。四条はありませんが、四拾田という地名が樋脇町倉野にあります。五条というのは大崎町仮宿にあります。五重・五拾はその他に3ヶ所あります。六条という地名は吾平町にあります。七条もなく、八条もないのですが、八重目という地名が薩摩町永野にあります。九条はありませんが、川内市久住および樋脇町倉野に九住という地名があります。条里制にもとづく「○条」という地名は県下に散らばっていろということに気が付きました。

それから、「余り」という地名。これは郷・里の編成または班田収授の場合、きちんと割り切れずに余りが出た場合に、「余り」という地名が出来るのですが、この「余り」という地名が、県下に16ヶ所あります。今まで、国分近辺とか川内近辺は条里制によるそういう地名があっても当然だと思っていたのですけども、西之表とか知覧とか吹上とか宮之城とか東市来町、こういう所にも「余り」という地名が出て来ます。それから口之坪（クチノツボ）。まだ意味は判りませんが、これも県下に16ヶ所あります。

それから、一之坪・市坪という地名が県下に7ヶ所あります。加世田市内山田、川内市東手、姶良町住吉、姶良町東餅田、南種子町西之、南種子町中之下、吹上町永吉の7ヶ所です。二之坪が加世田市内山田にあります。三之坪はありません

が、三田坪というのが隼人町松永にあります。四ノ坪が川内市東手・加治木町反土・牧園町下中津川にあります。五ノ坪が隼人町内山田・東市来町伊作田に、六之坪が国分市下井・姶良町下名・隼人町小田・日吉町吉利に、七ノ坪が金峰町中津野に、八之坪が隼人町内山田にあります。また、七ッ・八ッ・九ッという地名が川内市東手にあります。九ノ坪が国分市上小川・串良町岡崎にあります。十五之坪というものはありませんが、十五という地名が加世田市益山に、十五（トウゴ）という地名が財部町下財部にあります。十六という地名が国分市下井・鹿児島市和田・姶良町手師に、二十五が頴娃町別府に、三十六が川内市東手と指宿市十二町にあります。

条里制は、国府の置かれた川内と国分の周辺にしか施行されていないというのが常識的な解釈でしたが、種子・屋久まで坪地名が出て来ますし、案外、平安時代を通じて、律令国家は坪割をして行ったのではないかと考えられます。今まで県下全体の小字を見なかったために、そういう坪地名に気が付かなかったのだろうと、そういうことを一条の所で感じました。ですから、この一条神社というのは、鹿児島郡の一条があった所と考えた方が地名の理解としては良さそうに思うのです。

柴立と「立」地名

平田　次に柴立（シバタテ）。これは、この前、江平先生がおやりになった「柴立と狩集」に関連しますが、地名大辞典を眺めておりましたら、花立という地名がよく出て来るのに気付きました。鹿児島では柴花というますから、柴立に対するのは花立ではなかろうかと、そういうことを感じました。

そこで、「立」という地名を思いつくままにあげてみますと、まず語尾につくものとして鹿児島県に多いのが柴立、花立、登立・上り立（ノボリタテ）。私の教え児に鉾立（ホコタテ）という子がおります。鹿児島では気がつきませんけども、杖立温泉の杖立（ツエタテ）、それから札立（フダタテ）。まあ、いろんな「へ立」がある。だから、なにか祭りをやった場所だろうということが考えられ

ます。それから「立へ」がつくものに、立野（タテノ）。立野はすでにやったのですが見過していました。立山（タテヤマ・タチヤマ）、立ヶ迫（タチガサコ）とか立石（タテイシ）とか立岩（タテイワ）とか、拾いあげればいくらでも出て来るのですが、この「立」というのは、古代の、なにか祀りをやった場所、神のヨリシロであったとみられます。柳田国男が指摘している幡立（ハタタテ）も同類とみられます。こういう地名が県下いたる所にあります。従って、この「立」という地名を整理して行けば、なにか面白いテーマが出来るのではないかと思います。

二見　あのー、人名にですね、立田（タツダ）というのがありますが。地名にあるかどうか知りませんが。

平田　はい、地名にあります。カードを作ってはいるのですが、えーと、立神（タテガミ）がありますね。立切（タチキリ）はちょっとおかしいのですが、立楠（タテクス）・立坂（タチサカ）・立島（タテシマ）・立添（タチゾエ）・立田（タツダ）・立谷（タテタニ）・立縄（タテナワ）・立花（タチバナ）。これは花立の反対です。立原（タテハラ）・立平（タテヒラ）・立松（タテマツ）・立目（タテメ）・立元（タチモト）・立山（タテヤマ・タチヤマ）etc. まあ、そういった地名が鹿児島県にあります。（立の字を含む地名が県下に52種類）ですから、この「立」の字を検討するだけでも、全然気が付いていない信仰と云いますか、消えてしまった信仰を掘り起せるのではないかと思います。

本田　立野とか立山というのは、吾々の村では共有山ですがね。

平田　共有山ですか。

江平　そうですね。知覧では「シノズ山」

本田　立野といえば、茅切り用の部落有の所を云います。立山と云ったら、部落有の共同山。

藤浪　われわれが小さい頃ですね、草を切らないでほこらかし、茂らせておいて、後で切る所を立野と云いよったですね。今、先生がおっしゃったような意

味かも知れませんが。

平田　地名に用いられた「立」から見て来ますとね。なにかおまつりをやった所という感じがします。そう云った意味で「立」が付く地名を整理すれば、面白いことが判るのではないかという問題提起をしているわけです。

二見　加治木の方に、札立という地名があります。

平田　札立なんていうのは、どんな札を立てるのでしょうかね。たとえば。

藤浪　お札を立てますよね。

平田　どんな札を立てるのですか。

藤浪　田圃の畦とか屋敷の脇とか、たとえば神社の脇に、竹に挟んで、

平田　立てるわけでしょう。ここから悪魔が入って来ないようにというように。

藤浪　そういう意味だろうと思います。隼人の辺では、やりますよね。

平田　現在でも生きていますか。

藤浪　やりますよ。意味はどうか。

平田　いや、意味はどうか知りませんけど、こう云ったことは、なにか今まで気が付いていない何物かがあるということですね。

郡元・中村・宮田

平田　その次、郡元は鹿児島郡の郡衙に由来した地名だろうと思います。中村という地名は、古い時代に発生した集落地名だと思うのですが、鹿児島県には70〜80ヶ所あります。また、意外に多いのが宮田。いたる所にあります。（県内に179ヶ所）。その他、宮脇とか宮前とか宮原とか。その宮がなにを指しているのか、字図と比較すれば、その村の最も中心的な神社がなにかということが、すぐわかるはずです。三国名勝図会あたりでも見当がつくかも知れませんが、それを裏付ける地名になると思います。

紫原（ムラサキバル）

平田　加治木にも紫原という地名がありますが、これは大隅国の特産品であった紫草の根で染料をとっていたことにもとづく地名とみられます。紫草は大隅国の特産品です。これはもう何年になりますかねー、中村先生。隼人研究会で発表しましたよね。そのあと、ラサールの文化祭でやりたいということだったのですが。

中村　だいぶ拾い出しては来たのですが、途中でやめています。

平田　あー、そうだ。「国分物語」の中に、紫草は書いてあります。要は、大隅国の特産品として紫草があったということ。ただ、現在、紫草という草は、十和田湖あたりにしか自生していないんだそうです。ですから、紫草がこちらの特産品であったということは、昔は寒かったことになります。

本田　紫草があったわけでしょうか、こちらに。

平田　あったわけですよ。これは延喜式に大隅国の特産品としてあげてありますし、三国名勝図会に各郷の特産品として、紫根というのがあげてあります。

江平　紫原を村境の原と解説した本があったもんですから、そうかなと思っていたのですが、村境とは関係ないですね。

平田　村境が訛ったとするよりは、紫草そのもので考えた方が良いのではないですか。同じ文字の紫原という小字が加治木にもあります。

中村　今云われるように、村崎というのがありますよね。

平田　村前と書いてムラサキと読むのかどうか判らないものもありますよね。えーと、私が問題にしたい地名というのは、そんなところですが。

向嶋と桜島

二見　先程の桜島のことなんですが、向嶋（ムコウジマ）というのですか。

平田　はい、向嶋という地名なんですが。

本田　中世は、みな、向嶋で出て来ますよね。桜島になるのは、いつ頃からかと思っていたのですが、元禄時代とは。

平田　このことは中村先生が中心になって出しておられる「隼人文化15号」に書いてあります。

中村　あの部分だけコピーして持って来ましょうか。

平田　「隼人文化」は残っていませんか。

中村　そのものは残っていますけど。そのものを持って来ましょうか。次の例会に。

平田　そうですね、次の例会に。ご希望の方はおもとめ下さい。

本田　「隼人文化」は、今、何号まで出ていますか。

中村　15号。

平田　桜島という地名の由来は、これで大体はっきりしただろうと思うのです。そうですね、あと13年すれば、桜島という名前が付いてから三百年になりますから、あと13年たったら三百年祭を盛大にやんなさいと云ったら喜んでいましたけど。

郡山一之宮

中村　枚聞宮の所でですね、小さな文字の二行目、蓋し郡山一宮の別なりと読まれたように思うのですけど。

平田　別つなりですか。なるほど、別つなりですね。郡山一宮に別つなり。郡山一之宮というと。

中村　意味は判らないのですけどね。

平田　そこはたいして突込まずに、枚聞宮の分身というふうな理解をして読み飛ばしたのですがね。郡山にも一之宮があるかも知れませんね。

本田　蓋し、郡山一宮に別つなり、ですか。

中村　と、読んだ方が良いんではないかということなんですけどね。

平田　そうすると、ここからもう一つ、郡山一之宮が分かれて行ったという意味に解した方が良いということになりますか。

本田　こっちが元で、向うが一之宮。

中村　向うというのはどっちですか。

平田　郡山の一之宮ですか。

本田　いや、枚聞神社。

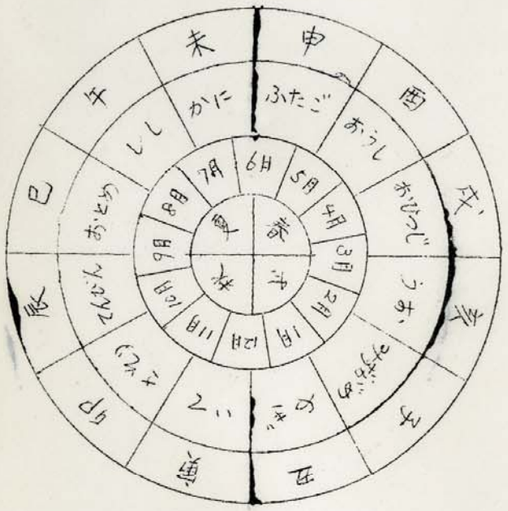
平田　枚聞の一之宮。

本田　枚聞神社が一之宮ですから、それをこっちにもって来て。

平田　それをこっちに持って来て、もう一つこっちから郡山の一之宮が分かれて行ったと解した方が良いのではないか、ということですね。

著雍と涒灘

本田　私が、一つ、皆さんに調べてもらいたいことがあるのですけどね。20ページ下の欄の5行目、「歳在著雍、涒灘閏余月、穀旦」、これなんと読むのですか、「左春坊銭棨」、読めませんけれども、歳在著雍、のここですね、そして涒灘閏余月。難しい字ばかりで、字引を引かなければわからないようなものばかりで。歳は木星のこと、木星のことを太歳と書いてある。木星が著雍にある。著雍とは、木星が戌にあることと書いてある。涒灘というのは、太歳が申にあると書いてある。そうすると、木星が申とか戌にあるというのは、これは黄道十二宮を云うのだと思うしかないのです。



黄道十二宮

- おひつじ座（白羊宮）
- おうし座（金牛宮）
- ふたご座（双子宮）
- かに座（巨蟹宮）
- しし座（獅子宮）
- おとめ座（処女宮）
- てんびん座（天秤宮）
- さそり座（天蝎宮）
- いて座（人馬宮）
- やぎ座（磨羯宮）
- みずがめ座（宝瓶宮）
- うお座（双魚宮）

十二宮は白羊宮からはじまっておりますが、牡羊座、その次が牡牛座、その次が双子座、次がカニ座、獅子座があって乙女座ですか。星座をこのように考えますと、夕方、オリオンの三つ星などが上にあがっておって、そして双子座はちょうど、ここ。シリウスは恒星のうちで一番光っている星といわれます。エジプトの人が1年を365日と$\frac{1}{4}$だということを知ったのは、このシリウスの出るのを見て知ったと云われておるようです。こっちの方に双子座があります。この辺が夏至点。夏至の太陽はここに来るわけです。これに子・丑・寅がつくわけですね。えーと、乙女座の次はないぞっけな。サソリがあって、それから、ここはウオ座。ここが山羊座です。サソリの次に、北斗七星でなくて南斗六星がある。ああ、射手座。これが黄道十二宮ですね。それで、太歳申にあるを云う、木星が申にある、戌にあるというのは、これに子・丑・寅の十二支を付けなければ判らないので、調べてみましたら、こちらから子・丑・寅・卯・辰と云えば簡単に思ったのですが、そうじゃないわけ。とんでもない所から子・丑・寅が入っているわけです。なんで、こうなっているのか知れませんから、先生方が調べて教えて頂けたら有難いと思います。これに子・丑・寅を入れてみます。ここが子なんですね。丑がここです（山羊座）。寅はここ（射手座）。逆の方向に向っている。太陽はこう廻るから、そのようにしたら良さそうなものに、逆にこうしてある。だから、渋灘と云ったら、太歳が申にあるのですから、双子座に木星が光っている時が渋灘。著雍は太歳が戌にある時ですから、ここ牡羊座にある時が著雍。この時に庚申講をする。これ（渋灘）は庚申の別名ともある。宮之城と鶴田に、県の文化財に指定されている庚申塔があるのです。その庚申塔に、この字（渋灘）を使っている。「奉待上章渋灘」とある。これは非常に珍しいから、県の方でも文化財に指定しているのだと思うんですけれども、県内にはこの二つしか、上章渋灘星を祀ってある石塔はございません。それで、上章というのが庚申。渋灘というのは、この庚申の祭をする。そうすると、眠らないでいて庚申講をするのは、渋灘星を待ち奉るですから、木星が上るのを待つ、二十三夜待とかお日待と云ったような、そういう日待・月待に相当する星待があったんだろうと思うのです。そうでなければ、こんなものがあるはずがありません。ここにある時は著雍ですけれども、やっぱりこの時も庚申講をするのだろうと思うのですけれども。私自身はこの二つしか言葉をみませんから、木星がどの位置にあっても、こんな言葉が、違った言葉が付いているに違いない。それを調べる方法を教えて頂きたい。どんな本に、そんなものがあるか。

平田　難しい内容だな。

本田　皆、まだ知っているはずです。

平田　どこの国も、星座の知識は相当あったでしょうからね。

本田　もし、ございましたら、あとで教えて下さい。

永山偽　古事類苑の陰陽五行のあたりに述べられていたような気がします。（古事類苑、方伎部、陰陽道）。

平田　でしょうね。では、時間が来たようですから、ちょっと休みましょう。

Ⅲ　問題提起　「市後柄」――― 平田信芳

今日は佐野さんが発表する順番だったんですが、都合が悪いということで急拠私が代りに立ちました。ご諒承下さい。市後柄（イチゴガラ）よりも葉山（ハヤマ）というテーマを出そうかと思ったのですけれども。これは地名研究でとんでもないことが判るという例なんですが、葉山・端山・羽山・早山・速馬・隼馬・早馬など、すべてこれらは同じではないかという発想です。鹿児島県地名大辞典の小字一覧を見ていまして、一番多く眼につく地名は、外戸（ケド）という地名なんですね。外戸三口とか外戸之下とか。外戸という地名が鹿児島県下に143あります。これはなにかというと、街道（ケド）なんです。これは昔の街道に違いないと見当をつけました。こちら（早馬）が97あります。早馬はやはり、駅伝の早馬だろうとみなされます。これらを地図の上に落として行きますと、面白い昔の道路が出て来るわけです。水上坂（ミッカンザカ）を通っていませんし、白

銀坂（シラカネザカ）も通っていませんから、それ以前の中世の道路だろうと思うのです。それともう一一、川を渡らなければならないので、「渡」に見当をつけると、猿渡（サルワタリ）・佐渡（サワタリ）・沢渡（サワタリ）などが20ケ所あります。馬渡（マワタリ）を78ケ所、現在拾い出しています。（その他に、渡が276ケ所、渡瀬という地名が169ケ所、拾い出せる）。これだけの地名を拾って地図に落としていくと、中世の道路がきれいに復原できます。地名研究というのは苦労が多くて得るところが少ないと云われていたんですが、こういう見当をつけますと、とんでもない歴史研究上の成果があがって来るのが地名研究だなと思います。会報が10号までたまりましたら機関誌を出そうということで、その際の論文にしようと思っていますので、ここではアウトラインだけを話しておきたいと思います。こういうことを話しておくのは、いつ交通事故にあって、ぽっくりいくか判りませんので。（笑）。そういう大事なことをお話ししたかったのですけども、機関誌1号の論文に回したいと思っていますので、今日はアウトラインだけで止めます。昔の街道がわかると、なにが判って来るかと云うと、郡衙の位置とか駅とか、そういうものをつかみ易くなって来ますし、それから、この道路の上に塞之神もの っかって来るだろうと思うのです。これ（早馬）は、間違いなかろうと思います。

今日は市後柄（イチゴガラ）という地名について話をします。5万分1図霧島山の左下の方、牧園町と霧島町との境に、市後柄という場所があります。ここに中学時代の同級生の牧場があり、学生時代、夏休みにしょっちゅう遊びに行っていたのですが、その頃から気になっていた地名なんです。

本田　「ガラ」と読むのですか、「ツカ」とは読みませんか。

平田　「ツカ」とは読みません。「ガラ」です。

本田　これを「ガラ」と読まずに「ツカ」と読む例があるもんですから。

平田　日本地名索引は、これを「いちごえ」と読んでいるのです。どうして「いちごえ」と読んだのか、その理由は判りませんが。

そこで、プリント1枚目の右側、（2）の市来崎ですが、この地名、5万分1図では市来崎（イチゴザキ）と読みます。日本地名索引はこれを「いちこざき」と読んでいます。それから、角川地名大辞典は「いちくざき」と読んでいます。

本田　入来文書に出て来るのは、仮名で書いてあります。それはまあ、濁りはうってありませんが、「いちこさき」とあります。

平田　「いちこさき」ですか。そこで、電話帳を繰りますと、市来崎という方が鹿児島市に2軒ありました。思い切って電話をかけまして、お宅はなんと読むのですかと尋ねると、「イチキザキ」でした。それから、大口の方には市後崎（いちござき）という姓があるそうです。だから、「いちござき」と「いちきざき」は、別の意味だろうと思います。5万分1図・日本地名索引・角川地名大辞典にそれぞれ違ったよみ方があるということは、よく判っていない結果だろうと思うのです。それを今から明らかにしていきたいと思います。

そこで、市来崎と書く「いちござき」と市後柄（いちごがら）では、「いちご」は共通するのではないかと考えて、角川地名大辞典の小字一覧から拾いあげましたら、それだけ見つかりました。

まず、市後町。これはイチゴ○○という所に町が出来て、市後町になったのでしょうか。市後平・市後迫・市後柄・市後原・市後段・一胡山・一五川・一合柄・一合田・一合谷・市五ケ迫・イチゴ迫・イチゴ木場・イチゴ山・イチゴガラ。17のイチコチ迫。これなどは、明らかに、イチコケ迫と書いて「いちごが迫」と読んでいたものを「チ」に誤写してイチコチになってしまったのだろうと思います。18、吹上町和田の苺平。この中で、イチゴというので、まちがっていないのは、13・14・15・16・18。これだけは、いわゆる食べるイチゴを意味しており、あとは皆、あて字ということになります。

二見　13・14・15。カタカナで書いてあるのは、そういうふうに書くのですか。

平田　そのように書いてあります。

二見　地名自身が？

平田　ハイ。ですから、イチゴの意味だろうと思ったのです。そこでイチゴというのは日本全国に例がないかと見ますと、日本地名索引には、愛知県に市子、兵庫県に市午、宮崎県に覆盆子鶴というのが出て来ます。覆盆子というのは、和名抄巻十七に、覆盆子、和名以知古と出て来ます。覆盆子は食べる木苺を意味しています。そこで、これらのイチゴという地名は、食べる木苺が生えているところから付いた地名だとの見当が付いたわけです。そうすると(2)の市来崎は、本来は「イチゴザキ」だったかも知れません。これを「イチキザキ」と読むようになったのは、イチキは櫟木と考えられ、イチキ崎とイチゴ崎が混乱したのだろうと思われます。

次に、柄(ガラ)についてですが、これを「ガラ」と読むのであれば、鹿児島弁では河原のことを「カアラ」と云いますから、苺河原(イチゴガアラ)が「イチゴガラ」に変ったにちがいないと想像できます。そこで、柄(ガラ)について、子供の時から足柄山の金太郎でよく知っていたわけですけども、これもつながりがあるのではないかと思ったわけです。

万葉集を読む年頃になり、万葉集を読んでいて不思議に思うのは、足柄に二通りの読みがあることです。阿之我利(アシカリ)の箱根または阿思我良(アシガラ)の箱根。箱根山にかかる枕詞として「アシガラ」「アシカリ」という地名が用いられるわけですが、万葉集の注釈を読んでいますと、そこにカッコでくくったような、アシガリはアシガラの訛音とする説、アシガリが正しい地名だとする説、アシガリ・アシガラと呼ばれる地域は異なるという説などがあります。最後の説については、万葉集の一つ一つの歌をとりあげて、どこを歌ったものかという分析をし、そのような解釈をしている研究者がいるようです。

鹿児島県の小字を眺めていますと、「アシカリ」「葦刈」に眼がとまりました。

1. 芦刈(アシカリ) ――― 鹿児島市下伊敷
2. アシカリ ――― 加世田市津貫

3. 芦刈(アシカリ) ――― 姶良町平松
4. 葦刈 ――― 菱刈町市山
5. アシカイ ――― 頴娃町上別府
6. 芦苅(アシカリ) ――― 喜入町中名
7. 東芦刈・西芦刈・芦刈比良 ――― 川辺町本別府
8. 足狩郷 ――― 上屋久町宮之浦
9. アンカル・芦刈渡瀬 ――― 中種子町野間
10. 芦刈 ――― 上甑村小島
11. アシカリノ上 ――― 宮之城町広瀬
12. 芦狩・下芦狩 ――― 吹上町与倉
13. 小芦狩・上芦狩・下芦狩 ――― 松元町入佐

アシガラ・アシカリは、湖とか河原に生えている葦に基づく地名で、葦が生えている河原が葦河原(足柄に転化)であり、葦を刈る所・刈る仕事が葦刈となります。そう考えると、葦刈というのは働く側から見た地名であり、アシガラ(葦河原)というのは支配する側から眺めたとらえ方ということになります。同じ所を、庶民は葦刈の場と受け留め、為政者は葦河原というような理解をすることもあり得るのだなと、そういう解釈も成立つのではないかと考えたわけです。

そこで、市後が食べるイチゴ、イチゴと云いましても、われわれが普通口にするストローベリー;西洋苺は、17c.ですか、オランダ人が持って来ているわけですから、それではなくて野原でつまんで食うイチゴですね。これが食べ物だという見当がつくと、今度は同じような例を探すことが出来ます。たとえば、「ミョウガ」と付いた地名がたくさんあるわけです。明ケ窪・明ケ谷・明賀谷・明下・明我、以下全部茗荷(ミョウガ)です。終りの方にある若荷谷は茗荷谷の誤字としか思えないわけですね。なお、「茗」というのは本来は「茶の葉」「茶の木」のことを云いますが、「みょうが」には「茗荷」の字をあてています。同様な例で生姜(しょうが)が生えている処に付く地名が、正ケ谷・昌ケ迫・正賀牟田・

勝賀野など。仁良は「荳（にら）」。勝負谷の菖蒲（しょうぶ）。棗吾（つわぶき）が生えている所から付いた津和崎・津和瀬戸・津和野・津和谷。蕗（ふき）にもとづく吹谷・吹原・福貴野・富貴原。それから、久見崎・汲川・久味木などは茱萸（ぐみ）にもとづいた地名で、こんな地名が同類と考えられるわけです。

イチゴ・ミョウガ・ショウガ・ニラ・ツワブキ・フキ・グミ、こんなものを奈良・平安時代の人々がつとめて取って食べていたんだなという見当がつく、そういうことを示す地名だろうと思うのです。なお、芹とか蕨の付いた地名というのは、わりにあて字が少ないのですが、イチゴとかミョウガ・ショウガなどはあて字が多いようです。

次に、市来崎（いちきざき・いちくざき）を調べている時に、「いちく」と「いちき」の問題を整理しなければいけないなと思ったのです。そこで「いちく」と「いちき」の問題に移ります。プリントは2枚目になります。

郡名では、延喜式刊本に、肥後国の菊池は「ククチ」と振り仮名を振ってあります。それから、薩摩国では高城（タカキ）。駅名では市来（イチク）・高来（タカク）と、延喜式兵部省に書いてあります。そこで、和名抄郷名で「来」という文字を用いているものを全部拾いあげてみました。（後掲レジュメ）

来（キ）と読むのは熊来・安来・来待・来島・来次の5例です。来（ク）と読むのが田来・来縄・来民・高来の7例。来（コ）と読むのが朝来の2例。来（クル）と読むのが来島の1例。和名抄のよみと現在のよみと違っているのが板来と高来。まあ、これも変化しているのか、していないのかよく判りませんけれども、和名抄郷名17例のうち変ったとされるのは2例にすぎません。だから、地名というものはそう簡単に変るものではないとみてよいでしょう。

市来と同類の地名を日本地名索引で調べますと、「イチキ」というのがそれだけあります。（後掲レジュメ）。加治木・垂水、それから宮崎県と三重県に。それから、「イチギ」と読む例が4県あります。「イチイギ」と読むのが大分県に、「イチノキ」が愛知県に。「イチキ」というのは、「櫟木」か「市木（市の所にあった木？）」か、「ただ一つの木」か、その地名の由来を考え易いものは拾えるのですが、「イチク」と呼ぶ地名は全国を見ても出て来ないようです。

この前、江平先生が「クビス」と「キビス」の転化を云われました。踵について仮名で明らかにクビス・キビスと表現してあるもののみを拾って表にしてみました。（後掲レジュメ）。そうすると、クビスとキビスの変化というのは、非常に古い時期に成立しているということが判ります。和名抄を見ますと、「踵、和名久比須、俗云岐比須」とあります。方言でキビルというのが西日本に多く見られ、鹿児島だけでなく、島根・山口・愛媛・福岡・長崎・大分・宮崎でもキビルと云うようです。そこで、「ク」と「キ」の入れ替り例を探しているのですが、現在、通勤列車の中で甲子夜話を読んでいますが、こんなものに気が付きました。「壱岐には狐最も多し----- 平戸の者、壱岐の者を嘲笑ふに、壱州に多き者はてん・たて、ゆたて」。「てん」という動物がいますが、そのことを「たて」というのだそうです。「ゆたて」というのはイタチのことのようです。それから「睦走るくつね」、壱岐の方言でキツネのことをクツネと云ったようです。「くつねも亦俗言。されども吾邦古言の存するなり」と。平戸の殿様松浦静山は自分の所を身びいきするわけですから、俺の所は昔からの言葉が残っているのだと説明しているわけですが、まあ壱岐ではキツネのことをクツネと云ったようです。一般的なものでは「この畜生」を「こんちきしょう」と云う。それから、鹿児島では前回話題になった「ウスク」と「ウスキ」の例があるわけですが、文献資料ではほとんどが「ウスク」ですね。鹿児島県地誌も「ウスク」と書いてありますから、「ウスキ」というようになったのは非常に新しいのだろうと思うのです。だけど「ウスク」という地名の類例はあんまりないのですが、「臼木（ウスキ）」という地名は鹿児島県にはたくさんあるわけです。「臼をつくるための木」から付いた地名です。だから「宇宿（ウスキ）」という地名があってもよさそうな気がします。永山先生、どうですか。宇宿と書いてですね、苗字では「ウスク」が多いのですか、「ウスキ」が多いのですか。

永山　「ウスキ」というんじゃないでしょうかね。「ウスク」は聞かんようです。

平田　みんな「ウスキ」さんですか。

永山　そう、数は多くないですけどねー、みんな「ウスキ」で、「ウスク」と読む人は知りません。

平田　ああ、そうですか。ウスク・ウスキにはまだ謎がありそうですね。そこで、まあ、結論的なものを書いておきましたが、「地名は音で伝えられる呼称であるから、本来保守的で旧態を保ち続ける性質をもつ。強力な行政権力の行使がない限り、地名の変化は容易に起らない。」　たとえば、島津の殿様がこう変えろと云ったら変ることもあるでしょうが、庶民の間では訛ったりしても、変るということはそうないんじゃないかと考えます。

ところで、クビスがキビスに変ったのは事実ですので、私の歴史家としてのロマンを申しあげますと、クビスからキビスに変る可能性については、次のようなことが考えられます。21代の雄略天皇が亡くなると、星川皇子という皇子を天皇に擁立しようとする動きが起きます。その母親を吉備稚媛といいます。吉備臣がいわゆる吉備一族の血を継いだ皇子を天皇に立てようとして、難波近くまで軍団を編成して攻って来ますが、乱は敗れ、星川皇子は殺されて、吉備臣はむなしく引き返すわけです。吉備の軍団がクビスを返したことを、掛け言葉でキビスを返したというように笑ったとしたら、そういうことばが生まれる可能性もあるなというふうに思います。それ以外に、クビスからキビスに変るようなですね、きっかけというのは、日本の古代では、事件としてはなさそうな気がするのです。これは、私の一つの夢です。そういうようなことであれば、「ク」から「キ」に変るということは考えられ、「クビス・キビス」ということばが生まれたんだなと解釈は出来ますけれども、なかなか「ク」から「キ」には変らないのではないかと、そう考えたわけです。これは、江平先生のお考えに対して、真向から反論を述べたわけですが。

江平　いえ、私はただこう思っているのです。クビス・キビスが同じことであればそれで良いわけです。

平田　ああ、そうですか。

江平　あの、先だって書いたものはですね。クビス・キビス、どっちでも云えるということであれば、それで良いんじゃないかなと云うことなんです。

平田　えー、ですから、クビスとキビスは、まあ、そういうことです。

江平　そうしたら、私の論にあてはまるわけです。クビレ・キビレ、反って同じだということを証明してもらえたような気がして。

平田　ああ、そうですか。

江平　古くから、同じ言葉があったんだなあと。

平田　クビレた地形であれば良いわけですね。だけど、先生、「ク」から「キ」に変るというのは、なかなかないということです。

江平　変ったというのじゃなくて、クビレ・キビレがあったということですね。ここにこうありますから。和名抄にしても、もうすでに、クビス・キビスという言葉があったということですから。反って、同義語でいえば、いろいろ同じ言葉が存在したということを、と思って聞いておりましたけれども。

平田　ああ、そうですか。はい、あとは肥後先生、司会をお願いします。

〔質疑応答〕

肥後　一応、発表を終りまして、これに質問のある方。

江平　イツキとイチキというのは、別に関係ないものでしょうかね。

平田　確かにそれは考えなければいけないのでしょうが、いきなりは結びつかないと思います。

江平　厳島について、イツクとイチキは関係ないかと思っていたことがあったもんですから。

平田　それを考えている人は多いようです。厳島神社も市杵島姫を祀っていますしね、神を祀る「イツク」から「イチキ」に変ったんじゃないかという考え

方をする人は多いようです。

江平　そちらの例の方をあげていただけたらと思っているのですが。

平田　地名の転化というのは、はっきりとした裏付けがない限り、転化説はとれないと思うのです。現在、角川から「日本語の語源」という新しい本が出ていますが、ほとんど次から次に変ったという例を我田引水的にあげております。そのように解釈すると面白いのでしょうが、そんなことを必っていたらどのようにでも解釈できるわけですから、学問の基盤というものはなくなるんじゃないかと思います。

南　市来崎という苗字はたくさんあるのですか。

平田　市来崎ですか。鹿児島県の電話帳には、2軒しかのっていなかったのですが。

南　以前、熊本出身の若い女の先生で市来崎という方がおられ、熊本にもあるのかなと、その時思ったものですから。

平田　それはあるんじゃないですか。イチキというのは、神を祀った木でなくて、榊の木。榊の木で神を祀るのかも知れませんけれども、そういう木が生えている崎に市来崎という地名が付くのでしょうね。だから、日本全国ありうるのではないですか。

永山　「斎」と書いて、イツキと読みますよね。あれとの関係はないのですか。

平田　いや、ですからね、神を斎くというのは、斎宮（イツキノミヤ）とか、いろいろあるわけで、それがイチキと結びつけば簡単なんですけどね。

本田　榊の木を神様の木とするのは、もうずっと昔からのことで、今も守られていますしね、神社には神木として榊の木を植えてあるから。

平田　榊の木を神木として、そして、神を斎くわけですか。

本田　いや、榊の木を神木としてある所は、今だって、神社の中に多いということです。一位の木でしょう、なんと云ったって。

平田　そりゃ、そうですね。

南　イチゴというのは、食べるイチゴということでしたけれども、面積を表わす一合という考えは全くないもんでしょうか。

平田　面積の一合というのはどれくらいのものですか。

南　一合とれる広さ。

平田　いや一。

南　あんまり狭いですか。

平田　あんまり、そんな。一斗蒔とか一升蒔というのは聞きますけどね。もっとも、昔の記録は〇合〇夕〇才まで書いてありますけどね。中村先生、そんな狭い単位の田圃というのがありますか。一合田（一合蒔の田？）。

江平　この柄（ガラ）というのは、河原のことですか。

平田　そういうことだと思うのです。

江平　そうしますと、原（ハル）と墾（ハリ）。芦刈というのと芦河原というのが、原と墾の関係。原っぱのことですよね。〇〇原（ハイ）という「ハリ」、笹原（ササバイ）とか新原（ニイバイ）とか。昔と似てきゃしませんか、どうですかね。

中村　鹿児島では河原（コラ）というのが多いのじゃないですか、どうですか。

平田　コラ。火と河原（ヒノコラ）ですね。

中村　河原（カワラ）は？

藤浪　河原（カワラ）？

片岡　指宿に河原湯（コランユ）という所がある。

本田　私どもの村は、河原（カワラ）ということは全然なくて、皆、河原（コラ）になっている。

永山　新河原（シンゴラ）と、はじめは「シンゴラ」とは、なんだろうかと思った。

平田　鹿児島の場合、河原（コラ）と読むのが多いんですけどね、すべて河原（コラ）じゃなくて、河原（カワラ）もあるわけです。読み方として。ただ、河原（カワラ）と読むのは、それこそ地元の人が河原（コラ）と呼んだのでなくて、他所から来た偉い人たちが河原（カワラ）と名付けて、そのまま伝わって来る地名というのはあると思うんです。

江平　河を「コ」と読むのは、河上（コカン）だとか、川添（コセ）、加世田の干河（ヒゴ）。だから、河を「コ」と、鹿児島語で、昔、云うていたことがあるんじゃないか。

中村　これは全然別の話ですけど、民俗学の小野先生の話ですけどね、谷山に「コムケモリ」というモイどんがあると。小迎森という苗字もあったんですね。ところが、その「コ」というのはなんだと。私自身は神を迎えることと考えていたら、小野先生は、そうじゃないんだと。「コ」は河を表わす。それで、永田川の向うにある川向うにある川向いの森なんだということを云われて、ああ、なるほどと思って。

本田　川向うが「コムコ・コムケ」

永山　金峰町に「コマエ」という地名があり、「河前」と書きます。

中村　谷山には、その「小迎（コムケ）」という苗字と、「森」という苗字があるんですね。もともとは小迎森（コムケモリ）と云っていたんです。それが今では、小迎をとる人と森をとる人に分かれている。

本田　私の所の温泉場に湯川内（ユガワチ）があるわけですが、室町中期までは、仮名で「ゆかわち」とあるわけです。ところが、いつ「かわち」が「こち」になったか知れんが、現在では「ゆごち」です。入来中学校のそばの田圃の所を中世文書は皆「こかわち（小川内）」と書いていますが、今は「こごち」とよびます。いつ「かわち」が「こち」になったのか。江戸時代でしょうけれどもね。「かわち」が「こち」になる。

永山　吹上町と金峰町の境に、観音河内と書いて、「カンノンコッ」という

のがある。

本田　川内（かわうち）は、江戸時代になると、皆「こち」と読む。

二見　清辺にもですね、川窪川（かわくぼがわ）と書いてですね、コッボンガワと云っています。

片岡　清辺では河守を「コブイ」と云います。コウモリだと思っていましたら、河守と書きます。

平田　コブイをコウモリとみなして、河守の字をあてたんじゃないですか。（笑）。

本田　それは判らん。あて字も多いですからね。

平田　地名はむしろ音が大事であって、ここにあげたようなあて字がたくさん出て来るわけですから。

永山　住字二字を用うべしで、佳い字を使いますからね。苗字もいろんな字が出て来ます。

中村　平田先生、節用集というのはもっと上にあげてよいのではないですか。

平田　ああ、そうですか。

中村　室町の頃まで。

平田　私が持っているのが、その出版した年代だものですから、その出版の年代で入れたのです。

南　三十六というのがありましたね。指宿にもそれがあって、以前から解釈に困っていたのですが、難しくて。条里制の地名に結びつけてよいのですね。

平田　そう解釈した方がよいのではないでしょうか。今まで、どの歴史地図を見ても、川内と国分しか書いてないのです。種子。屋久まで律令国家はある程度坪割をしたと解釈した方が、出て来る地名から考えてよいように思います。その辺、どうですか、中村先生。

中村　条里と班田が昔は必ずイクォールでしたけれども、最近ではそうでもないのじゃないかという問題も出て来てるのではないですか。さっき云われたよ

うに、平安ぐらいに、律令制が崩れてから出来た条里というのがあったらしく、現在、問題になっているんじゃないかと思うんです。だから、もっと年代を下げて見直してよいと思います。

平田　三十六とか二十五とか、七三坪とか六の坪というのは、それで解釈する以外にないわけですよね。

南　三十六の所に里（リ）という地名があり、路（ジ）という地名や坪（ツボ）という地名などが散在するのは？

平田　ミー、ですからね、指宿の方でも坪付を行なったと解釈していいんじゃないでしょうか。

永山　加世田や川辺の方に市坪さんという苗字がありますよね。それから、指宿が十二町ですか。

南　十九町というのもありますよ。

永山　やはり、これらも、条里制のなんかですか。

本田　十町もありますよ。

平田　十九町もあるんですか。

江平　江戸時代は十九町もあります。それが、東方と西方にある。

南　十町、十九町、それから開聞の十町。十九町というのは、今はないわけです。

平田　十町・十二町などの一般的な云い方は、神社の社領について、大社が十二町、中社が十町、小社が八町という割当てが平安の頃あるわけです。だから、十町、十二町というのは、そういう神社の領域を示すことばとして、それが残ったという解釈をしなければならないわけでしょうが。

南　指宿の場合は、指宿神社あたりが十町です。それから、南側のあとから発展したかと思われる所が十二町、それから北西の方が十九町なんです。

平田　それはどういう解釈をすればいいんですかね。最初は中社の領域で十町、あらたに拓いた所が十二町、さらにのちに十九町の土地を拓いて十九町と、

面積全体でそういう地名を付けてしまったことも考えられないわけではないですね。

本田　角川の小字名でですね。役場の人の字しちがいが相当あるわけですよね。私が残念に思っているのは、植脇に舟瀬戸口というのがあるんです。

平田　舟瀬戸口（フナセトグチ）ですか。

本田　鹿児島県にあんまりないから、私は舟瀬戸口は奈良時代の河港を示す非常に貴重な地名と考えるのです。こういう地名が残っているので、入来はありがたいと思っているわけです。入来の橋も舟瀬橋ですから。こんな地名がどこかに残っていそうなものだと探してもないわけです。ところが、植脇にあるんです、実際に。もともと入来ですけどね。倉野にですね。川内川がこう流れてるでしょう。山崎の方から、こう、東郷の方へ流れるわけです。ここが倉野ですと、こっちは東郷の南瀬（ハウゼ）。南瀬なんかも舟瀬の一種でしょうけど。ここに洲（シマ）があるわけです。ここが狭くなっていて、ここに舟着場が昔あったわけですね。舟着場があった。ここから（地名が）出てるんですよ。ところが、字絵図には瀬戸口と書いてある。ここは瀬戸じゃないです。これ（舟）が脱けている。調べてみると、舟瀬戸口なんです。これは非常に大事な舟瀬戸口という地名なのに。ここに舟がかりの港があって。そこの戸口というのが字名である。実際、残っているんですよ。「舟」が脱落しただけのこと。

平田　ここで気が付きましたが。説明しませんでしたが、猿渡（サルワタリ）というのは猿でも渡れる深さを云い、馬渡（マワタリ）というのは馬で渡らなければならない深さだから、そう簡単に人間は渡れない。要するに、川の渡り場にこういう地名が付いたのだと解釈したいわけです。それから、私が使っている方法ですけれども、角川の小字は半分ばかりは振り仮名を振ってありませんから、あれを全部見ながら片っ端から興味のある地名を拾いあげて、カードに作っていくわけです。そうしたら、仮名を振っていない地名も、同じ県内ですから、大体の読み方の見当がついて来ます。県内には同じ地名がどこかに出て来ます。それ

から、逆に振り仮名を振ってあるのは、役場の人が読み違えたなと見当がつくわけです。たとえば、明ケ窪（ミョウガクボ）なんかを「アケガクボ」と仮名を振ってあります。

二見　今の資料の最初のところに「市後」とありますが、これは市場・定期市の「イチ」とは関係ないものでしょうか。「市」があった後にあった町ということは考えられませんか。

平田　そこまでは、ちょっと考えられません。

二見　鹿児島では「市」というのは、歴史的にどういう位置づけになっているのでしょうか。

平田　それはよく知りません。

二見　昔から、地名によく○○市と付くのですが。

平田　鹿児島に「市」という地名はあまりないのじゃないですか。「町」という地名が出て来るのが、平安末期じゃないでしょうか。

二見　この「市」というのは、どういう所に使うのでしょうかね。

平田　いわゆる物々交換の市、あきないの市というのは、なかなか鹿児島では。島津氏が領国経営をやるようになって、諏訪神社の大祭に市が開かれ、諏訪市なんていう云い方が出て来ますが、祭に伴う市が鹿児島県の市の発生ではないでしょうか。

本田　中世文書で市場が出るのは、入来文書は一つしかない、鎌倉時代は。あの、中村ですけどね。

中村　今の市場の字を書くのですか。

本田　市庭と書いてあります。私にもその税金をください。すなわち「御配分あらんことを欲す」と書いてありますから。すべての税金は、国の方と荘園の方、近衛さんの方と地頭が半分わけしたわけですから。その市庭でとれる税金は国の方と近衛さんの方でとるだけでなくて、私の方にも下さいと、わざわざ註を書いてあるんです。そうとう賑かな市だったろうと、私は思うのです。鎌倉時代

の市として出るのは、それだけしかないようです。

中村　平田先生のお考えでいきますと、あのー、鹿児島で一番古い地名で探せるのに、菱刈というのがあるのですね。

平田　あー、「カリ」

中村　刈ね、それはどういうお考えですか。

平田　菱を刈るでしょうね。ヒシカの里ではないでしょう。

中村　そうすると、支配者の方が付けた？

平田　菱刈は菱の実を刈るだから、菱刈は働く側の発想。

中村　ああ、そういうたのですか。

平田　はい。

片岡　菱の実は刈るのではなくて、摘むものではないですか。（笑）。摘んで廻る。菱を刈るということはありえないと思う。

平田　いや、イチゴ狩とかキノコ狩とか、とることをすべて狩で表現します。

本田　紅葉狩もあります。

片岡　収穫の意味の？

平田　収穫の意味の狩ではないですか。------今日は江口・原口と、弁士が二人いないと淋しいですね。

肥後　いろいろ貴重な意見も出たようですが、時間が来たようですから。どうもありがとうございました。

〔市後柄〕

(1) 同類の地名 ―― 鹿児島県地名大辞典（角川）小字一覧より

1. 市後町（鹿児島市上福元）
2. 市後平（指宿市岩元，指宿市新西方）
3. 市後迫（指宿市新西方，溝辺町崎森，大隅町月野・坂元）
4. 市後柄（霧島町田口，牧園町持松）
5. 市後原（牧園町持松）
6. 市後段（大隅町野方）
7. 一胡山（加治木町日木山）
8. 一五川（三島村片泊）
9. 一合柄（吉田町宮之浦）
10. 一合田（有明町野井倉）
11. 一合谷（鹿児島市下福元）
12. 市五ケ迫（末吉町二之方）
13. イチゴ迫（財部町南俣）
14. イチゴ木場（東市来町養母）
15. イチゴ山（東市来町湯田）
16. イチゴガラ（鹿児島市川上，輝北町市成）
17. イチコチ迫（牧園町石膳）
18. 苺平（吹上町和田）

日本地名索引より
- 市子（いちご；愛知）
- 市午（いちご；兵庫）
- 覆盆子鶫（いちごずる；宮崎）

和名抄巻十七．覆盆子．和名．以知古。

(2) 市来崎のよみ

1. 5万分1図 ------ イチゴザキ（市来崎）
2. 日本地名索引 ----- イチコザキ
3. 角川地名大辞典 ---- イチクザキ
4. 苗字 -------- イチキザキ，市後崎（イチゴザキ）

(3) 足柄のよみとの関連

万葉集に2通りの読み
- 阿之我利（アシカリ）
- 阿思我良（アシガラ）

- アシガリはアシガラの訛音とする説
- アシガリが正しい固有の地であるとの説
- アシガリ，アシガラと呼ばれる地域が異なるとの説

小字の例
- 芦メリ（アシカリ）------ 鹿児島市下伊敷
- アシカリ ---------- 加世田市津貫

(4) 植生地名の例

1. 茗荷（みょうが）------ 明ケ窪・明ケ谷・明賀谷・明下・明我・苗我・冥賀・名ケ迫・妙ケ迫・妙賀ノ段・蓑荷谷・茗ケ谷・若荷谷（若は茗の誤字）
2. 生姜（しょうが）------ 正ケ谷・正ケ迫・菖ケ迫・正賀牟田・小ケ野・勝賀野
3. 韮（にら）------ 仁良
4. 菖蒲（しょうぶ）------ 勝負谷・少分谷
5. 蓼吾（つわぶき）------ 津和崎・津和瀬戸・津和野・津和谷
6. 蕗（ふき）------ 吹谷・吹原・福黄野・富貴原
7. 茱萸（ぐみ）------ 久見崎・汲沢・久味木

芹・蕨のついた植生地名は，わりとあて字が少ない。

(5) 市来 ——「いちく」・「いちき」の問題

1. 延喜式刊本

郡名 肥後国 …… 菊地（クヽチ）
郡名 薩摩国 …… 高城（タカキ）　（巻二十二 民部上）

駅名 薩摩国 …… 市来（イチク）
駅名 薩摩国 …… 高来（タカク）　（巻二十八 兵部省）

2. 和名抄郷名で「来」を用いているもの

① 来（キ）と読む地名 …… 熊来（クマキ，能登国）・安来（ヤスキ，出雲国）・来待（キマチ，出雲国）・来島（キシマ，出雲国）・来次（キスキ，出雲国）の5例。

② 来（ク）と読む地名 …… 田来（タク，筑前国）・来縄（クナワ，豊後国）・来民（クタミ，肥後国）・高来（タカク，常陸国）・高来（タカク，相模国）・高来（タカク，豊前国）・高来（タク，肥前国）の7例。

③ 来（コ）と読む地名 …… 朝来（アサコ，但馬国）・朝来（アサコ，紀伊国）の2例

④ 来（クル）と読む地名 …… 来馬（クルマ，淡路国）の1例

⑤ 倭名抄のよみと現在のよみが異なるもの）

板来（イタク，常陸国。潮来イタコの地名が現存）

高来（タカク，肥前国。タカキの地名が現存）

17例中、変化（?）しているもの2例。

3. 同類の地名 …… 日本地名索引より

① イチキ …… 市来原（加治木）・市木（奥水）・市木（宮崎）
市木（三重）

② イチギ …… 市木（島根）・市木（愛媛）・市木（熊本）
一木（大分）

③ イチイギ …… 一井木（大分）・櫟木（大分）

④ イチノキ …… 一ノ木（愛知）

「イチキ」の場合は、市来・市木・一木・櫟木など、その地名の由来を想定しうる同音または類似の地名を拾い出せるが、「イチク」と呼ぶ地名は全国を眺めても見当らない。

4. 「くびす」と「きびす」

	くびす	きびす
8c	山背郷計帳	
10c	和名抄	和名抄・宇津保物語
13c	保元物語	宇治拾遺物語
14c	曽我物語	太平記
16c	天草本伊曽保物語	
17c	笈の小文	
18c	節用集	節用集

小学館「日本国語大辞典」・旺文社「古語辞典」などの用例をもとに作成。

○ 和名抄 巻三。　踵 …… 和名 久比須、俗云岐比須。

○ 方言「きびる」 …… 結ぶこと、しばること。「くびる」の変化。
鹿児島の他に、島根・山口・愛媛・福岡・長崎・大分・宮崎で用いる。

○「く」と「き」の入れ替り例。

① 壱岐には猟最も多し …… 平戸の者、壱岐の者を嘲笑ふに、壱州に多き者はてんたて・ゆたて・畔走るくつわ（くつわも亦俗言。されども吾邦古言の存するなり）と云。〔甲子夜話続篇 巻九十二〕

② この畜生（コノチクショウ）⟶ コンチキショウ

③ 宇宿　ウスク ⟶ ウスキ …… 臼木？

地名は音で伝えられる呼称であるから、本来保守的で旧態を保ち続ける性質をもつ。強力な行政権力の行使がない限り、地名の変化は容易に起らない。